



臨床場面における反復される語りに関する研究 — ナラティブアプローチの視点から —

坂中, 尚哉

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2016-03-25

(Date of Publication)

2017-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6565号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006565>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

臨床場面における反復される語りに関する研究

—ナラティブアプローチの視点から—

平成28年3月

神戸大学大学院 人間発達環境学研究科

坂中 尚哉

目次

第1部	序論	5
第1章	外傷体験に基づく反復の所在と行方	8
第2章	外傷的記憶から物語的記憶への変換	11
第3章	「語り直す (re-telling)」営み	13
第4章	クライアントの「反復される語り」に対するセラピストの関与について	16
第5章	本研究の目的	26
第2部	本論	
第1章	自閉症における「反復される語り」と差異	27
第1節	自閉症における反復	27
第2節	事例の概要	28
第3節	事例の経過	29
第4節	事例の考察	35
	(1)「反復される語り」へのセラピストのなぞれなさ	35
	(2)事例Aの反復されるテーマとその語りの差異について	36
第2章	アスリートの「反復される動作の語り」	39
第1節	アスリートの心理臨床	39
第2節	事例の概要	39
第3節	事例の経過	40
第4節	事例の考察	52
	(1)イップスに伴う反復される動きの語り	52
	(2)動きを共になぞる	55
第3章	うつ病における「反復される語り」	58
第1節	メランコリー（親和）型うつ病に見られる反復	58
第2節	事例の概要	58
第3節	事例の経過	59
第4節	事例の考察	66
	(1)事例Cの反復されるテーマとその語りの差異について	66

(2) クライエントの身体性をなぞる	69
第4章 「反復される語り」と布置関係	71
第1節 主体的に来談すること	71
第2節 事例の概要	71
第3節 事例の経過	72
第4節 事例の考察	77
(1) 主体性を生きる	77
(2) 語りの差異としての日常的出来事の語り	79
(3) 「生きた時間」を生きる	80
第5章 外傷的記憶に関する「反復される語り」	83
第1節 世代間伝達における反復	83
第2節 事例の概要	83
第3節 事例の経過	85
第4節 事例の考察	110
(1) 反復される夢を巡って	110
(2) バウム表現を巡って	111
(3) 日常性の語りが意味するもの	112
(4) 「反復される語り」のプロット（筋立て）の差異	114
第6章 本研究の総合考察	117
第1節 臨床事例研究に対する自己省察的検討	117
(1) 臨床実践におけるナラティブアプローチの定義と心理療法の基本姿勢	117
1) ナラティブアプローチの定義	117
2) クライエントの語りをなぞる営み	118
(2) 事例研究の目的	120
(3) 研究の基盤をなす認識論	120
1) 心理療法家かつ研究者としての臨床的基盤	120
(4) 事例研究における研究の方法論及び研究技法	122

1) 逐語記録	122
(5) 事例研究における研究関心と生成された知見	123
1) 5 事例の「反復される語り」に対するセラピストのなぞりのあり方	123
2) 5 事例の「反復される語り」とその差異について	126
3) 「反復される語り」に対する分からなさという中庸さの維持	128
(6) 臨床仮説モデルの生成	130
1) 「反復される語り」におけるプロットと意味生成の臨床仮説モデル生成	130
2) 「反復される語り」に対するセラピストの関与に関する臨床仮説モデル生成	131
第 7 章 結びにかえて	135

引用文献一覧

第1部 序論

筆者は、これまでアスリート及び指導者としてスポーツ競技に専念してきた個人的な歴史がある。スポーツでは、必ず基本技術の反復が求められる。例えば、サッカー競技では、ボールを止める、蹴るという動きを繰り返し繰り返し行いながら、自分の身体とボール、自分と他者（味方・敵）との関係作りに取り組む。おそらくスポーツ競技の種目を問わず、その熟達過程には、技術の反復がその土台になり、反復過程をなくしてパフォーマンスの向上は考えられない。

作家、村上春樹は、マラソン愛好家として知られているが、2010年に出版された「走ることについて語るときに僕の語ること」はマラソン愛好家のバイブルとなるほど、村上個人のマラソンへの向き合い方に共感が得られている。そのなかで「30キロまでは、『今回も良いタイムが出るかもな』と思うのだが、35キロを過ぎると身体の燃料が尽きてきて、いろいろなものごとに対して腹が立ち始める。そして最後は『からっぽのガソリンタンクを抱えて走り続ける自動車みたいな気分』になる。でも走り終えて少し経つと、苦しかったことや、情けない思いをしたことなんてけろっと忘れて『次はもっとうまく走るぞ』と決意を固めている。いくら経験を積んだところで、年齢を重ねたところで、所詮同じことの繰り返しなのだ」と42.195キロメートルの内的なプロセスに触れる。そして「僕らにできるのは、執拗な反復によって自分を変更させ（あるいは歪ませ）、そのプロセスを自らの人格の一部として取り込んでいくことだけだ・・・（小説を書くプロセスは）ランナーとして体型を作りあげていくのと同じ種類の作業」と語る。ここに、ランナーであり続けることと小説家であり続けることの不即不離な関係が示唆されるとともに、反復過程の中でしか生まれない何かがあることを暗示していると思われる。また、日本人のトップアスリートの一人に大リーガーの鈴木イチロー（以下、イチロー）があげられる。2008年1月にNHKで放送された「プロフェッショナル、仕事の流儀」の番組では、イチローの知られざる素顔に迫ることとなり、その反響は大きい。なかでも、渡米して以来、イチローの昼食は弓子夫人の手作りカレーライスを食し、「それ以外食べた記憶がない」と語る。イチローは、「毎回同じカレーを作る、弓子のほうがプロだ」とも言う。

こうしたイチローの反復過程を大事にする姿勢は、食事に限られたことではない。試合前のウォーミングアップのメニューや打順を待つまでの動作を同じであることを求めている。とりわけ、バッテリーボックス内のルーティン化された所作はよく知られている。イチローがこうしたルーティン化された反復的な所作をなぜ行っているのであろうか。以下の対話からその手がかりが得られる。

イチロー「あそこの空間でしか分からないことって必ずあると思うんですよ。バッテリーボックスでしか感じられない感覚、においだとか、雰囲気だとかね。あそこでしか生まれられないものってあるから厄介なんですよ」

アナウンサー「メジャーでこれだけ歴史に残る偉業を達成しておきながら、なぜなおも、その先を追及することができるのですか？ ジョージ・シスラーの記録を超えちゃったんですよ」

イチロー「そんなの関係ないですよ。僕の達成感の問題ですよ」

アナウンサー「達成感はまだ十分じゃないんですか？」

イチロー「ないんですよ、ほとんど」

アナウンサー「じゃあ何を見ているのですか、その先は？」

イチロー「それは分かりません。見えないからできるんです」

アナウンサー「じゃあずっと走っていて何かを探って正面に何か光る星があるんですか？」

イチロー「光る星を何かイメージはしていますが、真っ暗ですね。真っ暗ですよ。でも、もがいて苦しんでいると、何か光が見えてくると信じているんです。何にもなく、まあ、いつか光が見えるわ、って思っていたら、一生見えなと思いますね」

このイチローとアナウンサーの対話に読み取れるように、イチローのルーティン化された所作の一つ一つは、バッテリーボックスの中でしか出会えない崇高な「何か」に対しての彼なりの作法であり、儀式であろう。また、ルーティン化された反復の背後には、目先の目的や結果に向けて直線的に歩む姿ではなく、深く暗闇の世界にとどまろうとするイチローの野球に対する真摯な姿勢を感じる。

上述の村上春樹やイチローの例にみられるルーティン化された所作は、能動

的な反復行為と理解できる。一般的に、反復とは、「繰り返すこと。たびたびすること」（広辞苑第6版, 2008）の意のように同一または類似のことを繰り返すものとされる。我々の社会生活でも、同じような時間に起床し、自宅を出て、ある目的地へ向かい、再び自宅に戻り、眠りにつく。そして、朝がくる。この繰り返しの中で時を刻み、日々の生活を過ごすように、ルーティン化された所作を意識せずとも能動的に反復している。

一方、反復現象は、先の能動的な反復とは異なり、受動的な反復現象がある。例えば、反復夢やフラッシュバック現象など、意識下のもとで繰り返し本人に再帰する。また臨床現場においても「同一の出来事を繰り返し語り直す（re-telling）クライアントが多いのに気づく」（森岡, 2011）と指摘するように、同じ出来事を何度もとりつかれたように語るクライアントがいる。

スポーツ場面においては、繰り返される怪我や身体症状など、本人が望まなくとも反復される場合がある。中でも、普段できていた動きが突如できなくなるといった動作失調や腹痛、ヒステリーなどの身体化を繰り返すアスリートが見られる。筆者も、幼少期からサッカー-競技にのめり込み、プロサッカー選手を目指していた中で、反復される身体症状に悩まされた経験を持つ。

大学アスリート時のことであるが、プロ選手に近づくための大きな全国大会前日に、突如左足小指に激痛、腫れが生じ、スパイクが履けない状況となり、大会を通じて十分なパフォーマンスが発揮できなかった。皮肉なことに、左利きの筆者にとっては、左足小指は、競技遂行上とても敏感な部位でもあった。当時、「なぜこの大事な試合前に痛み出したんであろうか」と自分の身体に裏切られたことへの悲しみ、怒り、焦り、不安があった。その後、こうした身体化が大一番に同様の症状が反復された。不思議なことに、大学アスリート引退後、一度も同様の症状は生じなかった。

筆者は、この身体症状の意味を見出すことに自ずと関心が向き、スポーツ心理学、臨床心理学への道に向かわせていた。両学問を学ぶ過程は、この受動的な反復体験の意味を少しずつ見出すプロセスとも相重なり、今では、スポーツ心理学、臨床心理学への道へ誘ってくれた身体症状に感謝する筆者がいる。

このように、反復現象には、能動的な反復と受動的な反復に大別でき、本研究では、後者の受動的な反復現象に焦点を当てて論じることになる。

第1章 外傷体験に基づく反復の所在と行方

臨床場面において、受動的な反復現象として、外傷体験によるフラッシュバックや反復夢が想起される。

トラウマ／外傷という用語の起源は、当然ながら外科学にあり、精神医学領域では、神経学者オッペンハイムが外傷神経症という用語を提唱したことにはじまる（松木, 2015）。岡野（1995）によると、外傷とは「人間の心がある衝撃を受けて、その心の働きが不可逆的な変化をこうむること」と外傷を広義に捉えているように、人が生きているということは多かれ少なかれ傷つきながら生きているということである。

一般に、外傷は、自然災害や不慮の事故、犯罪との遭遇など予測できない急性の出来事の外傷体験と、虐待体験等の慢性的な外傷体験とに大別できる。その経過において、前者は、急性ストレス障害（ASD: Acute Stress Disorder）、後者は心的外傷後ストレス傷害（PTSD: Post Traumatic Stress Disorder）と分類される。また急性状態には、心理的、物質的な安心・安全の確保及び提供といった具体的な支援を要し、PTSDをはじめ慢性状態においては、医療的な支援に加え、心理臨床的な支援も必要となる。とりわけ、PTSDなどの外傷体験がその個人に深く生き続けるかどうかは、外傷体験そのもののインパクトの大きさより、むしろ外傷体験が他者に共有されないことと関係がある。例えば、レイプが心的外傷になるのだとすると、レイプされたことで周りから白い目で見られ、かえって男性不信に陥り、周りの男性の所作すべてが侵入的であるようなパターンが反復されるだろうし、児童虐待が問題なのはそれが一時的なものではなく、それが繰り返される周囲の環境への不信感が蓄積された場合と考えられる。すなわち、外傷体験を保護する器のなさが心的外傷の持続と関係しており、外傷的な出来事に伴う外傷的記憶が自分の意志に関係なく反復されること、それ自体が心的外傷を強化すると思われる。

さて、精神医学及び臨床心理学領域において、フロイトがヒステリー症状や外傷への関心を寄せている。Young（1999）によると「(フロイトの) 外傷的事態への関心は二つの期間に限られている。第一は 1892 年から 1896 年の間で、ヒステリー発作の原因を調べていた時である。第二は第一世界大戦に続く数年間で、戦争の余波の中で、ごく短期間であるが、戦争神経症の病因に注意を向け

ていた」とする。

フロイトは、これまでの夢は願望充足の一形態であるという自説から「外傷神経症に生じる夢の特徴は、患者をその事件が起こった状況に繰り返し、繰り返し連れ戻し、患者はその状況から遁走し目を覚ますが、そこはまた別の恐怖のただ中である。外傷体験がたえまなく患者に押し迫ってくるという事実はその体験の強烈さの証拠である。すなわち、患者は、みずからの心的外傷に固着しているといってもよからう」（フロイト、1920/小此木、1970）と夢のなかで反復されるフラッシュバックの存在を認め、「快感原則の彼岸」への修正と向かわせている。すなわち、「快感原則の彼岸」の論文において、第一次世界大戦後の戦争神経症が目立って多くなってきたとき、繰り返し悪夢を見ること、戦場での出来事がフラッシュバックすることなどの神経症症状に関心を寄せているが、フロイトはこの論文で、人間が示すある非常に基本的な特徴に触れている。それは、人間が不快なことが空想や夢の中で繰り返し、特にはあたかも自ら進んで再体験しようとする傾向である。フロイトはこれらの行動がそれまで唱えていた神経症概念の「自我と自我によって斥けられた性的欲動との葛藤から生まれる」メカニズムが戦争神経症をはじめとする外傷性の神経症にはこの理論が合致しないとする論理矛盾に気づいている。このように戦争神経症は、既成理論の限界を知らしめる大きな契機であったと思われる。

その後、「想起・反復・徹底操作」（1970）において、「反復強迫と転移ならびに抵抗の関係が、まず第一にわれわれに興味を惹く」と述べ、フロイトが「反復」は分析作業による想起に対する抵抗として現れる点を見いだしている。そして、フロイトは「では何が反復されるのか」と問い、「抑圧されているものを源泉とし、そのなかか発して、既に明らかに彼の本質の中に浸透しているものすべて、彼が抑圧していたもの、現実し得ないでいたさまざまな精神的態度、病的性格特性などを反復するのである」とし、総称して「忘れていた過去」として捉えている。

ところで、なぜ人にとって不快や苦痛であるはずの体験を自ら繰り返してしまうのだろうか。フロイト(1970)は、「心的な生のなかには快原則を越え出るような反復強迫が本当にある、という仮説である。われわれはまたいまや、事故神経症者の夢や子供の遊びへの原動力をこの強迫に関係させるのに乗り気に

なっている」と言及し、フロイトの1歳6ヶ月の孫エルンストの糸巻き遊びの観察から反復強迫の概念のメタファーを得ている。

孫は、ときどき手に持っていた玩具を投げ捨てては、「オーオーオーオー」という声を発し、フロイトと母親はこれを「いない」の意味に解釈し、この声を伴った放り投げを一種の遊びと見なしている。ある時、母親が不在のときに、孫が糸巻きを持って同じ遊びに興じ、細いひものついた木の糸巻きをベッドの下に投げ入れる動作をしながら「オーオーオーオー」と声を発し、それを取り出すと「アーアーアー」という声を出している様子が観察された。これらの音声を「いない」と「いた」という意味であると解釈したフロイトは、母親不在の不快さを繰り返し再演し、遊びのなかで再体験していることを述べている。

この「いないいない・ばあ」遊びの持つ心理学的な意義は、本来ならば母親不在が不快状況であり、苦痛な体験であるにも関わらず、孫のエルンストは自ら喜んで遊ぶ姿が繰り返し観察したところにある。通常、1歳6ヶ月のエルンストにとっては、母親不在の状況とは極めて受動的な状況であり、置き去りにされた感覚を伴うであろう。しかし、糸巻き遊びを通じて「いない」と「いた」を再演し、自ら能動的に不快に満ちたその体験を遊びに転じ、不快さをコントロールすることとなった。このように受動的な不快さを繰り返し体験しつつも、その不快さを主体的に関与し、コントロールすることにより、不快さが快の体験につながることをフロイトは射抜いている。

以上のように、外傷的な体験を主体的に遊びや語りとして創出し、再び自身自身に繰り返し引き戻すプロセスが、その外傷体験の仕方や意味づけの変容に寄与するものと類推される。一方、フラッシュバックや反復夢などの外傷的記憶に基づく体験は、意識下に固着した状態であるために、受動的な反復により症状化されると考えられる。

第2章 外傷的記憶から物語的記憶への変換

臨床場面におけるクライアントの反復される語りについて論じた一人にフランスの心理学者 Pierre Janet（以下、ジャネ）がいる。Ellenberger（1980）によると、「フランス心理学界、精神病理学界の最大の巨匠の一人でありながらもフロイトの栄光の陰に隠れて、ジャネは不当に評価されている」と述べるように、そのエランベルジェの主著の「無意識の発見」の「ジャネの心理療法」の論文の登場まで、長きに渡って精神医学界からの忘却がなされていた。

ジャネはフロイトとともにサルペトリエール病院のシャルコーのもとで、臨床的研究をはじめており、主に催眠暗示を研究の対象とし、ヒステリー患者の治療にあたっていた。なかでも、ジャネ(1923/1981)は、生活史上の重要な出来事を反復することを特徴とする「夢中遊行状態」に注目し、心理学的狭窄などのヒステリー理論を展開している。ジャネはヒステリー症状の背後には、「固定観念、つまり暗示に似た心理学的機序から発生した、誤ってはいるが固定した核心に由来している」と述べ、暗示や催眠術、心理教育が患者の治療にもっとも真価を発揮するとしている。しかしその後の「人格の心理的発達」(1929)では、これまでの暗示や催眠に依らないクライアントの主体的な語りが治療上重要であることを述べている。たとえば、「いったい夢中遊行の現象とは何であろうか。体験の復誦 (récit, レシ) の障害である…神経衰弱に罹った多くの人、この能力を失っている。彼らは一定の期間、多少とも正しい幾つかの行動をするが、それを復誦することができない。彼らは見たことを物語るができない。そこに夢中遊行の本質がある…記憶の本質は語ることである。自分の一生のある時期を思い出したということは、それをちょうど他人に語るように、自分自身にむかって語ることである」と夢中遊行の背後には、症状を意識的に体験できていないとともに、それを語るができないことが起因すると述べる。こうした視点に対して江口（2007）は、「体験を言語化することの意義を見据えている」と評価する。

さらに、ジャネ(1923)は、「精神自動症」と呼ばれる行動的なヒステリー症状や部分的運動麻痺、知覚麻痺、筋肉拘縮などの「部分自動症」の原因には、もっぱら思い出すことができるけど普通羞恥によって人から隠したい外傷体験がその理由であることに触れ、「治療の役割は、患者が自分の固定観念を語り、さら

に繰り返し語りつづけて、ついに語りとその記憶とがその記念碑的記憶として
いる事件と情動とから独立しなければならない。ひとたびこの段階まで到達す
れば、患者と治療者とは最終段階へと進む」と外傷体験を繰り返し、語り直すこ
とによってクライアントの症状が回復することを指摘する。また、「語り手は、
どのように語るかがわかっているだけでは足りず、偶発的な事件を、どのよう
にして、おのれの人生の他の事件と関連づけ、そして万人の人格の本質的要素であ
る生活史の中に位置づけるかがわかっていなければならない」と述べるように、
クライアントが外傷体験を想起し、語り直すことを通じて、外傷的記憶が物語
的記憶への変換と成り得る可能性を示唆していると言える。

第3章 「語り直す (re-telling)」 営み

今日、多種多様な心理療法実践が行われている。近頃特に、心理臨床の理論や技法がさまざまに分化、発展しているために、いずれの技法に依拠したものかと迷うことがあることを初学者から耳にする。村瀬 (2009) は行動療法を例に「行動療法の日常語とかけ離れた表現や一見操作的とも見える技法に馴染まない感を抱く人も、育児のプロセスで、行動療法の原理が幼児と養育者との呼吸のあった、暖かなやりとりの中にさり気なく織り込まれて展開している」と言及するように、あまたの技法や理論を越えて、心理療法に通底する物の見方がある。

近年、そうした各技法や理論をつなぐ働きとして、ナラティブという発想が注目されている。これまでナラティブという視点は、医学、臨床心理学、社会学、人類学など多様な領域で使用され、依って立つ立場によって語られ方は様々である。森岡 (2011) は、ナラティブ・ベイスト・アプローチを以下の 7 つの領域に分類する。①分析心理学の日本における展開 (河合ら, 1984) , ②家族療法の展開からのナラティブ・セラピー (White & Epston, 1992 他) , ③医療人類学の新しい動向・エスノグラフィーとしての精神医療 (Kleinman, 1988; 江口, 1995) , ④NBM (Narrative Based Medicine) の導入 (Greenhalqwertgh, T & Hurwitz, B, 1998; 斎藤・岸本, 2001) , ⑤ライフストーリーのアプローチ; 質的研究法として (やまだ, 2000) , ⑥精神分析におけるナラティブ学派 (Spence, 1982) , ⑦サイコヒストリーの方法 (Erikson, 1977)。このようにナラティブの発想は、おおよそ 1990 年代以後に医療領域や心理療法領域で導入され、発展してきている。

一般的に、ナラティブは、語り、物語の意を汲んでいる。たとえば、森岡 (2015) は「ナラティブとは、プロットを通じて出来事が配列され、体験の意味を伝える言語形式」とし、語り手の主体を尊重する。また、村久保 (2015) は「物語る人は、聴く人を得て物語れることは確かなこと」と述べるように、ナラティブには、誰とその語りを共有したのか、といった聴き手という他者も重要になる。そして、臨床場面におけるセラピストは、クライアントの語りを通して、クライアントの私の物語を生成する同伴者と言える。

さて、本研究は、臨床場面における「クライアントの語り」の素材から内的世界を理解し、普遍的知見を得る方法論としてナラティブの視点を活用し論じる。本研究におけるナラティブとは、森岡（2015）の定義を踏襲し、クライアントによって「語られた言葉と言葉で語られ得ない言葉」を最大限、重視する姿勢を維持し、クライアントの問題や葛藤の性質、過去の出来事を反復する「ナラティブ」に注目する。なぜなら、反復される語りには、「ナラティブの難破」（Frank, 1995）が考えられ、臨床場面に訪れるクライアントの多くは、死別、人間関係のもつれ、病い、抑うつなど、各々の私の物語の破綻が見られる。こうした傷つく出来事や体験は、誰しもが人生のなかで経験するものであり、そうした出来事がときに、「著しい方向喪失の感覚や人生ストーリーの破綻が生じ得る」（Crossely, 2000/2009）契機になる。やまだ（2000）は人生の物語が必要とされる局面について「自己と他者の亀裂や、前の出来事と後の出来事とのあいだの裂け目が大きくなったとき、それをつなぎ、意味づけ、納得する心のしくみが必要なとき」と述べている。臨床場面において、クライアントは、傷つきや痛み、喪失などの体験を繰り返し語るにより、不可解で断片的な記憶の再構成を行いながら、私の物語を生成することになる。しかし、そうしたクライアントの反復される傷ついた体験の語りを聴き続けることはそうたやすい事ではないことは、心理臨床実践に携わるものであれば容易に想像できる。

森岡（2002）は、土居健郎「方法としての面接」、神田橋條二「精神療法面接のコツ」、サリヴァン「精神医学的面接」を例に、「臨床面接法の達人たちはおおむね、対話場面の全身活動性を強調する点で共通している。たとえばコミュニケーションの言語レベルよりは音声のレベルでのやりとりを重視する」ように、セラピストはクライアントの語り同様に非言語的なやりとりを注視する必要がある。そして下坂（1998）は「精神療法的面接の基本は、なぞりなぞられる関係を作ることだといえる」と述べ、ていねいにその場のクライアントの語りをなぞることが重要であることを示唆する。次章では、臨床場面における「語り直す（re-telling）」営みにおける「反復される語り」に対して、セラ

ピストはどのようにクライアントの語りをなぞり得ているのか，セラピストの関与のあり方について先行研究から論じる。

第4章 クライエントの「反復される語り」に対するセラピストの関与について

従来、事例研究において「反復される語り」はどのように論じられてきたのであろうか。「反復」概念は、心理臨床場面に限って言えば、「たくさんの錯綜した夢を語る」や反復強迫的にフラッシュバックが起こるなどのクライエントの繰り返す行為化に焦点づけられている。

1983年に創刊された「心理臨床学研究」に掲載されている単一事例研究を取り上げ、「反復」概念が事例研究でどのように取り上げられているのかについて検討する。1983年～2005年の心理臨床学研究を概観すると、「反復」をキーワードにした事例研究は、恒吉(2003)の「母親面接における面接者-来談者関係「反復」としての視点」の論文が唯一であった。おそらく、恒吉論文に限らず、心理臨床の基盤にはクライエントの語りを聴くという反復される関係があることが自明のことであるために、あえて反復を取り上げる研究が少ないと推測される。

恒吉論文における「反復」とは、「母親面接における面接者と母親との関係を、母親と子どもや他者との関係の反復として理解し、母親面接に生かしていくものである」と述べるように、クライエントの対象関係の在り方がクライエント-セラピスト関係においても「反復」する現象が見られることを解釈し、技法として有効であることを述べる。ここでいう「反復」は、精神分析の用語を用いるとすれば「転移」と考えられる。このように、恒吉論文では、クライエント-セラピストの転移的關係を「反復」と置き換え、対象関係の在り方を解釈することの意義を論じているが、その上で、クライエント-セラピストの關係性が基盤であることを強調している。

さて、1983年～2005年までに掲載された単一事例研究111論文のうち、35論文に、「語りの反復」に言及した内容が確認された。表1は、事例論文内に「繰り返し話す」「同じ話しが続いた」などの事例経過におけるやりとりが記載されている箇所を抜粋し、そのやりとりに対するセラピストの関与や意味づけがどのようになされているかの2点についてまとめたものである。

表 1 心理臨床学研究における単一事例に見られる「反復」的記述の一覧

NO	著者 (年号)	症状等	クライアントの繰り返される語り	セラピストの関与・理解
1	細野純子 (1987)	対人恐怖	幼稚園の演劇発表会で失禁し、心的外傷体験として残っていることを、後で述べる治療過程の 2 期から繰り返して語っていくことになる。	対人場面にのぞんで緊張してしまい、「失禁するような自分」を内から外へと出すと嫌われるという恐怖が原体験となつて、その後も各発達段階において修復することができず、同型のパターンを繰り返していると言える。
2	上地雄一郎 (1991)	抑うつ		「母親から非難されたりすると、S 子が自分の感じ方の正しさに自信をなくし、自己処罰的になるので、Th は「S 子の問題には家族全体の問題がかかわっている。自分だけを責めすぎないように」といった支持を繰り返した。
3	窪田文子 (1991)	強迫神経症	「体内に悪い物質が蓄積して、将来異常のある子どもが生まれるのではないか」ということが不安になり始め、薬や食事の中身の安全を家族や電話で医者にくり返し確認するようになる。	
4	岡秀樹 (1992)	境界例	ノートに繰り返して記載された問題は次の 3 つにまとめることができた。(1)醜形恐怖、被害感(2)親とのトラブル(3)過食、ノートには同じことが反復的に表現され、また時には「死にたい」という思いや、「てめーらはそれでも親かよ、ぶん殴って殺したい」という感情が、ノートにあふれんばかりに書き殴られていたこともあった。	同じ問題が延々と書き連ねられている患者のノートを見て、無力感を味わっていた。そこで何とか打開への手がかりを得ようとして、患者に筆者のコメントに対するコメントを求めた。それに対して患者は、<先生も大変なのだ>と述べた。筆者にとっては意外な形ではあったが、この危機も何とか乗り越えられた。
5	田多香代子 (1992)	摂食障害	初期の頃の夢では危機的な状態を示唆するものも少なくないが、しだいに誰かとともに飲食をする、異性と交わるといったテーマもくり返されるようになる。	
6	菅佐和子 (1993)	境界例	4 つの話題くり返し語られるようになった。それらは、A 子の面接のメインテーマとして、ずっと続いていくものであった。①母親の死をめぐって②父親と妹について③「見捨てられる」という不安④自己像について	<あなたの求めているものはわかる気がする。でも、それを他者が外から与えるのは無理なこと。私は、あなたがその寂しさに耐えられるようになるのを手伝いたい>という気持を、噛み砕いた言葉で語り続けることだけであった。
7	斎藤清二 (1993)	対人恐怖	現在の問題はすべて「胃が壊れた」ことから来ており、けっして自分は怠けているわけではないのに、両親も他の人もまったくわかってくれない」というような内容が、くり返しくり返し訴えられた。 「母親にはまったく通じない。僕は 1 年間まったく同じことを言い続けてきたのだが、ようやく Th が少しわかってくれるようになった」	夢以外の話の内容は基本的には第 2 期とかわりばえのしないものが続いていた。 第 3 期は、Th は Cl の「進展がみられないのは、Th の消極的な姿勢に一因があるのではないか」とも考え<話を聞いているとこちらがズッシリと重さを感じ、からめとられて身動きできないような気持ちになってくる>と率直に Th の体験を言葉にする。
8	木谷秀勝 (1994)	非行少女の母親	非行少女が両親に「あなたたちの愛情は一体何ですか?」、「窮屈な愛情ならもういらぬ」といった両親への訴えが手紙に繰り返されていた。	

9	東千冬 (1994)	統合失調症	C1 に Th は終始、知らなくともこれだけの本を読み続けてきたことに価値がある、とくり返し伝えた。毎回聖書を持参して辞書のように気になる語を数珠つなぎのようにひいて、時間が過ぎる。	C1 からくり返しそれ（真理の法則）が「言葉」として発せられ、またこれによって、周囲との相互関係を揺るがし、苦痛にさらされている状況を目の前にしていると、それは患者の救いを求める声に聞こえてならない。 Th は、くり返しのページめくりにつきあった。そんな時間を C1 は「天国のよう」と話す。
10	田中康裕 (1995)	対人恐怖	A 男の書いてくるレポートを筆者が声を出して読み、A 男がノートに記録してきた夢を自らの声で報告するということが繰り返された。	
11	長谷川裕美子 (1995)	摂食障害	「両親に無理やり入院させられた」という不満を一方的にくり返し話し続け、こちらの問いかけには耳を傾けようとしなかった。	F 子の些細な動きを見落とすことのないよう観察し、一方それに対して、必要以上に解釈はしないでありのままを受け入れ、その行動を理解したという反応を F 子に投げかけた。その行為をくり返すことによって、次第に F 子と筆者との信頼関係が確立していった。
12	中原睦美 (1995)	脳卒中後遺症	（老人ホームへうつることについて） 「なぜ、この病院にいられないのか。何年も病院にいる人がいるのに」と娘と一緒にになってくり返し訴えている。	
13	李敏子 (1995)	摂食障害		対象恒常性の未成立な B に対して、Th はたえず言葉や行動など目に見える形で行為を伝えようとした・現実を死なずに生きて、復習しないことが必要なのである。治療者は不在の後に再び好意を持って現れることを、何度もくり返さねばならない。
14	野々村説子 (1995)	人格障害	「母は二人も子どもを連れてきたらえらいやると言っ手伝ってくれる。けど、私なら頑張るとか、いつまでも手伝うのは世間体が悪いと言う。それで母にさせて悪いという気になって自分で頑張ってやるけれど、疲れてくると、愚痴を言ったり、腹を立てたりしてしまう」とくり返し述べた。	次々に話題を転じる態度を治療に対する抵抗と理解し、指摘・解釈をくり返した。
15	橋本やよい (1996)	境界例心性		C1 は攻撃の渦のなかにいる。S の学級の親たち、先生、夫、と攻撃する者は形を変え、くり返し襲ってくるのはなぜか。そこで反復されているのは、C1 が言葉もない小さい頃、何の守りもないまま圧倒的な怒りにさらされ震えていた「よるべなさ」ではないか。

16	中山美智子 (1996)	不登校を抱える母親	C1の話はまとまりがなかった。自分のことからA子のこと、夫とB、母と妹、叔母たち、夫の両親と兄嫁、学校生活などの入り交じった話がくり返される。登場人物も煩雑多彩で、主語が省かれた話にThは混乱しがちだった。	「母と同じようにやって来てA子にも不満があるとは思わない」とくり返すC1に、Thは「母親からあなたへ、あなたからA子へと流れ伝わったものをA子があなたに突き返してくる。母親とあなた、あなたとA子との間で混同が起きやすい」と伝えた。
17	大石英史 (1997)	摂食障害	「症状がよくなるらない」という話のくり返しに加え、これまでになく拒絶的な沈黙が増えてくる。	Th：面接をいったん中止し、一緒に散歩してみるのはいかがでしょうかと提案する。C1『話しても同じところに帰ってしまう感じがあるので、それがいい。でも話をしたいときもあります』というので、そのときは随時面接に切り換えることを約束する。
18	青木聡 (1997)	過敏性腸症候群	多彩な身体症状（下痢、腹痛、背中のかゆみ、不眠など）について執拗に訴え続けた。（#1）、延々と症状に着いて途切れなく訴え続けた。（#3）	「身体症状の訴え」が執拗に続くとき、それを聴き続けることはThにとって容易ではない。その理由の一つには、Thは心身相関の考えに基づいて、身体症状の原因となっている「心の問題」を見いだそうとするが、C1はあくまでも身体症状を執拗に訴え続けるにとどまることが多い。これがThの徒労感と突き放し傾向を強めてしまうと考えられる。
19	前川美行 (1997)	アトピー性皮膚炎	反復夢「暗い道を一人でウロウロしている。一軒の明るい家を見つけなかのぞくが、ここは私の家ではないと、またウロウロ歩き回っている。	
20	窪田由紀 (1997)	統合失調症	過去の悔やみと被害関係念慮中心の訴えのくり返し。・・・「中学時代はしっかりしていると褒められていた。今は子ども・・・今はまだ高校生くらい。だから未成年でもないのに隠れて煙草を吸ってしまう」（#16）、この日も「自分は年相応じゃない」とくり返し語った。	A君は、不仲な両親を繋ぎ止めるために良い子を演じてきた過去とそれにもかかわらず家が壊れてしまった無念さをくり返し語った。そうすることで彼が完全に巻き込まれていた両親の問題から距離をとろうとしているようだった。
21	吉良安之 (1997)	主体感覚の乏しさ	自分が失敗したことを思い出し、「あれはまずかった」とくり返し考える。	毎回同じような話をして帰っていくC1に対して、(Th) 何とかしてやりたいと思いつつも手がかりをつかみにくく、無力感や、やりきれない気分を感じていた。・・・これはC1も感じている、自分の体験いどうにも対処できない無力感ややりきれなさとかかり共通した、同型的な体験であったと考えられる。

22	立川晃司 (1997)	受刑者	自分が失敗したことを思い出し、「あれはまずかった」とくり返し考える。	(箱庭) 同じパターンで置いていくAに対して、筆者のほう次第に焦りや動揺を感じ始め、移送されるまで何も変化しないのではないかとさえ感じた。こうやっていつも同じような作品を作り続けること自体に、彼の抱えている問題の根深さを認識させられるような気がした。
23	前川美行 (1998)	膠原病	性的なことへの嫌悪感や会社での辛い状況は毎回のように話題になっていた。グルグルと周辺の事実を話し続けた。	夢3のようにグルグルと回っていたようであった。そのとき、Thが、言葉を止めて感じてほしい、その場に留まってほしいと思って箱庭へと誘い、砂(大地)と直面することになった。
24	太田裕一 (1998)	対人恐怖	メンバーBさんが怖いこと、付き合っていた女性に対する気持ちが冷めてしまい、グループの女性メンバーCさんが好きになって告白したがふられてしまったこと、デイケアにも退屈してきたので、仕事をしたいが、親が死ぬまで働かなくてもいい気持ちがあること、という三つの話を順番に繰り返すことが続いた。	<面接の間隔があくことで同じ話しの繰り返しになってしまうこと>を、Aさんも求めているのではないかと告げると「そういうところがあるかもしれない。つらいけどやってみます」と言って、毎週面接することになった。
25	後藤由紀子 (1998)	境界例		(電話)「病気が突然出てきた、鉛がつかえているようで苦しい」・・昼夜を問わず延々と続く。・・<辛抱するしかない、電話をしても変わらない、自分で決めて結果を見よう>とThは繰り返し伝える。「冷たいんだね。見放さないですよ」と言うY子。
26	佐々木由利子 (1998)	摂食障害	(第1期) 繰り返し訴えたテーマは高校転校をめぐるのCIと母親の感情の行き違いとそこからもち越してきた恨みとこだわりだった。(第2期)「先生はカウンセラーとして一緒にいると言わざるをえなかったと思う」と再度蒸し返したとき、Coはとうとう胸を断ち割って真心を見せることなんてできない、真剣だから怒っている>と怒ってしまった。	CIが蒸し返すたびに謝りもし、とりなしてきたCoはあるときとうとう堪忍袋の緒が切れて怒ってしまう。一般的にはこうした対応は、治療者の巻き込まれを示すもので望ましくない。それでうまくいったのは僥倖で、それまでに培ってきた基盤があってこそであろう。・・このときにCIに伝わったのはCoが本当に怒っているという端的で純粋な事実だったろう。
27	森田喜治 (1999)	自己臭	「自分は父親の悪いところばかりを受けついでしまった。この体格がもう少しよかったら自信ももてたし、そうしたら大学も行けていたと思う。最近母親も私のしつこい会話に嫌気がさしてきているのか、何も話してくれなくなってきた」	
28	小俣和義 (1999)	神経症		「転部していい?」と何度もThに尋ねるようになる。Thが<自分のその『やりたい』という気持ちが大事。やりたいことをやるのが一番だと思うよ>と繰り返し伝えていくと、漫画や絵画、工作、詩などの創作活動を意欲的に行うようになり、自分の内的な世界を精力的に表現していく。

29	三宅永 (1999)	ヒステリー		治療のなかで、箱庭の枠が一つの保護を与えたと思われる。興味深いことに、C1自身が、箱庭のなかでさらに「守り」というテーマを繰り返して表現し、そのことがまた治療的に働いたようである。
30	山愛美 (2002)	神経症水準ではない可能性 神経症水準	「私の過去を返して欲しい」と繰り返された。	
31	津田真知子 (2001)	神経症水準		「家を出ていきたいのに出ていけない」と初期から続いている同じような不安を繰り返して訴え、時間がきても終わろうとしなかった(#37)。Thは、この回にそれまでになく彼女のダラダラした訴えに苛立ち、時間を守らせてくれないC1に腹立ちを感じていた。
32	羽間京子 (2002)	自己愛の傷つき	#1「気がつく」「長」になっていることの繰り返しだった・・・人から持ち上げられるとその気になってハイになっている間は人に暗い面を見せられず、気がつく「長」になって気づいて嫌になり、辞めて放り出すことを繰り返して期がする」	インテーク「自由になりたくて」「自由を求めて」と「自由」と繰り返すことが印象に残る。 #2、「(輝いていた) 20代後半は全国を渡り歩き楽しかった」と、虚勢を張った感じで話しつづける。C1のやや一人よがりな言動に、C0は少々辟易し退屈感も感じつつ、同時に、悲しみも感じると言うアンビバレントな状態に居た。 (考察) 「筆者が#2で感じた少々の「退屈」は、自己愛に問題を抱えた人とともに居るときに治療者が陥りやすい「危険」な感情」であるとし、「C0の内的体験の気づきは欠かせない。気づきがなければ、C1に振り回される」
33	前川美行 (2002)	うつ状態	初回「不思議な夢をよく見る」(以後、毎回のように夢を話す、第II期、夢35以降、海外への移住のため、手紙を介したやり取りが終結まで続く。移住後すぐに交通事故に遭い、一時意識不明となる) 夢51「コンタクトが大きくて目が入らない」。 C1「3度目です」Th<まだまだこれからなのでしよう>	印象的な三つの夢(夢57～夢59)が報告された。(夢57「子どもが指圧する夢」夢58「引越先で道がわからない中、人に尋ねると『スワンリバー』から出られると言われる夢」夢59「卵をゆでる。殻が割れるが、中身は出ない夢」 心理的困難な事故の体験が「コンタクトレンズ」の夢として繰り返し現れていたが、ここに至って事故や傷を心理化してきたのであろう。
34	白井聖子 (2002)	関係妄想		恋愛関係妄想について) <恋愛のことだからなおさら大事に扱うこと>と不用意に人には話さないよう繰り返し伝えていった・・・自分(C1)の大事なものは取扱いに気をつけることが共通の約束となった・・・性に関する話は丁寧に聞いていき、自分のなかから排除すべきものではないことを保証し、認めていくことを繰り返して伝え続けた・・・Aさんが一方的に話す内容の渦に、毎回巻き込まれていく感じであり、面接後には内容を思い出せないことも多かった。Aさんが語る内容に圧倒され、思考や主体を奪われ「モノ化」された気持ちになっていき逆転移感情として辟易する感じや無力感、眠気などが生じてきた。

35	高橋靖恵 (2003)	統合失調症	<p>第1期 Thにどうしたら退院できるのかということばかりを尋ねてきて、同じ会話の堂々めぐりであった。 (その後)当初頑なで融通の利かない印象が強かったC1であるが、Thとの関係の中で次第に雑談も交わされるようになり、Th自身が素になって多くの雑談に興じている。</p>	<p>第1期 同じ話題の繰り返しからくる徒労感を否定できなかった・・・Thはこのような堂々巡りの話をするために来ていると理解し、彼の気になる出来事はすべて否定せずに聴いていつている。 一方的に同じ訴えを繰り返していたC1であったが、Thはそれを聴きながらそのときの彼の気持ちを確認したり、<それはさっきと同じこと?>といった形で、C1の滔々と続く訴えに「句読点」を打っていた。次第にC1の方から「話が飛んでいない?さっきと同じこと言った?」と自発的に確認されるようになる。このような繰り返しだが、ThとC1の関係性が安定したものになっていったといえる。</p>
----	----------------	-------	--	--

表1に見られるように、心理療法においてクライアントの語りが「繰り返される」「執拗に訴える」などの「反復」的な視点を加味した事例の多くが境界例や摂食障害をはじめ、パーソナリティ水準のクライアントとの面接過程であった。こうした難治の事例ながらも、セラピストに執拗に繰り返し語るなかで、クライアントが好転し、情緒的に安定していく事例が多数報告されている。そうした事例に共通することの一つに、クライアントの反復される語りに対して、積極的に関与し、応答していることがうかがえる。菅(1993)は、境界例の中学1年生の女子との面接において、母親の死、父親と妹について、見捨てられるという不安、自己像の4つの話題を繰り返し語られることに対して、「<あなたの求めているものはわかる気がする。でも、それを他者が外から与えるのは無理なこと。私は、あなたがその寂しさに耐えられるようになるのを手伝いたい>という気持ちを、噛み砕いた言葉で語り続けることだけであった」とセラピストも繰り返し語り続けたことを述べている。岡論文(1992)では、境界例のクライアントが、繰り返しあふれんばかりに(1)醜形恐怖、被害感(2)親とのトラブル(3)過食、についてノートに表現する様に、セラピストは、無力感を味わいながら、何とか打開への手がかりを得ようとして、クライアントにセラピストのコメントに対するコメントを求め<先生も大変なのだ>と述べたことが転回点となり、「面接の危機も何とか乗り越えられた」と述べている。また、佐々木論文(1998)では、摂食障害のクライアントが高校転校をめぐってのC1と母親の感情の行き違いとそこからもち越してきた恨みとこだわりを繰り返し語るなかで、「先生はカウンセラーとして一緒にいると言わざるをえない」と

専門家の役割として聴いている旨の訴えに対してセラピストが「胸を断ち割って真心を見せることなんてできない、真剣だから怒っている」と怒りを表現したことを契機に面接関係が安定したことを述べている。さらに、斎藤論文(1993)では、固執した反復される語りの変化が詳細に報告されている。胃症状への固執を示した大学生は、「現在の問題はすべて『胃が壊れた』ことから来ており、決して自分は怠けているわけではないのに、両親も他の人もまったくわかってくれない」という内容を第1期に繰り返し繰り返し訴えながら「胃が壊れている」ことへの言語化がなされる。第3期に入り、夢を報告し始めるが、「夢以外の話の内容は基本的には第2期とかわりばえのしないものが続いていた」。第3期は、ThはC1の「進展がみられないのは、Thの消極的な姿勢に一因があるのではないか」とも考え、話を聞いているとこちらがズッシリと重さを感じ、からめとられて身動きできないような気持ちになってくる」と率直にセラピストの体験を言葉にするなど、何回かの対決を試みた結果、セラピストはクライアントを「変えようと試みるのではなく、なにかが起こるまでじっと待つことに徹する」との面接方針に据えるものの、対決により生まれた「棹をさす効果」を發揮し、第4期からの経過の急展開を示す。第5期には、毎回のよう夢を報告する中で、胃の症状についてはほとんど訴えなくなり、体調も回復していく様子が報告され、終結に向かっていく。

上記の菅論文、岡論文、佐々木論文、斎藤論文に見られるように、セラピストがクライアントの「反復される語り」に対する積極的な応答が見られる。また、セラピストが味わう無力感や怒り、戸惑いの内的な体験を手掛かりに、クライアントとの対決を行っているのも特徴である。その後は、いずれの事例もこれまでの固執した語りから広がり、柔軟になっていく様子があり、セラピーの展開の転回点としても意味を持ちそうである。

一方、クライアントの「反復する語り」に、セラピスト側の疲弊感や焦り、怒りなどの逆転移感情を味わったとする記述を含む論文が8本(岡, 1992; 大石, 1997; 青木, 1997; 吉良, 1997; 立川, 1997; 佐々木, 1998; 津田, 2001; 白井, 2002)あった。たとえば、白井(2002)は恋愛性妄想の女性と面接過程において、「Aさんが一方的に話す内容の渦に、毎回巻き込まれていく感じであり、面接後には内容を思い出せないことも多かった。Aさんが語る内容に圧倒され、

思考や主体を奪われ「モノ化」された気持ちになっていき逆転移感情として辟易する感じや無力感、眠気などが生じてきた」とクライアントの繰り返される同じ訴えに疲弊したセラピストの様子が語られている。同様に、青木(1997)は17歳の大腸症候群の男子との面接から、下痢、腹痛、背中の痒み、不眠などの多彩な身体症状を執拗に訴え続けたことに触れ、「身体症状の訴えが執拗に続くとき、それを聴き続けることはセラピストにとって容易ではない」とセラピスト側の徒労感について言及している。また、吉良(1997)は、青年クライアントが自分の失敗したことを思い出し、「あれはまずかった」と繰り返し語り考える様子に触れ、セラピストも「毎回同じような話をして帰っていくクライアントに対して、何とかしてやりたいと思いつつも手がかりをつかみにくく、無力感や、やりきれない気分を感じていた」と述べ、さらに「これはクライアントも感じている、自分の体験にどうにも対処できない無力感ややりきれなさとかかなり共通した、同型的な体験であったと考えられる」と考察しており、セラピストだけではなく、クライアント自身も「反復する語り」に徒労を感じる事例も見られる。

このように、心理臨床学研究の単一事例を参考に「反復される語り」に対するセラピストの関与のあり方は、以下の2型に要約される。

①型：セラピストが「反復される語り」をなぞる中で、セラピストの内的な体験（逆転移感情など）を手掛かりに幾度となく言語化を試みようとする関与のあり方。

②型：セラピストが「反復される語り」になぞる中で、クライアントの「反復される語り」を同型反復的に捉えることにより、徒労感や無力感に苛まれる関与のあり方。

筆者もこれまでの臨床経験において、同じ話題を幾度となく語るクライアントに対して、セラピーの進展を疑い、クライアントに対する興味・関心の低減や眠気を感じる面接を体験してきた。河合(1988)は、「反復はまったく同じことが繰り返されるのではなくて、必ず差異やずれによる変化をもたらすのであ

る」との視点も事実である。とはいえ、反復される語りに関与するセラピストは、反復される語りが単調であればなおのこと、同型反復的な語りとの印象を持ってしまうと思われる。では、どうしたら「反復される語り」の差異を見出し、単調な語りから広がりのある語りにかように展開するのか、これまでの単一事例研究では、十分に論じられてはいない。しかしながら、上述の反復される語りの文献レビューの要点を踏まえるならば、クライアントの「反復される語り」に対して、セラピストの逆転移感情や身体的な共鳴などの内的な体験を手掛かりにすることで、セラピストの徒労感や無力感を低減することにつながることも考えられる。

第5章 本研究の目的

本研究では、心理療法における「反復される語り」に対するセラピストの関与のあり方に注目し、クライアントの語り直す (re-telling) 営みにどのようにセラピストはなぞり得ることができるのか、複数の単一事例から臨床仮説モデルの生成を目的とする。

第2部 本論

第1章 自閉症における「反復される語り」と差異

第1節 自閉症における反復

本章では、軽度の自閉症のクライアントとの心理療法過程を報告する。自閉症スペクトラムの常同行為やこだわりは、いわゆる「反復」行為とされる。倉光（2009）は「自閉症の人の会話や質問はしばしばワンパターンなので、退屈してしまう」と述べるように、こだわり等は、セラピストや家族を含め、十分な関心をもたられにくい現象と考えられる。

一般的に、自閉症の常同行為やこだわりといった自己刺激行動は、一つの行為にこだわってそれを繰り返し続けるという特徴があるとされるが、なぜ彼らがそうした自己刺激行動を反復するのであろうか。

滝川（2008）は、「こだわりとは、要は周りの状況や周りのあり方の変化への強度の恐れや不安」と述べるが、自閉症者に限らず我々も、転居や転職、異動などの社会生活における変化は、不安や緊張を感じる。自然災害を例に出すまでもないが、避難を余儀なくされた被災者の避難生活における心労は計りしれず、環境変化に対する再適応には過度な不安や緊張を高め、心身の症状を呈しやすくなる。このように私たち人間は、変化に対して脆いことを経験的に知っており、如何に日常生活における習慣化された繰り返され行為により、情緒面の安定を得ているのか想像がつくと思われる。同様に、自閉症の常同行為やこだわりは、同一的体験に伴う変わらないことに対する安堵感を導くと共に、彼らにとっての反復行為は、状況の理解、対処しきれない場面に遭遇した際、惹起された不安や情動的な混乱に対する対処行動であり、彼らなりの生きる工夫である。

杉山（2007）は「知的障害を伴った自閉症においては、ある程度のこだわりの尊重と活用が現実的である」と述べるように、自閉症の心理療法的アプローチには、クライアントの特性を生かした臨床的工夫が求められる。

本章では、スクールカウンセリングで出会った自閉症男子の反復される限局した語りに、疲弊したセラピストがいた。自閉症の反復される語りに対して、セラピストはいかになぞり得ることができるのかについて考察する。

第2節 事例の概要

クライアント（以下、Aと略記）：中学2年生男子

【主訴】「担任にカウンセリングを受けてみたらと言われたから」

【面接期間】2年（計58回）。

【家族】父親，母親，妹，Aの4人家族

【生育歴及び来談経緯】

（母親との初回面接から）初歩（1歳6ヶ月），初語（3歳前）と全般的に発達が緩やかであった。3歳のときには，通園していた保育園から逃亡し，片道徒歩20分の自宅へ一人で帰る。検診時には，保健師から「様子を見ましょう」との助言のみであり，とりわけ，療育機関での訓練等は受けてこなかった。また，保育園では，他児と遊ぶというより1人で遊ぶことを好み，家の中では，好きなビデオを繰り返し見ている。また，リモコンをハンドルのようにぐるぐる回す常同行為が見られた。小学校の就学前には，オウム返しや「何時に行くの？」「何時に出るの？」「どうやって行くの？」の質問を繰り返していたという。

小学校は普通学級に在籍していたが，周囲から『変わった子』と言われており，母親も『普通と違うと思いつながら今に至っている』とAの対応に戸惑いながらの生活であった。

X年6月第2週目に，担任から『校外でのボランティア活動に参加中，事務作業の失敗を同級生にからかわれて，机上のハサミでその生徒を突き刺そうとした。今日，母親とAの面談をしてもらえないか』との相談があった。また，以前，『友人とのトラブルが絶えない生徒がいる。一度，スクールカウンセラーと会う機会を作りたい』との相談があったことから，母親およびAそれぞれにお会いした。

【臨床像】制服を着崩すことなくきちんとした装い。ベルトがやや長く，制服が体にジャストフィットしている。表情はどこかまどろんだ雰囲気であった。

【見立て】担任からの紹介であり，自発的な来談ではないことから，まずはスクールカウンセリングの場が安全であり，安心できる場となるようにAの関心ごとに寄り添い，ゆっくりと関係を築いていくように心がけた。

【対応】週1回の臨床心理面接

事例においては、A の発言は「」、セラピストの発言は「」、第三者の発言は『』と記す。

第3節 事例の経過

【第1期：#1～#16（X年6月～X年10月）】地図を介した関係作り

#1：A は、入室し、すぐに戸の鍵を内側から施錠し、何度も扉がしまっていることを確認する。お互いに自己紹介をした上で 今回のトラブルについて尋ねたが、さほど気にしている様子はなく、むしろ学校で困っていることを一気に話し始めた。「吹奏楽部に入っているが、トランペットが吹けないのでからかわれる」「学校ではいつも寝ているが、誰も起こしてくれない」と部活やクラス内の人間関係についてであった。普段、自宅でどう過ごしているのかを尋ねると、「道路地図を見ている。自転車で出かける」と話し、次回以降のカウンセリングには、「道路地図をもってきたい」とのことで初回を終えた。

#2：県内の道路地図を持参し、「日曜日に朝4時に起きて、自転車で〇号線に行って・・・」自転車で出かけたことを話す。地図を共有しながら、「明け方の〇〇の交差点の信号機は点滅信号、〇〇の信号機は時差式の信号」と道路上の信号機の特徴を話す、その表情はとても得意気であった。

#4：県内の道路地図を持参し、夏休みの自転車計画を話す。また、部活動の部員から「気持ち悪い」「泣き虫」などの悪口を言われて悔しいことや、「クラスや部活の子は僕を仲間に入れてくれない」と語り、小学校5年生のときのエピソードとして「A 死ぬ」と道路に書かれていたことを思い出し、「そいつは冗談や、というけど、腹が立つ。クラスの間人間皆死んでくれ」と語気強めて語った。

#5：県内の地図と広域地図を持参する。広域地図を一緒に見ながら、「〇〇は、お母さんの車が台風の被害にあったところ」と水難被害にあったエピソードを話す。

#6：冒頭に「今日は地図を忘れた、でも、学校のことで悩んでいる」<どういうこと？>「学校のクラスの奴らが自分のことを無視する」<無視する？>「4.5人、だから今日も学校に行くのが嫌になって休もうと思ったけど、お母さんに『行きなさい』というので学校に来た。友達なんかいらん。2学期は

体育祭やいろいろな行事があつて、しんどい。体育嫌いだし、縄跳びもできないし」とクラスの生徒からの無視や学校に来たくないことに触れるなど、学校内の対人関係作りに困っている様子や関わりたいけどうまく関われないもどかしさが伝わってきた。途中何度か、セラピストに「こんな悩みとか聞いてストレス溜まりませんか？」〈大丈夫ですよ、どうして？〉「それが心配だったんですよ」とAの気遣いを感じるとともに、地図がなくても過ごすことができる場、関係になってきている感覚を持った。

#8：「この前お母さんが『ご飯を食べに行くよ』と言ってきたけど、僕はお腹がいっぱいだったから「行きたくない」と言ったら、お母さんが急に怒り出して、僕の髪の毛を引っ張ったりして、それで僕も興奮して家の中のものを投げたりした。お母さんに「カウンセラーに言う」と言う『勝手にしなさい』と言っていた」。

#9：「体育祭の縄跳び40回跳べた」と苦手だった縄跳びが上手にできたことが話される。「毎日が○曜日だといいいのに」〈どうして？〉「Thと毎日話ができるのに」〈本当に〉とThとの関係に慣れてきている実感を持てた。

#12：「虫の世界には、車がないのかな。虫はどのように会話しているのかな。言葉を話しているのかな・・・どうして地球が出来ているのかな・・・天国と地獄ってあるのかな・・・生まれてすぐに殺される赤ちゃんは天国になるのかな、地獄かな・・・天国にいる死んだ人はこっちを見ているのかな・・・死んでも、身体はここにあるけど、魂だけが天国に行くのかな。死んだら別のものに生まれかわるのかな」とAのボソッボソッと語るアニミズム的な言葉に何か癒される気持ちになった。

#14：「お母さんが『お前あほか』『勉強してもどうしようもない』とか言う。名前があるのに『お前』と呼ぶ」と家庭での母親に対する不満を話す。また、「意地悪される夢を見た。クラスの子や担任の先生にもいじめられる」と夢に触れる。

#15：学校行事にて2週間ぶりのカウンセリングについて「1週間だと早く感じるけど、2週間は長く感じた」とはじめに話し、その後、「お母さんに「先生（セラピスト）は住所とか連絡先を教えてください」と話したら、お母さんは、『あんたなんかとは話したくないんよ、嫌々なんよ』と言ったけど、先生

は僕と話すのは嫌々なんでしょう」と問い詰めるように聞いてくる。〈こうして話しすることを楽しみにしている〉ことを伝えると、少し安心した表情になる。セラピストは、Aと母親との関係を気になりながらも、週1回、50分の面接構造がAにとって大切なものとなっていることを改めて感じていた。

【第2期：#17～#33，X年11月～X+1年5月】反復されるボールペン談義

#17：「自転車でA県まで行ってきた。片道3時間。行く楽しみは、文房具屋を見つけること。ボールペンを探すのが好き」と週末のサイクリングの楽しみが文房具屋に寄ることであることが分かった。そして、おもむろに「毎日、僕はいろんなボールペンを持ってきているんですよ。知りませんでしたか？」と胸元からボールペンを2本取り出し、セラピストに見せてくれる。その次の瞬間、制服のズボンの両ポケットから30本あまりのボールペンを驚ぶかみにし、テーブルに出した。セラピストはあまりの多さにびっくりし、一瞬言葉を失った。その後のカウンセリングでは、「ボールペンを寝るときにも持っている。ボールペンを持って寝るということは、ボールペンが好きだということですね。セラピストは持って寝ませんか？」〈それはしないけど〉(#18)、「ボールペンがなくなることがあるのかな、ボールペンの会社に電話して、ボールペンはなくなりませんか？と聞いてみるのはどうか」(#22)、「お母さんが『ボールペンの話ばかりして頭がおかしくなっているのと違うか』と言う。僕って頭がおかしいのかな、Thも僕のことを心の中で頭がおかしいと思っているんじゃないですか？」〈そんな風に思ったことはない〉「僕はボールペンを寝るときにも持っている。Thは持って寝ますか？」〈それはしたことがない〉(#25)、「夏服になるとボールペンを入れるところが少なくなるから困る。今はポケットに入れている。この学校のなかでボールペンが好きな人いるかな」(#26)、「この世にボールペンがなくなることがあるのかな、ボールペン会社に電話して、ボールペンはなくなりませんか、と聞いてみるのはどうですかね・<いいね、答えてくれると思う>「そんなことを聞く人を変な人と思うかもしれない、変な人と思うかもしれない」〈普通は聞かないかも・・・〉(#30)、「Thはあまりボールペンにこだわりませんか。好きじゃないんですか？」〈そういうわけではないけど〉「寝るときもズボンに入れていますか。一緒ですか？」〈違う

けど>「それだったらあまり好きじゃないんだと思う。僕はずっと一緒。セラピストは一色ですね。3色を使いますか？どこの？B社、？僕はB社のボールペンが好き」(#33)と終始、B社のボールペンの話題になり、この頃のセラピストはボールペンの話題に対する抵抗感と眠気を感じていた。

【第3期：#34～#58，X+1年5月～X+2年3月】ボールペン談義から新たな話題へ

#34：「ズボンのなかにドラえもんのように色々入っている。大事な物がたくさん入っている。大事なものはポケットの中に入れておいて。とられると嫌だし」と話し、突然、「Thはボールペンの話を聞くのが嫌なんでしょう」<どうして？>「ボールペンの話をすると嫌そうな顔をするから。ボールペンとは違う話になると顔が喜ぶから。Th僕のこと嫌なんでしょう」<そんなことないよ>「僕と話をすると嫌なんでしょう。分かるんです」<そんなことを思ったことないよ。でもAにそのように思われることが残念だな>「残念って寂しい言葉ですね。寂しいって言葉を聴くと、何かこれで終わりのように感じます」<どうして？>「前に『残念』と言われたときがあってそのときがこれでお別れになったことがあったので、それを思い出した」<これで終わりになることはない>とセラピストがボールペン談義に対して向き合えていないさまを感じとり、Aのこれまではない強い憤りをセラピストにぶつけ、Aに心のうちを言いあてられ、見透かされたことに対する気恥ずかしさと申し訳のなさを感じていた。

#35：(養護教諭の助けを借りてB社にお手紙を書いたことについて)「B社のカタログと八色ボールペンのセットが届いた」と満面の笑みで入室する。「やっぱり、C社、D社のボールペンよりB社のボールペンが一番いい」という内容のお礼のお手紙を書いた内容を見せてくれる。<すごく伝わる>「〇〇さん(担当者)は嬉しいのかな、喜んでくれるかな？」<もちろん>

#36：「手紙を送った、昨日送ったので、今日には届いているかな・・・返事をくれるかな、質問をしたから返事を書いてくれるかな」<楽しみだね>「うん、あまりこの学校の人にはボールペンが好きではなさそう」<どういうこと？>「だって、ボールペンの話題にならない。もし興味があるなら、もっとボールペンの話題を口にするといいから」<なるほど>「僕よりボールペンのこと

を好きな人はいるかな、全国でボールペンのことが好きで興味のある人はどれくらいいるのかな」〈そりゃたくさんいると思う〉。

#37：「ボールペンを持って寝る人はいるかな。休日とかに持っている人いるかな。Th は？」〈もっていない〉「どうして？」〈使わないから〉「持っていないと心配じゃないの」〈そうね。A は心配？〉「うん、持っていないと落ち着かない。変かな」〈それだけ好きだってことじゃないないかな〉「たしか特別学級の先生は、かばんを集めるのが好きで、いっぱい持っていると言っていた。かばんおたくだ。僕はボールペンおたくってことか」と繰り返されるボールペン談義でありながらも、A にとってのボールペンとは一体何か、と自問自答しながら A との時間を過ごしていた。この面接以降、ボールペンの話題が少なくなり、専ら地球温暖化などの自然現象に関心が変わっていった。

#42：「B 社の〇〇さん（担当者）から手紙が来た。何か〇〇とか〇〇とかに工場があるから、工場見学にどうですか？という内容だった」〈よかったね〉「〇〇の工場へ行こうかな・・・だって寒いところだし、寒いのが大好き」。

#43：「工場から煙を出しているのを見たのですが、あれは温暖化に悪いですね。初めは、煙が雲になるのだと思っていました。でも、二酸化炭素が出ていてあれじゃ温暖化は良くなりませんね」〈確かにそうだ〉「温暖化だというのに冬が来るんですね。温暖化になると冬がなくなるのかも・・・」〈そんな時代が来るのかもしれない〉とセラピストも温暖化のために季節がなくなることを少し想像した。

#44：「朝晩寒くなりましたね。朝とかだと 20 度よりも下だと思えます」〈寒くなってきた〉「温暖化だというのに冬が来るんですね」。

#45：「今週はすごく寒くなる。日本海では雪が降るかもしれない。土日月と寒い。インターネットで地球温暖化と入れると、僕ができることには、電気を消すこととか、暖房の温度を一度下げること、テレビを一時間以上つけないこと。それをしている」。

#46：どんぐりや松ぼっくりなど季節の話をしながらか、「この前の日曜日、天気が良かったから朝早くに起きて、自転車で〇〇まで出かけた」〈遠いね〉「走りやすかったですよ、でも警察の人に声をかけられそうになったけど、大丈夫だった、あれは何だったんだろうか」

#47:「今制服が冬服になった、夏でも冬服がいい」<どうして?>「ポケットがいっぱいあるから、その方がいい」という会話の時に、ボールペンがたくさん入れるところがあることと関係しているんだろうとセラピストは思っていた。「去年は寒かったですね、僕覚えていますけど、2 学期の終業式の日にすごい雪が積もって、朝八時くらいから積もり出して、すごかった。あんだけすごかったのは今まで一番かもしれない」<学校あった?>「終業式しましたよ、先生たちは早く来ていた。僕たちが学校に行く途中からすごく吹雪いてきた、だから早めに終わったけど、学校の先生たちは危ないから車を置いて帰ったって」とセラピスト自身の1年前の雪の日のことを思い出しながら、<確かに、あったあった、そう言えばあの雪はすごかった>「あったでしょう」とAは嬉しい表情であった。

#49:「今日は寒くありませんね。冬のことをこんだだけ好きな人は僕しかいないかな。これを冬さんが聞いたらどう思うかな」<そうだな・・・>「聞いていたらどうやろうか」<そりゃうれしいと思うよ>「やっぱり。これだけ冬を待っている人を見たらうれしい、喜んでいるかな」<そう思う>。

#50:「最近暑いですね。冬がどっか行ってしまった・僕が悪いことをしたからかな・・・ちゃんと冬がまた来ることをお願いしないとイケない」<届くといいね>「僕の声聞いていてくれるかな」<もちろん>「冬が来るようにお願いしよう」<寒いのが大好き>「はい、暑いと汗をかくのが嫌。僕はあまり汗をかかないほうだけど、でも、暑いのは嫌い」<なるほど>

#51:「今週はすごく寒くなる。冬が僕を呼んでくれているのかな」<そうかも>「家の中でも寒いのがいいんです。実は家の中では裸でいるんです」<えっ!?!>「本当ですよ。まあ、パンツとシャツは着ていますが。暖房を入れずにいますよ。この前は、窓を開けて、日が暮れるまで部屋に冬が入るようにしていました。冬は日が暮れるのが早い。でも、日が暮れてからの方が好き。落ち着く。〇〇地方とかは、4 時くらいには日入りするから、今頃はくらい。北に住むぞ・・・」。

#52:「このままだと南極北極の氷は 34 年後にとけてしまう。このままだと人間は死んでしまう。どうして温暖化になるかな。空気が汚れているからなのか、はじめは車が空気を悪くしていると思ったけど、僕もわり箸とか使っているし、

電機を使ったりしているのです、車だけではないことがわかった」。

#54：「僕思うんだけど、大地震とかは、自然からの人間に向けた恨みじゃないかなと思うんだ。地震とかして、人間たち死ね、地球の空気を悪くするな・・・という恨みがあるんじゃないかと思う」〈なるほど〉「そうじゃないとあんな地震とかないと思う。たぶん、台風とかもそうなんだと思う」〈そうだね〉。

#55：「出来ればボールペン会社に就職できるようになりたい。先生はボールペンを仕事以外で持っていますか。遊びに行くときとか」。

#56：「今日は暑いですね。今日は一日雨です・・・これだけ暖かいのは人間が悪いからだと思う。僕は人間が嫌いだ。僕は自然の味方、今の異常気象とか温暖化とは、自然が怒っているから」〈本当にそうだと思う〉「明日寒いのは、僕の願いが届いたからかな」〈きっとそうだと思う〉。

#57：「Th にいいたいことがある。高校合格した。高校に入ったらアルバイトをしようと思う。何しようかな・・・車の免許もとりたいし、あっバイクの免許も。バイクは16歳になったらとれるから、それをとろうかな。でもやっぱり車の免許とりたいな・・・」。退室前にセラピストのB社の3色ボールペンを見て「赤黒でシャープペンシルが付いている」〈そう〉「書きやすそうですね」〈うん〉「僕も100本はあるかな」。

#58：「来週には、卒業します。早いものです。カウンセリングにきてから時間の経つのが早かった。毎週話して一週間が早く感じた。また学校に遊びに来る」と言い残し、スクールカウンセリングでの面接を終えた。

第4節 事例の考察

(1) 「反復される語り」へのセラピストのなぞれなさ

第1期では、これまでの同級生や部活の先輩から受けた被害について語気強く語り、頻繁に「学校に行きたくない」と話していた。また、自転車で出かける街の地図や信号の種類といった道路地図を介した話題から、セラピストは、Aの生まれ育ったところや祖父母との思い出の場所など、道路地図を通じて知ることとなり、Aの自己紹介として耳を傾けていた。#17に30本を優に越えるB社のボールペンが突如登場し、その後は、AとのB社のボールペン談義が始まった。いかにそのB社のボールペンが書きやすく、手になじむのかを熱く語

り、時折、セラピストは反復されるボールペン談義に眠気に襲われ、次第に疲弊していく自分を感じていた。そうした中、#34、A は「ボールペンの話をすると嫌そうな顔をするから。ボールペンとは違う話になると顔が喜ぶから。先生は僕のこと嫌なんでしょう」と言い放ち、セラピストは狼狽する。セラピストは、ボールペン談義に対する疲弊感を言い当てられた気まずさとともに、つぶさにセラピストの態度や表情を観察している A の他者理解に驚きを感じずにいられなかった。このセッションを転回点として、セラピストは、A にとってボールペンとは一体何を意味するのか、問答する日々が続いた。河合（1998）は、自閉的な子どもとのプレイセラピーについて、同じ儀式を繰り返すことこそ、神との出会いを可能にし、根源的な出来事を現前させるために必要であると述べている。また、「反復はまったく同じことが繰り返されるのではなくて、必ず差異やずれによる変化をもたらすものである」（河合、1998）。とはいえ、自閉症者の限定したこだわりに関心を持ち続けることが難しい場合には、Th はどうしても退屈してしまい、反復される話題の差異の細部まで意識が及ばないのではなかろうか。

#34 に A が「ボールペンの話をすると嫌そうな顔をする」との指摘は的をえており、セラピストの疲弊感は蓄積され、繰り返される話題、単調さに食らいつこうと必至であった。いわば、A の反復されるボールペン談義を同型反復的に聴いており、ボールペンの語りをなぞるまでにはいかなかった。

(2) 事例 A の反復されるテーマとその語りの差異について

図 1 は A の反復される語りの変化とセラピストの関与のフローチャート、表 1 は、セラピストの関与とその語りの変化について時系列に抜粋したものである。面接経過とともに A の語りの変化が見て取れると同時に、セラピストの内面にも変化が生じる。面接当初、①（#1～#16）はセラピストとの関係作りが円滑に運ぶように自己紹介がてら道路地図を持参し、二人で道路地図という媒介物を共有する。その後、家族や校内の人間関係といった実際的な出来事が語られるようになった。②（#17～#33）は、B 社のボールペン談義が繰り返された。最初こそ、ボールペン談義に関心を寄せて聴きつづけていられたが、徐々に反復される語りにセラピストは、眠気や徒労感を感じるようになった。

③（#34～#42）は、繰り返されるボールペン談義に関心を寄せられていない状態を見事に言い当て、「僕のことが嫌いなんでしょう」と真正面からぶつかり、セラピストは狼狽する。④（#43～#58）は、その後もボールペン談義は続きながらも、季節が秋から冬になることと相まって地球温暖化等の自然現象を憂うテーマが語られるようになり、セラピストもそうした自然破壊に対するAの思いに強く共感していった。

このように、#34のAのセラピストとの対決が本面接の転回点になったことは明らかであり、その後Aとセラピストとの関係性に変化が見られた。とりわけ、セラピストはAの反復されるボールペン談義の意味を自問自答する中で、「ボールペンは彼そのものである」とする思いに至り、その後のAの反復されるボールペン談義に対する無力感や眠気、興味関心の低減は減少し、Aの反復される語りをアクティブに共有することが可能となった。セラピストの変化と連動するかのようになり、Aのボールペン談義は、現実のボールペンB社とのやりとりが変わり、その後、地球温暖化などの自然現象に関する話題へと広がることとなった。

最後に、本事例は、Aの反復されるボールペン談義に対して、セラピストは、#34の転回点まで、同型反復的な語りとして聞いていたことの一例として考えられる。

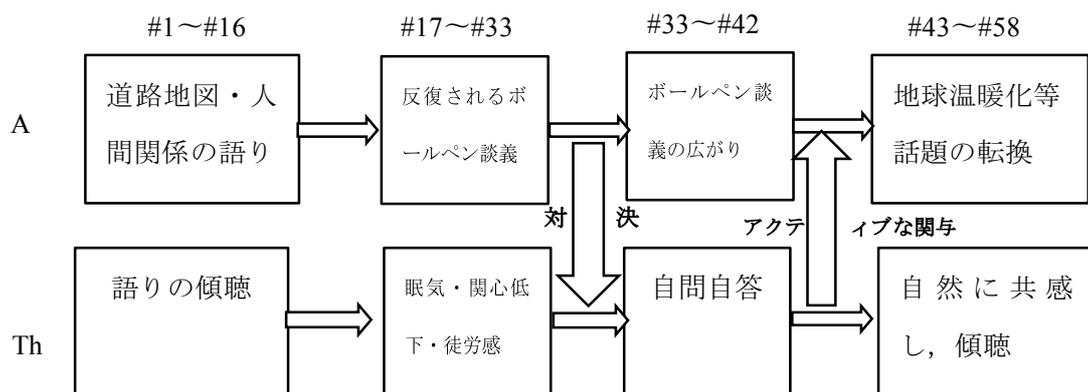


図1 事例Aの反復される語りとセラピストの関与の変化に関するフローチャート

表1 事例Aの反復される語りへのセラピストの関与とその語りの変化

面接回数	反復されるテーマ	セラピストの関与	語りの差異
① #1～#16 道路地図を 介した語り	<ul style="list-style-type: none"> ・「〇〇の交差点の信号機は点滅信号」 ・お母さんの車がここで台風の被害にあった。・「学校のことで悩んでいる」(#6) ・「お母さんは名前があるのに『お前』と呼ぶ」、「いじわるされる夢、クラスや担任にいじめられる」(#14) ・「お母さんが『Thが住所と連絡先を教えてください』あんななんかとは話をしたくないよ、嫌々なんよ」と言う。Thは嫌々話しているでしょう」(#15) 	<ul style="list-style-type: none"> ・地図を一緒に見ながら、Aが出かけた場所など、家族とのエピソードなど、Aの自己紹介として聞いていた。 ・週1回の面接がAにとって大事な枠組みとなっていることを実感している。この時期は、学校の話や母親とのエピソードに対しては、共感的に聴いている。 	#6以降は、道路地図を相談室に持ち込むことがなくなり、主に学校の間関係や家の中での母親とのやりとりを頻繁に話すようになる。
② #17～#33 ボールペン 談義①	<ul style="list-style-type: none"> ・「毎日僕いろんなボールペン持ってきているんですよ」と30本あまりのB社のボールペンを驚づかみにして差し出す(#17) ・「僕はボールペンを寝るときにも持っている」(#25) ・「Thはあまりボールペンにこだわりませんね。好きじゃないんですか?」(#33) 	<ul style="list-style-type: none"> 最初は、ボールペンの話題に興味を持って聴くことができていたが、徐々に「Thはボールペンを持って寝るか?好きか?」などのThへのボールペンに関する質問に窮する。#26ではボールペンA会社に連絡し、ボールペンがなくなるかどうかを聞くことについて<普通は聞かない>と冷たく返し、現実的なやりとりになっている。 	道路地図を持参しなくなり、週末の自転車の楽しみはB社のボールペン探しであることが判明し、その後B社のボールペン談義が始まる。
③ #34～#42 ボールペン 談義②	<ul style="list-style-type: none"> ・「Thはボールペンの話をすると嫌そうな顔をする、ボールペンと違う話をすると喜ぶから、僕と話をするのが嫌なんだろう」(#34) ・「B社からカタログと8色のボールペンセットが届いた」(#35) ・B社に「手紙を書いた」(#36) 	<ul style="list-style-type: none"> ・#34の一連のやりとりは、Thにとってはとても衝撃的であり、見透かされた思い、気恥ずかしさ、申し訳のなさなど、複雑な気持ちに揺れる。すぐにはないが、B社のボールペンに対するAの思い入れを大切に聴くことを念頭に関わっている。 	・#34にAは思いのたけをThにぶつける。その後、現実的なB社へのお手紙などのやりとりが生まれ、ボールペン談義ながらも広がりが見られた。
④ #43～#58 地球温暖化 等の自然に ついて	<ul style="list-style-type: none"> ・「工場から煙を出しているのを見たのですが、あれは温暖化に悪いですね」(#43) ・「暖房の温度を一度下げること、テレビを1時間以上つけないこと」(#45) ・「家の中では裸・まあパンツとシャツは着ていますが、暖房は入れずに、窓を開けて、日が暮れるまでは部屋に冬が入るようにしていました」(#51) ・「南極北極の氷は34年後にとけ、このままだと人間は死んでしまう」(#52) ・「僕思うんだけど、大地震とかは、自然からの人間に向けた恨みじゃないかなと思う。地球の空気を悪くするな」(#54) 	<ul style="list-style-type: none"> ・#47に季節の話題から「冬服がいい、ポケットが多くあるから」という語りによってボールペンと共にいることの安心感を語っているのだと言葉にはしなかったが、Thの心のなかで微笑ましく感じている。自然現象の語りに対しては、すんなりと入ってくると同時に、「自然が破壊されていく」憂う気持ちに強く共感していた。 	・これまでのボールペン談義に変わり、主に温暖化などの自然現象を憂いだ語りが多くを占める。なかでも、「冬が僕を読んでいるのかな」(#51)などのアニミズム的な語りも見られる。

第2章 アスリートの反復される動作の語り

第1節 アスリートの心理臨床

スポーツ選手に対する心理臨床的アプローチは、これまでごく限られた臨床家により実践，研究報告が成されてきている（中島, 1996; 中込, 2004; 鈴木, 2014）。

スポーツカウンセリングとは、「競技場面に関わるすべての人々を対象とする心理臨床的行為」（中島, 2004）であり，鈴木(2014)は「競技力向上に関わる問題，競技遂行上の問題，神経症，身体的問題，あるいは，全人格的成長や引退の問題など，さまざまな問題や悩みを抱えるアスリートに対する心理アセスメント，そしてカウンセリングや心理療法がその主たるものである」としている。

山中(2004)は「スポーツに限らないが，こころとからだの関係は密接かつ微妙である。ことに，からだの能力の極限を要求するスポーツにあっては，そのこころとの関係は重要である」とし，「こころとからだを媒介するのが、『イメージ領域』であると考えており，このイメージ領域において，両者のバランスをとったり，また，全く新しい可能性の開発が行われる」と指摘するように，アスリートの打つ，走る，投げるなどのからだの動きとこころとの密接な関係が深い。

本章は，これまで当たり前に出ていた「投げる」という行為が突如できなくなった高校アスリートとの心理療法過程であるが，スポーツ心理臨床においては，こうした投球恐怖や誤動作の状態を心因性の動作失調と考えられ，通称「イップス（YIPS）」と呼んでいる。筆者は，クライアントの「どうしても力が入る。投げられない」と反復される動作の違和感を「誤動作のフラッシュバック」と捉え，セラピストは，アスリートの「誤動作のフラッシュバック」をどのように共有し，なぞり得るのか，試論を述べる。

第2節 事例の概要

クライアント（以下Bと略記）：高校2年生男子

【主訴】「ピンチになったときやプレッシャーがかかる場面でどうやって自分をコントロールして乗り切れるか」

【面接期間】9ヶ月（計17回）

【家族】父，母，姉，Bの4人家族

【来談経緯】X年10月頃にA大学の心理臨床センターへ相談申込みがあり，セラピストがインテーク面接を行い，その後継続担当者となった。

【臨床像】体つきがしっかりしていて大人びた印象。誠実さと硬さを感じるが，「プロ野球選手になるんだ」という強い思い，その本気さが伝わる。

【見立て】コーチによる叱責を契機に動作失調になった高校アスリート。ことばの端々から誠実さと真面目な印象を受ける。将来の目標が明確過ぎることにより，逆にしばられ，身動きできないことも関係していそうである。緊張場面における動作の不自由さをテーマにまずは聴いていく。

【対応】週1回の臨床心理面接

事例においては，Bの発言は「」，セラピストの発言は〈〉，第三者の発言は『』と記す。

第3節 事例の経過

【第1期：#1～#10（X年12月～X+1年3月）】反復される動きの失調

#1：（相談申し込み用紙に記入してもらってから）〈（主訴について）？〉

「ポジションはキャッチャー。夏休みの試合の時に，日頃簡単に出来ることが出来なくなった」〈という？〉「スローイングが出来なくなった。プレッシャーのかからない場面，たとえば外野からの送球は出来るけど，ミスをしたらいけないという場面だと，スローイングが出来なくなった」〈夏休みの試合って？〉「練習試合で，怖いコーチがいるんです。その試合に急に投げるのが怖くなったんです」〈怖いコーチ〉「3年生のコーチで，今はいない。キャッチャーの専門で結構言うコーチ。怒鳴ることはないけど・・・」〈どんなことばを〉・・・『しっかり送球せんかい』『こんな簡単なことやのになんで出来ないねん』と言われる。そう言われると焦る」〈それは焦る。コーチの年齢は？〉

「30代後半，背が高くて，何にか馴染めない人，明るくない人」。その後，野球歴や今の所属しているチームについて話す。「野球を始めたのは，小学1年生から，最初は軟式，それから硬式」。再び，イップスについて「監督は送球が出来なくなった人を見てきているから，『焦らずやれ』と言ってくれている。

送球が投げられなくなったコーチからは『送球は気持の持ちよう』とアドバイスもらっている」<具体的には送球の難しさって？>「キャッチャーとピッチャーの間は、18m、キャッチャーから一塁と三塁の間は 28m、キャッチャーとセカンドは、36m あるのですが、キャッチャーとピッチャーの距離だと難しいんです・・・一度、暴投してしまっ、それから投げづらくなってしまいました。それが夏の練習試合。試合が僅差で、バント処理のボールを一塁へ投げた球が暴投してしまっ、その試合に負けてしまったんです。そのときは、放心状態で、その後キャッチャーから一塁へポジションチェンジをし、その後の試合でも何度かキャッチャーをするが、何か怪しい」<怪しい？>「どうしても力が入る。心も身体も緊張する、心拍数があがる、焦らないように思うが、焦ってしまう。強い球を投げようとすると、ボールは山なりのボールとなる。練習では投げられても、試合になったら、頭が真っ白になって日頃やっていることが出来なくなる」<今も続く？>「夏と比べて練習では、ピッチャー間は良くなっているが、試合などのプレッシャーのかかった場面だとまだ難しいと思う。2月からシーズンがはじまるが、そして4月には大きな大会がはじまる、今はオフシーズンというか、体力強化の間なので、今の間に良くなりたいと思っている」。

#2:「練習の時には大丈夫です」<具体的には？>「ボールを使ってキャッチボールとかは大丈夫」<大丈夫>「嫌な感じがなく、真剣の場ではないので。プレッシャーのかかる場面だと、マイナスな気持になる」<ほー>「暴投とか送球エラーです。気持は焦ります。ボールに力が入らなくて、ボールがピッチャーまで届かないんです、上に抜けるというか。左右にはぶれないけど」<利き手は？>「右利きです」<投げる時の身体を感じって？>「背中まわり、上半身に力が入っている。下半身は大丈夫。嫌な感じが残るのは、上半身。何か重くなる、動きにくくなったり、頭で考えていると、実際の行動とのずれが出てくる<ずれ？>「背中まわり、肩甲骨のまわりが重くなる。腰のあたりからかな・・・グーッという感じ、首や肩まわり」<ほー>「特に右のひじと手首が硬くなる・・・エラーしたときには、その後腰の違和感を感じた、今思い出すと、暴投をしたときをイメージしてみると・・・腰のあたりに違和感があります」

#3:<どうですか>「嫌な感じが残る回数が減ってきています。1回なりそう

だな・・・と思ったんですけど、12月〇日ですけど、自分で切り替えることができまし」<へ・?>「レフト（外野）から内野のショートへのカットプレイでちょっとずれた送球になった。迷いながらの送球だったので、すこしずれました」<迷い?>「暴投までいかないですけど、細かい話ですけど、14-15mぐらいの距離の送球って、正確性が求められるんです、そのときは、肩で投げたしまってショートしました」。

<いつからキャッチャーしているの?>「小1~小3まではピッチャーだった。小4から、キャッチャーになった。当時の監督は『ピッチャーよりキャッチャーだ』と言われて、これから将来、プロ野球の世界に行ったらピッチャーでは通用しないと、当時のおじいちゃん監督にはっきり言われた。監督には『どこを見据えるかによるけど、プロを考えたときには、ピッチャーでは通用しない』と言うので、「分かりました」と返事しました」<納得?>『通用しない』と言われた時には、腹が立ちました、なんでそこまで言うねん、と思った。だけど、それから自然と納得できたんです・・・」<へ・・・>「指導経験のある人に言われたので・・・納得したのかな・・・70歳ぐらいの人ですけど、これまで多くの選手を育ててきて、プロ選手を出してきているので、その人が言うことなんだから、って思いました」。

#4:「昨日は、キャッチャーとピッチャーの18mのキャッチボールをした。この距離は大丈夫だった、身体の重さや硬さ、フォームを意識して、投げるフォームを意識している。それとプラスに考えるというか、自分の理想のフォームをイメージして投げている」<理想のフォームをイメージ>「ひじが出て、小指が上に向いている状態。（アドリブにて、フォームのデモンストレーション）悪いときは、上半身と下半身が違う。手首がぶれるというか、身体は投げたがっているが、頭はブレーキをかけている状態。良いフォームを身体に覚えさせている。そうすると、嫌な気持ちがなくなってくるんです。無意識に出来るようになるために、プレッシャーのかかる場面でも理想のフォームが出来るように取り組んでいます」<ほー>「最近になって、調子の悪いときには、いいボールを投げることを目標だったのに、フォームのことばかりを考えている、そうした意識になっていることに気づいたんです。いいボールを投げることを忘れていたが、自分の投げやすいフォームで投げることも一つではないかって」<い

いいフォームで投げなきゃというしぼりが>「指導者のいう基本のフォームが今のところいいボールが飛んでいるんです。だけど『「いいフォームで投げないといけない」という「～しなきゃ」という思いは、実際のフォームにはなっていない』<どういうこと>「一つは、家で練習、そうキャッチボールのときに柔らかく使うコツを掴んだというか、ひじをもう少し上に使うこと、暴投（エラー）を重点において考えていたことを、今は理想のフォームを意識すると良いボールが投げられると思って、コーチから言われたことをしなきゃいけない、周囲から言われるから理想のフォームにしないといけないと考えていたけど、今は、自分の考えのなかから、あそびを入れてやるというか」<へえ・どういうこと？>「いい意味で試すというか、ゆとりというか、自分の中でコツコツと掴んだ感覚を大切にしている<感覚か・>「はい、ひじを柔らかくする感覚と肩とひじと手首が連鎖する感覚、こうするとこうかなって、工夫が出てきて、エラーすること、暴投することに対する意識が和らぐんです。フォームが自分のものになっていないので、自分の悪い癖というか、ひじが出なくて、手首で投げるフォームになるので、この冬の間自分の身体に記憶をさせたいと思っています。これまでコツをつかめなかったけど、何かコツをつかめたので、「これでいいやんか」という思いがあって、これを信じて投げてみようと考えています」。

#5:「投げる練習はなくて、日頃は走るトレーニングです。1月〇日から3日間、合宿があるんです。起床6:30、朝食後、8:00からトレーニング、9-10時の間に補食①、10-12:30はフィジカルトレーニング。12:30~13:15まで昼食。13:15~午後のフィジカルトレーニング、15:00に補食②、食べてから16:30までフィジカルトレーニング。19:30から夕食。夕食後、22:00~自主練（素振り）、トレーニング内容は主にフィジカルトレーニング」<走ってばかりだ>「去年は、脱水症状になって倒れました。意識が遠のいて、初日から頑張りすぎたら倒れてしまいました。今年は、少しペースを考えてやります」と合宿への備えを話し、「うちの選手は走っているけど、なぜか故障者、怪我が多いんです。フィジカルトレーニングはするけど、うちの練習は、ストレッチとか少ないと思う。走る割には。意識してストレッチをしたほうが良いと思う」と語る。

#6:「昨日実践練習をした。投げるのには問題がなかった。身体が硬くならず
に緊張しすぎずに投げる事が出来た。ポジションは、外野中心だったのでキャ
ッチボールは問題がない」とのこと。クラブで筋力測定をした際、「フィジ
カルは5か月前より強くなっているけど、柔軟性は、チーム内では下から2番
目だった、柔軟、特に肩関節は柔らかかったけど（前回より柔らかくなってい
た）股関節や四頭筋が硬い。四頭筋は、正座の状態から後ろに倒れるのは、出
来ない。足の開脚、平いた状態の角度は、130度を目指したけど、110度だっ
た。今は肩関節のストレッチを父親に補助してもらいながら、風呂上がりに
40分ほどしている。あぐらをかくことができないんです。後ろに倒れてしま
うんです、多分重心が後ろにあるからなんだと思います」。

#7:「試合形式（紅白戦）では、結構大丈夫だった。外野からキャッチャーへ
代わる可能性もあって、キャッチャーになったら心配」<そう、昨日の試合を
もう少し教えて>「外野、レフトのポジションだったけど、そこから内野への
送球が大丈夫だった。ややリリースのときに力が入ったときもあったけど・・・
外野のポジションから内野への送球は大丈夫だけど、キャッチャーからの送球
となると心配になる」<心配？>「外野からだ大きな動作フォームだけど、
キャッチャーだとフォームをかえないといけない。コンパクトなフォーム、小
さくするとか、速く投げないといけないので、そのときの送球がどうなる
のかが分からない。外野とホームとキャッチャーのときのテイクバックの時の
時間に違いがある。キャッチャーのほうがテイクバックの時間が短い。12月
の練習のときに、ホームからセカンドへの送球は大丈夫だった。ホームからピ
ッチャーの間、距離が緊張して、ボールに力が抜けていて、山なりのボールに
なる。今は自信がない。そのことは監督には話をしている。自分のなかで自信
が持ててからキャッチャーとして投げるほうが良いと思う」<えー>「監督は
僕にキャッチャーをしてほしいと思っていて、チーム的にも誰かがキャッチャ
ーをしないとけないし、僕もチームのなかでキャッチャーをしたいが、自分
が出来なかった時にチームに迷惑をかけてしまうのも嫌だし、また夏の時のよ
うにボールが暴投してしまわないか、と考えてしまう。今は不安のほうが大き
い。また夏みたいに戻ってしまうことが・・・失敗してはいけない、失敗したく
ない、暴投を投げたくない」<うん>「本来、キャッチャーは、ピッチャーを

コントロールして、ピッチャーの配球を・そこに集中できるようにならないといけないけど、今は自分のフォームとか失敗しないようにとか、自分のことばかり考えてしまう。だから、自分としては、いいキャッチボールをすることが出来て、外野から投げられる、試合の時にも投げられる、キャッチャーとしての自分の球がほれる。緊張なくほれる。今は二塁への送球ができるが、一塁や三塁間へ投げられるようになるキャッチャーとピッチャーとのキャッチボールができる、試合形式の場面でも。送球に気にならずにピッチャーの配球などの周囲に気配りができるようになる、というステップを踏めたらいいと思っている」

(サッカーの PK について) サッカーの PK の場面って、僕の状態と同じかな・・って。この前の国際大会で〇〇選手が PK をはずしたじゃないですか、あれを見ていて、蹴る方としては、ゴールを入れて当たり前というか、GK からするとゴールされても当たり前、止めるとヒーローだと思うんです。家族で見ている、姉はキッカーが外したときに『何やっているの、下手』というようなことを言っていたけど、それは違うなって思った。僕の場合も、キャッチャーとして普通に投げられて当たり前であって、暴投をすると失敗だと思うんです、正確に投げないといけないと思うと、それだけプレッシャーがかかってしまって、逆に力が入ってしまって、暴投してしまうことになる。〇〇選手が、力一杯に蹴ってしまって外してしまったけど、プロの選手でもそういうことがあるんだなって思って、少し安心しました・・・今の自分のこともプラスに考えて、将来プロになったときにきっと役に立つと思って、今のときからこうしたメンタルのことを色々考えて知れているので、良かったと思います」。

#8:「週末 3 日間、遠征に行きました。試合では、ボールが抜けるようなことにはなりません。監督と話をして、次のブロック予選の試合からキャッチャーとして出場することになりました。ブロック予選は、地域大会で勝つためには、1 位でなければならなくて、この前の試合では、ファーストと外野をしました。ファーストからピッチャーに配球するときとか牽制のときのボールの返球などは大丈夫でした」<次の試合からはキャッチャー>「ピッチャーとキャッチャー間の送球は心配があります。練習のときでは、投げられているから大丈夫だと思っています」。

#9: (投球について)「調子の良いときには、ピッチャーとの距離が近くに見えるけど、調子の悪いときには、遠くに見える」<具体的には?>「この前の試合は、チーム全体的に調子のよくない状態でした」<へー>前日の練習は、明日の試合は雨で試合がなくなるであろうということで筋トレをしたんですが、翌日試合へ移動する際も今日の試合は中止だろうと判断して、練習をしようと思っていたんですが、急遽中止しないということで慌てて会場へ。試合開始直前に遅れながら到着し、アップのないまま試合に入ったんです。天気も良くないし、チームの雰囲気も良くなって・・・しかも前日の筋トレの疲れが残っていて、身体のコンディショニングも良くない状態でした。アップも出来ずにいたので、普通は、調整しながら試合に入るんですけど、それが出来なかった。5分もアップができなかったな・・・結果として、チーム全体、エラーも多く、打つ方もダメという感じ。雨だったので中止かもしれないと思っていたので、チーム全体のテンションが低かった」。

「ほんとうは、キャッチャーは、投げることに集中することなく、他のこと、たとえばバッターの特徴、ピッチャーに対してどのような配球をするか、などを考えておきたい」<配球ってサインとか>「そうです、サインがいろいろあるんです。偶数だとストレート、奇数だと変化球、それからスライダー、カーブ、シュートなどのサインがある。プロ野球選手は、サインが複数あります、ピッチャーの数だけサインがあるし、相手チームもサインを研究してくるので、サインは1試合ごとに代わっていく」<大変だね>「はい、だから出来れば、投球することに意識をあまり向けたくない。意識というか、今は心配という感じになるけど、それがある。この前の試合は、6割ぐらいは、心配という感じで投球していた。だけど、不思議なことに、2月〇日の試合は、まったく心配する感じがなかった」。

※ 「お腹が痛い」とトイレに行く。(大便)

(戻ってから)「2月〇日の試合は、力がうまく抜けていた。試合前にそれぞれのチームがグラウンド全体を交代交代で使える時間があるんですけど、相手チームが使っているときには、ベンチで休んでいるんですけど、そのときに呼吸法というか、リラクゼーションをしているんです」<へー>「吐く・吸うで1回で5回しました。リラックスして試合に入れたのが大きかったのかな・・・」。

#10: 「2月〇日は準決勝で勝ったので、地域大会には出場が決定した。来週の3月〇日に決勝がある。身体の調子は良いです、身体が軽く、力が入りすぎるものがなく、ボールを投げる時に力が入る。調子の悪いときには、力の入りが軽すぎる時があって力が入らない。三頭筋に力が入って、指先に力が入らない。肩まわりに力が入っていると投げられない」。『何で投げられないのかな・・・、投げ方の問題なのかな・・・もしくは心の病かな〜』とコーチは言っていました。最初は、指先に力が入らないので、怪我でもしているのかなと思っていたんです。X年の夏から急に力が入らなくなった。今思うと、そのときって、コーチにすごく怒られた日でした・・・暴投をしたんですけど、そしたらコーチに『お前はまだ年下だけど、さっきのような暴投をしたら、ほかのメンバーに入れない先輩とかに申し訳ないやろ、お前がBに入ることで落ちる人がでるんだぞ』って言われて、それからその次のインングからボールが投げられなくなって、だんだんと集中力が欠けた状態になったんです。それからですね・・・そのコーチは今はいませんが、怖い顔をしています。X年の夏の大会後に退団しました」と動作の失調が始まった試合について振り返る。

【第2期：#11～#17 (X+1年3月～X+1年9月)】動きの広がりとコツを巡って

#11: 「試合の時に20mの距離を普通に投げることができました。本気で投げるとたまに力が入ってひっかかってしまう感じの時がありました。抜けるのではなくてひっかかる感じでした」<ひっかかる感じ・・・>「ランナーがいるときなんですけど、盗塁などされる可能性があるときに力が入る。抜けずにひっかかる感じがする」<もう少し?>「どうしても力が抜けてしまったら嫌だな〜って思ってしまう自分がいて、夏のときの暴投時の感覚に戻りたくないの・・・<ひっかかる感じ、教えて?>「リリースの時に抜けるんじゃなくて手首に力が入る。1,2点差の時は、3回以降にあって、1,2回の時はないんです、9回するときもありません、9回で盗塁することはあまりないので。また3点差だと盗塁は基本してこないんです。3月〇日の決勝を3-1で勝ったので地域大会優勝しました。2回表に失点し、4回裏に2点、5回裏に1点をとって逆転で勝った。3回の表に監督の指示で『相手チームは盗塁してくるチームなので、牽

制しとけ、4,5回は、普通のスピードで投げたらいから』という内容で、相手チームがつないで盗塁してくるチームという情報があったので、逆に力が入ってしまいました」<なるほど>「前にも話をしましたが、サッカーのPKの場面でも、GKはゴールが決まっても失敗ではないけど、キャッチャーは、ピッチャーにうまく投球出来ないと失敗、うまくいっても、マイナスがゼロになる程度。ピッチャーとキャッチャーってリズムが大事なんです。今でも心配しているのは、暴投することの心配、身体の動きが硬くなると、手首が連動しておかしくなるので、その時に、手首を振ってみるけど、あまり効果はない。この前の試合では、自分的には、早い球の送球はできないで、普通のボールになった」<うん>「試合では、練習とは違う感覚になる。練習のときには、全体が見えるが、試合になると、投げることに意識が向いてしまって、試合だと全体の情報が見えていない」<どういうこと>「試合全体の残像というか、『レフトのポジションが少し違う』とか、そうした試合中の状況について「あ～、こ～」って印象が残っていないんです。守備に関しては特に印象が残っていないんです。試合後に、ミーティングでチーム全体についてのコメントができないんです」<うん>「今は投げること、ピッチャーとキャッチャーの間のこと意識がいっぱいだったので、少し意識的にほかのところに目を向けるのもいいかもしれない」<投げることは出来ている>「はい、投げることは出来ている。普通の高校生クラスのこと出来ているんだと思うんです、だけど将来プロ野球選手になろうと思うと、今のままだといけないし力をつけていかないといけないと思う。たくさんの方がプロ野球選手になりたくて、それを目指しているので狭き門を僕は目指している」<どこか少し急いでいるように聞こえたけど>「急いでいる・・・焦っているのかな・・・こんなんではいけないという何か自分のなかの理想というか。確かに投げる実践を1ヶ月前から再開し、今があるので、それを考えると進歩しているな・・・と思う。監督やコーチからは、『練習だけの様子をみたら実力は全国屈指の選手、だけど試合になったら練習と何か違うな』と言われるのもあって・今のコーチも自分自身が野球キャリアのなかでイップスを経験したことがあって、それを今でも認められないというか、練習では投げられるのに、なぜ試合になると投げられないのか、と自分を受け入れるということは難しい、という話をしていました」。

#12: 「試合は大丈夫でした。その内1試合は、自分の目標としていた状態に近づけました」 < どういうこと? > 「全てのボールがいいところにボールを投げることができました。そしてしっかり周りを見ることが出来ました」 < いつの試合? > 「3月〇日の練習試合、そのゲームは、監督しかきていなかったけど、いつも練習している場所で試合だったので慣れていることもあったけど・・・」 < 周りが見えた? > 「味方の守りのときのミスやカバーリング、周りをみながらの指示が出来るようになった」 < へえ・・・ > 「カットプレイの位置やカバーリングのタイミングとか、あとピッチャーとのコミュニケーションが取れるようになってきた、配球のこと、打者がストレートを待っているときに、変化球の球種のこととか、あのときもう一度ストレートにしておいたら良かった、とか、打者が待っている球種を話したりしている」 < 打者の狙っている球種が分かる? > 「そうですね、スイングとタイミングから分かります」 < へ・・・ > 「相手がストレート待ちであるときには、カーブとか変化球に対して対応できない選手は、大振りするんですね、そしたら、この打者は、ストレート待ちだになって、だから変化球を少し続けてみたり、でも、いい選手は、狙っている球種じゃないときでも対応してくるんです、振り遅れながらも、当ててくる、いい選手はそうしてきます」 < なるほど > 「今は投げることにプレッシャーを感じることもあるけど、調子が悪いなって思っても、呼吸法とかして緊張をほぐしたり、少し身体を動かしたりして、そうすると緊張感がとれたりするので、じっとしているよりいいので。前は、試合後にキャッチャーとピッチャーのことしか思い出になっていないというか、自分のことでいっぱいだったけど、今は、ゲーム中のこと、チームの動きのこと、たとえばこのイニングのあの守備は良くなかったとか、ゲーム中の印象が増えているんです。試合後に、監督、コーチがチームのことについて話をしてから、選手同士、それからバッテリー同士で話をするんですが、その時に話をする事ができています」

（次回から春休みのため、日程の確認をすると、「1ヶ月先ぐらいがいい」ということ。「周りが見えるようになってきていること、試合中にたとえ緊張をしても自分で呼吸法をしたり、身体を動かしたりと修正することができるようになっていきます、自分で意識することができる」と退室前に語る。

#13: 「試合中はだましまし出来る。ピッチャーに返す以外のボールは良くな

っている」＜具体的には？＞「セカンドや一塁，三塁へのボールは前よりスピードが速くなっている。回転が良くなっていて，球の軌道がいいのと，制御をかけずに自分の力を出す事ができている。ピッチャーに返すボールは，捕ってから返すまでに少し間をとって，一呼吸してから投げるようにしている。＜良くなっている感じがある＞「はい，投球の投げ方を変える取組をしている」＜へ・＞「リリースの時に指の角度を変えた，リリースの一を斜めだったけど，それを真上から投げるようにした」＜へ・＞「プロ野球選手のフォームをみて，勉強しているんです」。

「最近，思いっきり投げて暴投でもいいと思っています」＜ほー＞「暴投は怖いですけど，暴投してでも強く投げられるほうが良いというか，でも，身体がそれを拒んでいるんです。でも，それは身体が選んでいることなので，それはそれでゆっくり投げるようにしています，だましましですけど」。

#14:「練習試合で目標としていた良い状態の何かコツのようなものを掴めた。力が抜けてリラックスをしている感じ，自分でコントロールすることができている。そして良いテンポで投げられた」＜コツ？＞「感覚の問題だが，自分の心のなかで，暴投したらどうしようというマイナスなことが思うことなく，投げることができた。この前の練習試合はホームグラウンドであったんですけど，その前の試合の時もなんとなく良い感じがあった。リリースする時に，球に回転をかけることができている，力が入りすぎずに抜けすぎてもいない状態で投げられた。このコツを毎回の試合に出せるというか，自分でコントロールすることが出来ると良いんですが，だけど，それが出来ていないんです。暴投したらどうしよう，って右の肩，背中から腕まで，身体に力が入ってしまて，指先がしびれるというか・・・暴投しないように，球のスピードを落としているんです，だましましの状態です。試合の流れをつぶさないようには出来るようになっていきます，けどこのだましましの状態では進歩がないので，スピードがゆっくり。けど，速い球のときには，肩と手首が連動しているんです。スピードを落とすと，リリースの時に自分で調整してしまて，そうすると正確性に欠けるんです。ピッチャーもキャッチャーのスピードの遅い返球では，テンポが悪くなるというか，ピッチャーもやりにくくなります。ダメな時は，肩にブロックがかかっています。それだとコントロールがうまくいかない。サッ

カーで喩えたら、膝が伸びきって固まっている状態だとボールをうまく蹴ることができないんだと思うんです。それと同じで、肩が固まってブロックされていると、リリースの時には、正確にリリースすることができないんです。自分の身体には『気楽にやれよ』『もういいんだよ』とか声をかけているんです、それで少しは楽に投げられるようになっています」。

#15:「今、ピッチング（スローイングフォーム）をかえているんです。肩を固めずに投げているんです、前はこのように（アドリブ）投げている、今はこうした感じ（アドリブ、肩をまわす感じ）で投げているんです。今は、塁間の投球はリラックスして投げることが出来ているんです、塁間の投球は、暴投してもいいというか、そういう前提があるんですけど、ピッチャーとキャッチャー間は、普通に投げられて当たり前なので、それが出来ないというか、それが暴投だったりするといけないので、それでブロックがかかり、スピードの遅い正確性に欠けたボールになっています。良いときには、リリースのときには、良い意味で力抜けているんです、これが出来ると自分的にも楽なんです。もちろんピッチャーも楽だと思います、余分な疲れを感じなくていいと思いますし、キャッチャーはピッチャーを支えるというか、チームの精神的な柱というか、試合の流れとかをみないといけないので、楽に投げることができるとそうした他のことに気を使うことができる。ピッチャーとキャッチャー間の投球のテンポがゆっくりだと、打者はボール球を打たないんです、時間を与えると、球を見逃すけど、ピッチャーとキャッチャー間の投球テンポが速いと、打者にとっては嫌なもんなんです、考える時間を与えない、だからテンポが速いと、考える時間がないぶんボール球を振ってしまうんです」<なるほど>「高校生になって、試合のプレッシャーというか、周囲からの期待とかもあって。練習は楽しめるようにはなってきたので、練習のときには投げることも楽しめている」<楽しめる>「はい、プレッシャーをもっと楽しめるようになればいいんですけど、イチローのように。プレッシャーを楽しめる自分が少しイメージは出来ているんです、言えば、プレッシャーって、期待の表れとも言えるんです、考え方によってはそうプラスに思えることができます。イチローもプレッシャーを感じながら、そのプレッシャーから逃げないで、向き合うことを求めているようです。プレッシャーを楽しもうとしているところ、スポーツ選手は、そ

のプレッシャーと向き合っていくものだと思います。世界のレベルになればそれは世界というプレッシャーになるわけで・・・。今こうしてこの高校生でこうした気持のことを考える事が出来るというのはとっても大事だと思っているんです。レベルがあがれば上がるほど、より精神的な部分が重要になると思うんです。だから、今とても大切なことをしていると思っています」。

#16:「全国大会は出場が決まりました」<良かった>「最初から最後まで一試合を通して、試合を作れるようにならないといけないので、今は最初と最後が違う。後半は、ピッチャーが遠く感じる。そのために最初よりも強く投げないといけないと思い、力む。最初は、近くに感じます。試合の後半になってきたら、2～4m 遠く感じます」<へー>「4回以降、ピッチャーが小さく見えて、遠く感じるんです、それで遠く感じるの、力を入れて投げないといけないと思って、投げようとするので、暴投にならないように、投げるテンポをゆっくりして、スピードを落として投げるんです。ボールは山なりになります。逆に、一塁、二塁、三塁は近くに感じることもあるし、遠くに感じて、内野の場合には、遠いのでその分力一杯投げる事が出来るから、力みはないんです。ピッチャーとキャッチャーの間は、思いっきり投げるわけにはいかないので、調節をしないとイケないので、スピードがゆっくりになります」<自分なりの工夫>「そうですね、「自分で時間を作る」ようにしています」。

#17:「夏の大会が終わったので、僕たち3年生は、引退をしました。これからも練習には行きますが、後輩たちの指導の手伝いもすることになります」。

(投球について)「全国大会では、暴投にならないか心配しながら投げましたが、思っていたよりも力みもなく投げる事ができました。力んでいると思ったときには時間をとって、呼吸をして、投げるようにしました、それなりにできたと思います」<それはよかった>。

(カウンセリングについて)「進路も決まったし、チームも引退したので、今は大丈夫です」ということで終結をすることになった。

第4節 事例の考察

(1) イップスに伴う反復される動きの語り

アスリートは、その競技種目を介した身体的表現者であるために、競技生

活上の心理的な問題や課題は身体を通じた表現となる場合が多い。序論において筆者の自験例で述べたように、そうした心理的な問題や課題は、そのアスリート自身の敏感かつ繊細な身体的部位を介して代理的に身体表現されやすい。

Bは「どうしても力が入る。心も身体も緊張する、心拍数があがる、焦らないように思うが、焦ってしまう。強い球を投げようとする、ボールは山なりのボールとなる。練習では投げられても、試合になったら、頭が真っ白になって日頃やっていることが出来なくなる」(#1)との肩甲骨から腕による動きの不自由さの訴えはまぎれもなく「イップス (Yips)」と考えられる。イップスは、1967年にプロゴルファーのトミー・アーマー (Tommy Armour) によって使用され始め、現在では、ゴルフのスイングやパッティング、その他に野球やテニスなどのクローズドスキルの要素が求められる動作時に手足の緊張や震えなどの微細な運動技能に支障が出る症状である。

従来、国内のイップスに対する心理療法的アプローチは、中込(1987)、鈴木(2015)の報告に限られており、中込(1987)の「投球失調を訴えて来談した投手の事例」では、マウンドからの距離でもある20メートル前後に成ると乱れるクライアントとの面接を継続する中で、対人関係においても「中間距離」を不得意としていること等が洞察され、徐々に回復していくことが報告されている。鈴木(2015)は、「腕の堅さを訴えた成人アスリート」の事例研究を行い、箱庭療法を導入し、イメージレベルでその問題を乗り越え、競技でのスムーズな動きになった事例であった。

筆者は、こうしたアスリートに見られる動作失調に伴う動作遂行の恐怖を「誤動作のフラッシュバック」と考えており、過去の競技遂行時の失敗状況やその際の身体的違和感や気分が受動的に再体験するように、トラウマ体験と近似の状況である。神田橋(2012)は「忘れていたことを思い出してみるといいのよ、思い出すと、もちろん、不安が起こるわな。だけどこれは自分で思い出そうと思って、ちゃんと覚悟して、用意して思い出すから・(略)・そうするとこの不安は、ここに生き生きした生活があれば、消去されていくんです」とフラッシュバックを安心して思い出すことができること、それを繰り返すことにより、クライアントのフラッシュバックが徐々に癒える仕組みの一つである。

さて、図1はBの反復される語りの変化とセラピストの関与のフローチャー

ト、表1は、セラピストの関与とその語りの変化について時系列に抜粋したものである。

来談当初、キャッチャーであるBは、ピッチャーへの返球時の力みやボールコントロールの困難さを訴えていた。特に、「背中まわり、肩まわりに力が入る」(#1~2)などの投球時の上半身の違和感にまつわるテーマが繰り返し語られる。徐々に「からだは投げたがっているのに頭はブレーキをかけている」(#4)とからだの思考に縛られる不自由さを語る一方、「コーチや周囲から言われたフォームにしないといけないと思っていたが、今は自分のコツコツと掴んだ感覚を大切にしている」(#4)とわずかならBの内面に隙間が生まれ始めようとしていた。その後、「意識してストレッチした方がいい」(#5)、「試合前に呼吸法をしている」(#9)と能動的にからだに働きかける工夫を日常生活や競技場面に試みている。

#12では、これまで自分の投球動作に違和感について繰り返し語ることが多い中、「周りを見ながらの指示ができた」とキャッチャー本来の役割であるピッチャーの配球や打者の球種などに試合全体に対する気配りが語られる。また「じっとしているよりいい」と試合で緊張した時に呼吸法を取り入れている様子であった。この頃より#4に語っていた理想の投球フォーム「肘が出て小指が上に向いている状態」に関して「投球の投げ方を変える取り組みをしている」(#13)とフォーム改善を実践し、「球に回転をかけることができている、力が入りすぎずに抜けすぎてもいない状態」(#14)と自然体で投球できる状況について語る。#4の「理想のフォーム」の語り同様に、セラピストは、Bの投球リリース時の動作、とりわけ「肘の位置」、「小指の位置」の動作を真似る行為を行い、Bの体感している感覚をなぞることに夢中となっていた。そして#15も「肩を固めずに投げているんです。前はこのように(アドリブ)投げている、今はこうした感じ(アドリブ、肩を回す感じ)で投げている」とBの右肩関節の外旋動作を真似ながら、セラピストも繰り返し身体所作を行った。

試合場面では、「楽に投げられることができると、他のことに気をつかうことができる」(#15)、「力んでいると思った時には時間をとって、呼吸して投げるようにした」(#17)と実践での工夫や落ち着きも見られ、また競技の引退も相まって終結に至っている。

(2)動きを共になぞる

来談当初、B はイップスとされる投球動作を行うことの恐怖や違和感を繰り返し語っているように「誤動作のフラッシュバック」を受動的に経験している。#5 以降には、日常生活において意識的にストレッチを行い、試合中に呼吸法を自発的に行うなど、動作の違和感に対する工夫を実践している。また積極的にフォームの改善を行う様子が語られるために、セラピストはその誤動作の詳細を尋ねながら、B の体験している動きを理解しようとしていた。しかし、十分にBの語りから投球感覚を理解することができずにいた。そうした時に、#4に「理想のフォーム」とBがアドリブで動作「肘が出て小指が上に向いている状態」を説明してくれた際、思わず、言葉を動作として真似た。しかし、投球リリース時の腕を振り下ろしながら内旋し、小指が上向きになるというフォームを真似ることは難しく、何度も投球リリースを繰り返し確認する時間でもあった。そうしたやり取りは、Bが競技の専門家であり、セラピストはそれを学ぶ関係として、Cl-Thの関係性が逆転したような雰囲気にもなった。

こうしたBの体験を真似る営みは、Bの投球の難しさを言葉以上に理解する手助けにもなった。#12以降は、これまでの「どうしても力が入る」と固執した動作の語りではなく、「周りを見ながらの指示ができる」(#12)と本来のキャッチャーの役割遂行の様子や動作周辺の出来事を語るようになり、面接での話題が広がることになった。すなわち、このように反復される動作の語りをなぞる営みは、Bの固執した語りに奥行きや広がりが見出す契機となり、イップスといった動作失調にともなう「誤動作のフラッシュバック」には、セラピストともに細やかなに動作をなぞる営みも臨床的技法の一つとなろう。

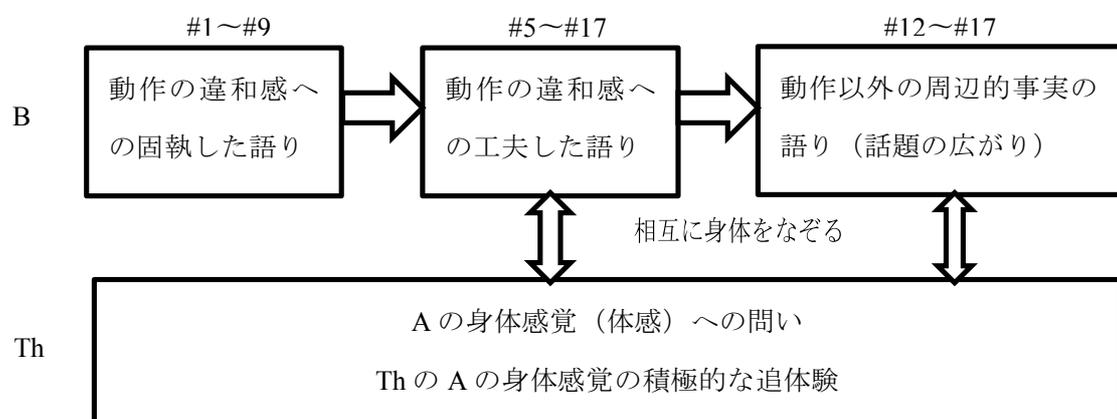


図1 Bの反復される語りの変化とセラピストの関与のフローチャート 55

表1 反復される動きに関する語りへのセラピストの関与とその語りの変化

面接回数	反復される動きに関する語り	セラピストの関与	語りの差異
<p>① #1～#11 反復される 動作失調の 語り</p>	<p>#1:スローイングが出来なくなった。プレッシャーのかからない場面、外野からの早急は出来るけど、ミスをしたらいけない場面だと出来な。どうしても力が入る。 #2:ボールに力が入らなくて、ボールがピッチャーまで届かない。上に抜けると言うか。背中まわり、上半身に力が入る。背中まわり、肩甲骨のまわりが重くなる。腰のあたりから、グーッという感じ、首や肩まわりに違和感がある。 #3:嫌な感じが残る回数が減ってきている。 #4:からだの重さや硬さ、フォームを意識して投げた。悪い時は、上半身と下半身が違う。手首がぶれる、からだは投げたがっているのに頭はブレーキをかけている状態。 #6:肩関節は柔らかいが股関節、四頭筋が硬い。(立ち上がり股関節の硬さをアドリブ) #9:調子が良い時は、ピッチャーとの距離(18メートル)は近くに見えるけど、調子の悪い時には、遠くに見える。 #10:からだは軽く、力が入りすぎることはない。調子の悪い時は、力の入りが軽すぎる時があつて力が入らない。三頭筋に力が入って、指先に力が入らない。肩まわりに力が入っていると投げられない。 #11:本気で投げると力が入ってひっかかってしまう感じ。抜けるのではなくひっかかる感じ。どうしても力が抜けてしまったら嫌だな～と思って。<ひっかかる感じを教えて?>リリースの時に抜けるんじゃなくて手首に力が入る。 ・からだの動きが硬くなると、手首が連動しておかしくなる。</p>	<p>「どうしても力が入る」との語りに B のイップスの苦しみが伝わって来る。競技種目独自の身体的所作のために<具体的に送球することの難しさは?>、<投げる時の身体の感じは?>と動作を言葉でなぞろうとしていた。 しかし、言葉だけでは B の動作の体験が理解できないために、(理想のフォーム)「肘が出て小指が上に向いている状態」の動作をアドリブとして投球フォームを何度もなぞる。 #6では、「股関節が硬い」ということから、立ち上がり、股割りを一緒に行う。#9では、B が試合前に行ったとする呼吸法(吐く-吸う)を一緒に行うなど、B の動作に対する共同行為を積極的に重ねる。</p>	<p>#4:コーチや周囲から言われたフォームにしないといけないと思っていたが、今は自分のコツコツと掴んだ感覚を大切にしている。 #5:意識してストレッチをしたほうが良いと思う。 #9:試合前に呼吸法(吐く-吸う)をしたらリラックスできた。</p>

<p>② #12～#18 動作、身体 との対話</p>	<p>#13:投球の投げ方を変える取り組みをしている。リリースの時の指の角度を変えた、リリースの位置を斜めだったけど、それを真上から投げるようにしている。</p> <p>#14: 目標としていた良い状態の何かコツのようなものを掴めた。リリースするとき、球に回転をかけることができている、力が入りすぎずに抜けすぎてもいない状態。</p> <p>#15: 今ピッチング(スローイングフォーム)を変えているんです。肩を固めずに投げているんです。前はこのように(アドリブ)投げていて、今はこうした感じ(アドリブ、肩を回す感じ)で投げている。</p>	<p>(投球の動作変更について)「リリースの時の指の角度を変えた、それを真上から投げるようにしている」をアドリブで投球フォームと一緒にする。</p> <p>#14:「コツ」という語りに対する言語化を求めるが、具体的な「動作」の言語化はできなかったが、「力が入りすぎずに抜けすぎない状態」という身体感覚に納得する。</p>	<p>#12:すべてのボールがいいところに投げることができた。味方の守りの時のミスやカバーリング、<u>周りを見ながらの指示</u>ができた。ピッチャーとのコミュニケーションが取れるようになってきた。配球のこと、打者がストレートを待っている時に変化球の球種の事とか、打者が待っている球種を話したりする。ゲーム中の印象が増えている。</p> <p>・投げる事にプレッシャーを感じる事もあるけど、<u>調子が悪いなと思っても、呼吸法とかして緊張をほぐしたり、少しからだを動かしたりして、そうすると緊張感がとれたりする</u>ので、じっとしているよりいい。</p> <p>#13:ピッチャーに返すボールは、捕ってから返すまでに少し間をとって、一呼吸してから投げるようにしている。最近、<u>思いっきり投げて暴投でもいいと思う</u>。暴投は怖いが強く投げられる方が良い。でも、からだはそれを拒んでいる。でも、それはからだを選んでいて、それはそれでゆっくり投げるようにしている。</p> <p>#14:<u>自分のからだに「気楽にやれよ」「もういいんだよ」とか声をかけているんです</u>。それで少しは楽に投げられるようになっている。</p> <p>#17:力んでいると思った時には時間をとって、呼吸して投げるようにした。</p>
---	--	--	---

第3章 うつ病における「反復される語り」

第1節 メランコリー（親和）型うつ病に見られる反復

本章では、休職・復職をくり返すうつ病クライアントとの面接過程を臨床素材に、「反復される語り」の細部に関心を寄せて聴くことの意義について述べる。

一般的に、メランコリー（親和）型うつ病のクライアントの場合、その背後に責任感の強さ、真面目さ、誠実さ、そして強迫観念が強いことなどが言われる。李（2002）「世界に身をゆだねることができないため、秩序や儀式的行為にこだわったり、なにかに取り組むために確実な根拠を得ようとして瑣末な事象にこだわり、一步も前にすすめなくなる」と強迫性の特徴を述べるように、筆者も産業臨床の経験のなかで、クライアントの身動きできない窮屈さを共にするとともに、うつ病クライアントの強迫性の強さを垣間見る。

森岡(2011)は、「うつ病のクライアントは、繰り返しが多い。しかし発端の出来事の周辺を繰り返し語る中で、その細部が変化してくることがある」と述べるように反復される語りのなかに見出される語りの差異に注目することは臨床上重要であろう。本事例では、クライアントが醸し出す緊張感の変化に注目し、クライアントとセラピスト双方の身体性について考察を行う。

第2節 事例の概要

クライアント（以下Cと略記）：30代男性

【主訴】「X-7年から復職、欠勤・休職を繰り返している、カウンセリングを通じて見つめなおしていければと思っている」

【面接期間】2年（計35回）。

【家族】C, 妻, 女児の3人家族。

【生育歴及び来談経緯】

Cは、両親、妹の4人家族の長男として育つ。母親は、「PTA役員をする世話好き」で家を留守にすることが多く、頻繁に夫婦喧嘩を見かけていた。一方、父親は「高圧的で亭主関白」であるが、潔癖性のため、自分のことは自分ですという一面があったらしい。また、父親は勉強に口うるさく、大学受験時など、勉強をしている部屋へ度々様子を見に来ることがあり、それがたまらなく嫌であっ

たようだ。大学時代は、武道と出会い、部活と学業の両立で忙しく過ごす。その後、工学系の大学院修了後、技術者としてへ入社。20代の間は、専門的技術が役立つ職場であったようである。しかし、X-8年に組織改変に伴う人事異動があり、不本意ながら技術職から営業、渉外部門への配置転換となった。そこでは、これまでと違い、不慣れな商品を扱い、またプロジェクト管理も任されるようになり、「出来るだけ周囲に迷惑をかけたくない。完璧にこなしたい」と同僚や上司に相談することなく孤軍奮闘をしてきた経緯がある。X-7年、「家に帰っても仕事のことが気になり、寝つけない」と不眠の症状や「やる気がおきない」「落ち込む」といった抑うつ状態が生じる。その後、X年まで休職と復職を7回繰り返すことになった。

X年に「カウンセリングを通じて見つめなおしていければと思っている」と来談し、#35の面接を経て終結に至った。主に、面接では、仕事にまつわる語りを繰り返す面接過程であり、仕事との付き合い方やなぜに休職、復職を繰り返してきたのか、自分と仕事の位相について振り返る場となった。

【臨床像】ひっそりとした感じのある中肉中背の男性。初回時では、表情は硬く、肩があがり、強張り、緊張している様子が伝わる。話をしていると喉元が赤くなっているのが印象に残る。

【見立て】休職・復職をこれまで7回繰り返しており、これ以上の休職は、企業からの雇用の見直しを迫られる可能性もあり、8度目の休職はできないとする危機迫る状況があり、藁をもすがる思いを感じる。とはいえ、休職・復職を繰り返してきている経過を考慮すると、カウンセリングの中断も想定されるために、カウンセリングを通してCの続けられない心理的世界を理解することも重要であると考えていた。

【対応】2週間に1回の臨床心理面接。

第3節 事例の経過

以下において、Cは「」、セラピストの発言は〈〉、第三者の発言は『』と記す。

【第1期：#1～#19, X年6月～X+1年3月】完璧でありたい「私の物語」

#1：X-7年に「うつ病とクリニックで診断を受けた」とのこと。今の体調に

については、「疲労感がある，身体全体がしんどい，徹夜明けのしんどさのような感じが朝にある。あと，緊張感が強いというか，人と接するような作業があるとドキドキして，身体が縮こまる感じ」と疲労感や対人緊張を語る。その後，X-8年の配置転換以後に「体調を崩した。異動さえなければ，うつにならなくてすんだのに」，「あのときから僕の時間が動いていない」と表情を強張らせながら，当時の異動を恨んでいた。

#2：「じっとして座ってられない，会社にいること自体がしんどかった」と早々に8回目の休職を決め，カウンセリングも一時中断となった。

#3：その1ヶ月後，「復職をした」と面談を再開する。人事担当者との復職面談の際，『これまで幾度となく休職，復職を繰り返しているのだから，今回の体調が良くなった，という言葉は信用できない。これから2度と休職，長期休暇を取らない，と誓ってもらわないと，復職を認められない』と詰め寄られ，Cは「うつ病なので，もう2度と休まないと誓うことはできない」と反論したが，『これ以上繰り返すと雇用の見直しになる』と雇用問題に発展しかねない切迫した状況であることが語られる。

#6：復職後，主にデータ入力や問い合わせの窓口などの雑用的な業務を担当する。特徴的なのは，「お客さんや別の課からの問い合わせに対して，即答することができず，ひとまず待ってもらおうようにしている」と語り，その理由を尋ねると「どんな質問に対しても完璧に答えたいので，質問に対して精通した状態になってから返事をする」と言い，セラピストは「窮屈に感じる」と返答すると，「完璧でありたい。人を頼れない」と語る。

その後の面接においても「完璧でありたい」(#9)，「人に聞くのは自分のできていない証拠」(#10)と完璧な状態を求めた語りを繰り返していた。その都度，Thは，なんとも言えない窮屈感を味わいながら，Cの繰り返される「完璧でありたい」思いや「あの異動さえなければ，うつにならなかったのに，上司が悪い」(#8)などの恨み節を聴き続ける面接が続いた。

#11：Cの実家に帰省した話題からCの両親についての話になる。「父は亭主関白で高圧的であった，それに潔癖性」と語り，「さきほど亭主関白と言いましたが，どちらかと言えば，怖いですかね」<怖い？>「雰囲気は怖いですね。それに干渉的」<ほお>『勉強しているか』と突然部屋に入ってくるという

か、勉強はしているのですが、突然入ってくるもので、思春期の頃って、何か親にはほっといてもらいたいというか、そんな気持あるじゃないですか・・・」
＜え・・・＞『勉強しているか』と肩をおいて言うので、それが嫌でしたね
＜そのときどうしていたの？＞「嫌だな、と思いながらも、とりあえず黙って
「はい・・・」と言っていました」＜嫌なことは伝えない？＞「そうですね、嫌なことを嫌だと言葉にしたことがないですね。心のなかで「嫌だな」と思っていましたけど、それを言葉にはしなかった」と父親とのエピソードを言葉にする。

#16：上司より、これまでの雑用的な業務に加えて、新しい仕事を任されるようになるが、「この仕事は今の自分では出来ない」と思い、同僚に代わってもらおう出来事があった。Cは、「安心したというかホッとした感じがあったけど、一方、人に任せてしまった、困っていることから逃げた」と自分を責める節が伝わってきた。セラピストは＜出来ないことを言葉にされたんですね＞と伝えると、「たしかにそうですね」と表情が和らいだ。

#17：「大人との会話は、5分が限度ですね、会社でも人と向き合って話すようなこともそんな多くありませんし、会社でも用件があっても、さほど5分も話すこともありませんし、大人と1対1で話すのは極力していません。緊張するし、気が疲れますので、前には、会議が1時間あったりするんですけど、そのときはすごく疲れていました」＜ふと思いましたが、ここではどうですか？＞「緊張するということですか、ないですね、何ででしょうか、やはりここでは自分の話したいことを話しているのだから、話している相手によるのかもしれないですね。ハハ（笑）」とこの頃から、セラピストとCとの間で笑いが生まれるようになり、セラピスト自身の気持が緩む感覚を味わいながら、面接の場を共にしていた。

【第2期：#20～#35, X+1年4月～X+2年3月】職業的身体を巡って

この期は、これまでのデータ入力や問合せ業務などの事務作業から現場での検査業務を行うことになり、肉体労働が増える業務となった。

#20：「やはり手持ち無沙汰な感じですね。だけど、暇だからって、それで「もっと仕事を振ってください」って言うことを自分から言うほどの気持ちも

ないですね・・・そう仕事をもらって、それがオーバーワークにならないか、それもあるんで、実際今の状態は低調な感じがありますので・・・それで仕事量は抑えています。でも、今は妻の仕事が忙しいんです。妻はよく頑張っていると思いますよ・・・むしろ、もう少し手を抜いてもいいのではないかと思います」と異動で忙しくしている妻を労いながらも低調なC自身との対比を語る。

#22:「今はリハビリとして簡単な作業をしていて、普通のというか、人並みの作業を本当はしないといけないんだと思うんですけど、それを本当にやっつけられるのか、人並みの作業をすることが出来るのか、というネガティブな感じですか」<ネガティブってもう少し言うとどんな感じですかね?>「どこか気持ちが沈んだというか、活動的ではない感じですかね・・・頭でマイナスのことを考える」<マイナスですか・具体的には?>「なんなんでしょうか・・・自分でも考えるんですけど・・・このまま人並みの仕事が出来なくて、上司から評価をされることなくいると職を失うのではないかということの怖さでしょうか」<怖さ>「はい、今は調子が良いけど、体調が急に悪くなって休みはじめて、欠勤が増えたらどうなるのか・・・先のことなんですけど、考えてしまうんですね。それに今は一日に2,3時間程度の仕事で体力的に疲れるんです。でも、与えられている仕事は、一日8時間の内2,3時間の作業で終わり、残りの時間が暇で飽きるんです。実は、私の仕事というのはそれしかなくて、先週は仕事がまったくなくて、どう暇をつぶしたらいいものか、それは大変でした」<時間があるのも大変ですね>「はい。やることがあればいいのですが、じゃあ上司に「仕事を下さい」と言って仕事を与えてもらい、その仕事を抱えてしまい、それでしんどくなるのも何かためらうので、一人クヨクヨしてしまい、どこか仕事がない職場というのは、自分の居場所がないような感じになり、そこから、このまま仕事なくなるのではないかという感じ、ネガティブな考え方になってしまい、それでクヨクヨする」と仕事の負荷に対する物足りなさを感じながらも、Cの体力を鑑み「仕事を下さい」と言いよどむ葛藤する様子が伝わってくる。

#23:「今日の午後に課長と面談があるんですけど、そのときに仕事のことを相談しようと思っているんです」<具体的?>「今している仕事ってのは、スポット的な事務的な仕事ですけど、今度は継続的に出来る仕事というか、検査

業務の検査結果の報告書の作成する仕事がないか、を聞こうと思っています。仕事がないというのもつらいものです」と課長へ直接相談することが語られる。「会社に復職して8ヶ月が経つのですが、復職をしても半年を過ぎるころに再び休職することが続いていて、これまでの最高は1年1ヶ月なんです、だから、今の目標は1年1ヶ月を超えること・・・将来的には、こうして月日を指折り数えるということをしなくても、仕事に夢中になっていて、一日一日を過ごすという生活ができていたらいいな・と思います・(沈黙)・今回の仕事の目安がつかいたらですけど、少し運動でもしてみようかな・と思っています」<運動ですか>「はい、最近、体力が低下してきていることを実感するんですよ・・・ちょっと小走りで線路を渡ったときとかに膝が痛くなったりして、まずは、体力をつけると風邪とかひきにくくなるかな・・・と思ひまして、まずは、手短なところからウォーキングを朝の30分ぐらいですけど、してみようかな・・・と思っています。それから弓道を再開してみようと思っています」と意欲的な語りが見られる。

#24：この前に課長との面談がありまして・・・課長は、『事務所の雑用から現場の仕事を来週からする』と言われて、今週から現場の検査業務をしています」<どんな業務なのですか？>「部品が設計図通りに作られているか、例えば、たくさんの線があるんですが、その配線が図面通りか、図面通りの表示になっているか、ネジが付いているか、などの物の検査です。ペアを組んでいるんですけど、その人が丁寧にレクチャーしてくれているので、最初の一回だけ、説明してくれて、それ以後は別々にやっている。これまでの仕事って本当だったらしくなくても良いような仕事でしたし、今は、私がいなくなったら例えば1、2日風邪で休んだりしたら、まあ他の人が穴を埋めてくれるとは思いますが、それでも確実に穴があくと思うんです・・・どこか、仕事の役割の一部を担っている、その感じはどこか充実感を感じているんです」<そうですね>。

#25：「休職を繰り返してきたのは何故だろうかと考えていたのですが」とこれまでの仕事と今の仕事との違いについて語り始める。「X-8年の配置転換先の仕事が、これまでしたことのない仕事を任されたんです。仕事で飛び交う言葉も分からないことが多く、課内で気安く聞ける人もいなかったし、課長も仕事で忙しくしていたので」と自力で仕事をまかなっていた様子が語られる。そ

して今の仕事について「モデルとなる人がいるし、分からないときには身近に聞ける人がいるということが違い」と周囲の協力を得ながら仕事を進めている様子であった。

#26：この頃に C から上司へ「こうしたらどうですか？」「こう対処してみてもどうですか？」と提案する機会があることを語り、「これまでの仕事って、言われたことをこなすだけ。今は、言われたこと以上のことを自主的にしている」と主体的に仕事に関わっている様子が語られる。

#27：X-8 年の配置転換後の慣れない仕事について、「お客さんの質問に分からないにも関わらず、上司にそれを聞けず、一人で抱えていた。自分の中のねばらないというか、完璧でありたい、こうあるべき、という考え方に自分自身で縛ってきたように思う」と語るとともに「こんな生き方だとやっぱり身も心も窮屈ですね」と語り、セラピストは何か納得した感じを体験する。そして「たぶん人からよく見られたいというか、優秀でありたい、優秀と見られたいという思いがあるんだと思います。失敗しないようにと思っていたし、人から言われぬように完璧であろうとしてきていたんだと思う」と高校受験や大学受験のエピソードを交えながら、「完璧でありたい」物語を回想する。

#30：「仕事には、自信がないものだから、緊張する、それがもどかしい」<わかるよ>「でも、今回、新しい仕事をする事になっていて、何か期待感というか、楽しみというか」<へ・・・新しいことが楽しみなんてね>「課長には、『これから自分がどんな専門性を身につけていけないか、考えなさい』といわれていて、今はとりあえず与えられた仕事をこなしているだけ、これからは、今後は、進みたい方向性を考えていきたい」と未来に向けた語りであった。

#31：「これまで仕事の雑用的なことをしていましたが、今は検査業務になって、体を動かす仕事になってから家に帰ったらバタンキューって感じでした。それが、徐々に体が慣れてきたからか、2 ヶ月も経つと、今のような状態というか、体を動かしてやってみると、体力がついて、基礎体力が上がったかな」<もう少し教えて？>「これまでは、土日はじっとしていたけど、今は、回復力が上がっているんで、夕方に疲れていたのが、疲れにくくなって、そう、疲れにくい体になっている様に思う。日常生活中での体力がついていったそんな感触ですね。別に、走ったりしていたわけではないけど」<そう>「そうそ

う・・あんまり回復を焦らなくなったな・・と思います。」<ん?>「1日1日を大切にしているというか、昔は、3か月先とか、そう先のことばかりを考えていたけど、今はその日、その日で、以前には、会社に復帰したらちゃんと仕事をしなきゃ、と焦っていたけど、それが今はゆっくりゆっくりというか、基礎かためというか、それが積み重なってやっついこうというか、復職してから当分の間していた事務仕事は、ただ会社に来ているだけで、課長に言われた仕事をし、何かむなしい気持ちというか、先の展望が開けないし、目標どうこうでもないし・・・それで、今の検査業務の仕事も最初は、いわゆる自分の方向性が分からず現場に出て、その日の仕事をやるのに精一杯でした、ただ自分が仕事をしたという物が残る、自分のしてきた仕事の足跡というか、それが現場に出てからで、やりがいというのが出てきた」とこれまでになく温かな表情で語られる。

#32:「いや～腰を痛めました。1年ぶりですね、休職をする前にも腰痛になりました。下半身、身体が動きにくくなって、それで疲労がたまって、疲れがたまって・・そう言えば、一番最初の休職のときも腰痛があつて休むことになりました」とX-7年のうつによる最初の休職に腰痛があつたことをはじめて聴く。「でも、今回は1週間で治りました」と回復が早かったことが語られる。

#34:「最近、体力が戻ってきている」と以前していたジョギングを始める。また、「以前にスキューバーダイビングをしていたんです。10年ぶりに行ってみたいなと思っている」と語り、「息が水の中でできるっていうか、息ができる。何か非日常なところがおもしろい。水泳は泳げないんですけどね、水には浮力がありますから、その浮力と自分が釣り合ったときに空中に浮かんでいる、空中に立っている感じがあるのがいい。水深20メートルあたりの所で水面から太陽の光が入り、上を見上げるとなんともきれい。もともと、魚や生物が好きなので、それを見るのもいいですね。その水の中に潜る。非日常的な感じがいいですね」と水に潜り、浮上するCの語り、うつから抜けようとするイメージと重なる。

#35:「ここに来て、何かモヤモヤとしたもの、これを話すことでモヤモヤしていたものが自分の中で整理をつけることができたというか、話すことで自分はどう思っているのかの整理がついてきて、話すことで自分の中で溜め込んで

いたものが解消されていったと思う」とC なるの来談の意味を語る。また、「家族や職場の人にはそのしんどさは分からないとっていたので、これまで話さなかったけど、おかげさまで現在の上司には自分のことを話すことができました。自分なりにうまく伝えることが出来た」と自然に同僚や上司との会話も増え、これまでになかった新たな人間関係が生まれているようであった。また、「自分なりにやっていけると思う」とカウンセリングを終了することになった。

第4節 事例の考察

(1) 事例Cの反復されるテーマとその語りの差異について

図1はCの反復される語りの変化とセラピストの関与のフローチャート、表1は、セラピストの関与とその語りの変化について時系列に抜粋したものである。

Cは、早々に「休職します」(#2)と決め込み、1ヶ月の面接の中断があった。Cは、8回目の復職後、「人を頼れない」や「完璧でありたい」、または「異動さえなければ」とX-8年のエピソードを「反復されるという固定した語りのパターン」(森岡, 2002)の状態が続き、極めて単調なやりとりが繰り返され、先の見えない時間を共にしていた。とりわけ、X-8年の配置転換に伴う否定的な体験に固着し、「異動さえなければ、うつにならなくてもすんだのに」と環境に適応出来なかったその理由を他罰的に語るクライアントに対してセラピストは苛立った感情を抱いていた。

#11に父親との関係に触れ「高圧的であった・怖い」と語り、「嫌なことを嫌だと言葉にしたことがないですね。心のなかで「嫌だな」と思っていましたけど、それを言葉にはしなかった」ことが語られる。セラピストはCの父親との関係で形成された緊張感を思いめぐらしながら、面接の場で「心のなかで「嫌だな」と思っていた」ことが語られたことが印象に残る。#16は「課長に自分にはこの仕事はできない」と担当者の変更を希望し、当時の仕事負荷に対して、#22は「どう暇をつぶせばいいか・・・だからといって、仕事をくださいとは言えない」と仕事の負荷量をめぐっての物足りなさや葛藤を体験している。その後、事務作業から現場作業に仕事内容の変化に伴い、「どこか、仕事の役割の一部を担っている感じ」(#24)とやりがいを語り、#25では「モデルとな

る人がいるし、分からないときには身近に聞ける人がいるということが違い」と周囲の協力を得ながら仕事を進めている様子であった。また、自分から「こうしたらどうですか？」(#26)と上司に提案を行う場面が語られ、主体的に仕事を行っている。#31は、「以前には、会社に復帰したらちゃんと仕事をしなきゃ、と焦っていたけど、それが今はゆっくりゆっくりというか、基礎かためというか、それが積み重なってやっていこうという感じ」と仕事がC自身の一部として根付いている様子が語られ終結に向かう。

このように本事例は、休職・復職を繰り返してきたCが8年越しに安定して仕事ができるようになるまでの過程を共にしてきた。一般に、仕事の語りは、日常的なこととして現実的、表面的な事柄として捉えられきらいがあるが、うつ病などにより休職・復職を余儀なくされるクライアントにとっての仕事の語りは、「私にとっての仕事」のありようが分断される体験となり、個人のアイデンティティの亀裂を生むことになる。逆説的であるが、その亀裂が、クライアントにとっての新たな流れ、動きが生じるように考えられる。すなわち、休職・復職を8回くり返すなかで、はじめてカウンセリングの場を足がかりに、Cは仕事体験を語り直すことになった。#27の「たぶん人からよく見られたいというか、優秀でありたい、優秀と見られたいという思いがあるんだと思う。失敗しないようにと思っていたし、人から言われぬように完璧であろうとしてきていたんだと思う」と高校受験や大学受験のエピソードを交えながら、「完璧でありたい」物語を回想し、これまでの完璧さ、優秀でありたい、とするあり方との距離をとることに成功している。

このように、Cの回復過程の機転には、「完璧でありたいながらも、そうした思いは、心身の窮屈さとして、自分を縛っていること」と相矛盾した関係に気づいている。森岡(2009)が「今まで意味がなかった、バラバラになったあるいは別々に思えたことがつながる」と述べるように、私の物語の生成過程には、「反復される語り」は決して同型の反復ではないことを射抜き、クライアントの語りの細部の変化を感じ、聴き入れるようになることが臨床上重要なことと考える。

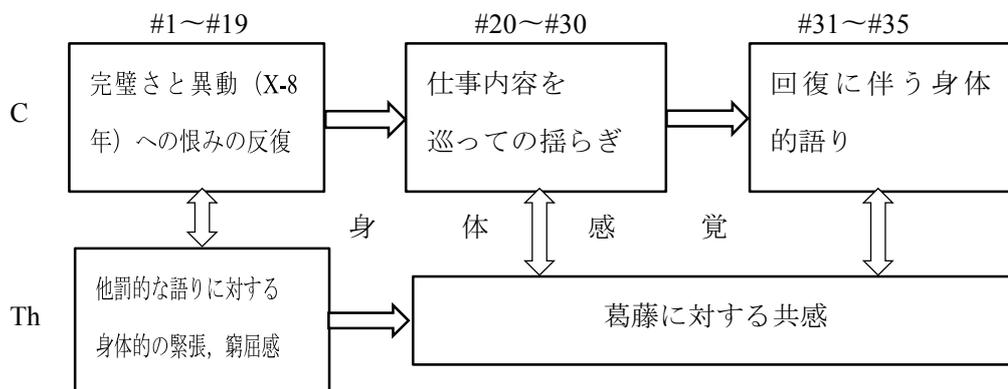


図3 事例Cの反復される語りとセラピストの関与の変化に関するフローチャート

表1 事例Cの反復される語りへのセラピストの関与とその語りの変化

面接回数	反復されるテーマ	セラピストの関与	語りの差異
① #1～#19 完璧さと異動への恨み	<ul style="list-style-type: none"> ・「どんな質問に対しても完璧に答えたい」(#6), 「人に聞くのは自分ができていない証拠」(#10)と完璧な状態を求めた語り ・「異動さえなければ」「当時の上司が悪い」(#8)とX-8年の異動への恨み ・新しい仕事を任せられるが、「この仕事は今の自分では出来ない」と、同僚に代わってもらう。Cは、「安心したというかホッとした感じが、人に任してしまった、困っていることから逃げた」(#16)と自分を責める。 	<ul style="list-style-type: none"> ＜窮屈に感じる＞と完璧さにまつわるエピソードに対してThの身体感覚に基づいた応答。 ・他罰的なCの語りに、Thは苛立った感情を抱いている。 ・＜出来ないことを言葉にされたんですね>(#16)と伝えると、「たしかにそうですね」と表情が和らいだ。 	
② #20～#30 仕事内容を巡って	<ul style="list-style-type: none"> ・「(仕事)暇だからって、それで「もっと仕事を振ってください」って言うことを自分から言うほどの気持ちもない」(#20) ・「このまま人並みの仕事が出来なくて、上司から評価をされることなくいると職を失うのではないか」(#22) ・「仕事がないというもつらいものです」(#23) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「仕事を下さい」と言いよどむ葛藤を感じながら、＜時間があるのも大変＞と共感的に応答。 ・この頃は、C1との間に感じる身体的な窮屈感は感じなくなっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・(#24頃に業務内容が雑用から検査業務へ変わる) ・「休職を繰り返してきたのは何故だろうかと考えていたのですが」(#25)とこれまでの仕事と今の仕事との違いについて語り始める。 ・「優秀と見られたいという思いがある。失敗しないように思っていたし、人から言われぬように完璧であろうとしてきていた」(#27)とこれまでの自分の傾向を内省する。
③ #31～#35 回復に伴う身体的語り			<p>基礎体力が上がったこと、ジョギングを始めたことなど、日常生活や身体的なことが多く語られる。</p>

(2) クライエントの身体性をなぞる

X-8年、Cは技術者としての入社以来はじめての異動であり、さらには技術者から営業業務への配置転換は、これまでの技術者としてのアイデンティティの喪失を意味し、新たな自己形成が求められることになる。来談当初から、「時間が止まっている」と繰り返し語るように、X-8年の異動体験は、一つの外傷的な経験であり、うつ病の発症、それに伴う休職・復職を繰り返す背景にあると考えられる。面接開始当初のCは、うつ病の症状は和らぎ、主に睡眠の問題や疲れやすさ、集中力の保ちにくさを訴えていた。面接当初からのCの緊張感が伝播されるようにセラピストも身体全体で緊張感を味わっていた。そうしたなか、「会議では緊張する」(#17)と工作中的緊張の状況を語るなかでくふと思いましたが、ここではどうか?と尋ねると、「緊張はないですね。ここでは自分の話したいことを話しているので」とクライエントは笑い、面接室の場が緩む瞬間を味わった。

第2期は、事務作業から検査作業へと仕事内容が変化し、当初は、「これまで使っていない筋肉を使い、疲労がたまっていた」(#22)と体調不良で会社を休む日が続いたが、#27では、Cの強迫的な語りに対して<窮屈に感じます>とセラピストの身体を通じた感覚を言葉にするなかで「こんな生き方だとやっぱり身も心も窮屈ですね」と語られる。その後、「身体を動かしてやってみると、体力がついて、基礎体力が上がった」(#31)、これまで繰り返し発症していた腰痛は「今回は1週間で治りました」(#33)とCの身体的体験について頻繁に語られた。また、この頃より、「疲れにくくなった」と体力がついてきた感覚を実感していることが語られ、「回復を急がなくなった、一日一日を積み重ねること大切であること」が語り、お互いが終結を意識するようになった。

このように、休職・復職の繰り返しの状況が続いていたCであるが、Cの回復過程の治療機序には、C自身の身体性の回復が重要であったと思われる。X-8年からの休職・復職の繰り返しの過程を鑑みるならば、率直にCは働き続けることができなでい身体であったと言える。筆者は、働き続けられるということは、その場(職務、職種等)で求められる身体を身につけるための反復作業だと考えている。すなわち「職業的身体」ということである。作家村上春樹

(2007) は、長編小説を書く作業は「肉体労働である」と語る。同様に、セラピストも椅子も座位し続けることやクライアントの語りを聴き続ける集中力や持続力が必要となる。これも一種の肉体労働に近い。こうした己のフィジカルになじませる作業は、トレーニングとして後天的に身につけていく営みである。

C が、事務作業から検査作業に移行し、検査作業に適したフィジカルを身につけていくことによって、彼自身の精神の安定が向けられた。働き続けるとは、その場に見合った身体所作をなじませ、「自分という人間にとって必要なことなのだ」という情報を身体システムに継続して送り込み、しっかりと覚えこませる」(村上, 2007) 作業の繰り返しが、職業的身体を身につけていくプロセスであり、こうした身体の語りは、自身の身体的記憶に基づくリアリティのある体験であることから、仔細にその体験を聴くことも臨床上の工夫の一つであろう。同時に、臨床現場で生じている雰囲気や語感、イントネーション、ジェスチャーなどのクライアントの身体を介した語りを感受するためには、Th 自身の身体性が他者に拓かれていることが重要であろう。逆説的ではあるが、たぶんに言語以前の言葉である身体性の語りにこそ、その人らしさが表現されており、本当に大切なことは言語化され得ないとも言える。

第4章 「反復される語り」と布置関係

第1節 主体的に来談すること

心理療法に来談するクライアントは、「それまでに持っていたコスモロジーが破壊されたり、何か新しい体験によってコスモロジーの改変する必要性に迫られたりしている・(略)・クライアントが新しいコスモロジーを構築するのを助けるのが、心理療法家の仕事である」(河合, 2005)と示唆するように、セラピストは、偶然に出会った関係性を真摯に生き、ささやかながらクライアントの新たな物語の生成を共にする。

本事例は、母親面接を開始し、2年が過ぎた頃に「わたしも話がしたい」と語り、セラピストと出会うことになった事例である。本章では「死にたい-消えたい」を繰り返し語るなかで見出した新たな地平について考察する。

第2節 事例の概要

クライアント (以下Dと略記) : 17歳高校2年生

【主訴】「どうしたらいいかわからない。お母さんがカウンセリングを受けていて、私も話をしたいと思った」

【面接期間】2年(計52回)

【家族】父方祖母・父・母・Dさんの4人。長兄、次兄がいるが、それぞれ家庭を持ち、別に暮らしている。

【生育歴及び来談経緯】

Dは、中学校に入り、「なんとなく行きたくなくなった」と中学2年生から不登校状態になる。中学卒業後は、地元のB高校へ入学するが、X-2年、配慮すべき生徒としてリストアップされていたDは、入学式当日に生徒指導担当教諭から『中学校の欠席日数?』、『どうして休んでいたのか?』などの中学時代の不登校状況についてしつこく問われ、Dは「なんか行けなくなった。せっかく新スタートを切ろうと思ったのに。水をさされた」と翌日から登校できず、自宅に引きこもることになった。

セラピストは、A高校のスクールカウンセラーとして勤務しており、X-2年、生徒指導担当教諭からDの母親との面接依頼を受ける。その後、X年5月まで母親との面接を定期的に行い、Dの様子について話を聞いていた。X-1年3月にA

高校の退学に伴い、セラピストが勤務していた教育相談センターにおいて母親面接を継続した。X年5月、母親から『D自身が「私も話しをしたい」と言っている』との相談を受け、セラピストは、母子並行面接を行える相談体制ではないことやDの自発来談を大切にしたい、という思いから、母親面接を終了し、Dとの面接を行った。

【臨床像】高校生より少し大人びた印象を受ける。特に初回時では、うつ症状のためかやっとこさ面接室に来ているという雰囲気があった。

【見立て】中学生頃から不登校状態にあったDが、高校入学式直後の学校関係者からの訊問的な経験は、あまりにも唐突で傷つく体験であったことは想像される。自宅に引きこもること二年の後の自発来談であり、セラピストは、まずは、安心して語られる場を共有すること、ゆっくりと関係を作っていきたいと考えていた。

【対応】2週間に1回の臨床心理面接

第3節 事例の経過

以下において、Dは「」、セラピストの発言は〈〉、第三者の発言は『』と記す。

【第1期：#1～#7, X年4月～X年6月】夢に繰り返される「消えたい」世界

#1：「自分自身が前に進んでいないな～と思う。全てが嫌だ」と投げやりに言い放つ。そして、終始うつむきながら、「周りの子たちは、高校三年生になり、進学や就職で忙しくしているのにみんなと比較するというか、自分だけが・(沈黙)・学校にもし行っていたらな・(沈黙)・こんなことを考えてなくて済んでいたのに」と周囲から取り残されていく焦りを語る。その後、B高校の入学式後の『中学校は何日休んだの?』『どうして休んでいたのか?』と矢継ぎ早に問われたことに対する怒りを口にした。セラピストは、Dに関わった教諭自身はその対応を悔いていることを知っていたが、Dの教諭に向けた怒りは、とても自然な感情だと感じていた。その後、「最近、こんな夢をよく見る」と自発的に夢を報告する。

夢 1:男の人が立っている『こっち来い』と言うが、私は行きたくないので、近

くにいた5歳ぐらいの子が包丁を持っていたので、それを貸してもらって、自分の首を切ろうと思って、死のうとする。

こうして、初回から自発的に夢を報告するものの、セラピストが夢を扱える力量ではないために、連想などのイメージの拡充は行なわずにいた。

#2:「B 高校を辞めたことを自分なりに納得していたけど、最近、どこか未練が残っていて、休みに考え事をしていると怖くなってきて、過去も将来も真っ暗というか、絶望感でいっぱい。自分は中学校卒業時点で時間が止まっている」、
「私は消えたい、存在しないほうがいい、死ぬのとは違う、消えたい、死ぬのは生きていて存在があって死ぬ、消えるのははじめから私自身が存在していないこと」と正面の椅子に座位するものの、セラピストには体をそむけるようにして座り、うつむき加減に声小さく話す。

夢2: 私は泣いていたが、誰か私を慰めてくれる

と夢に触れるが、セラピストは、D の悲しみの深さに本当に付き合えるのか、自問していた。

#5: 夢では、自殺する二本立てであった。

夢3: 友達が先に飛び降り自殺をし、死んだその友達が私に話してくるので、私が「どう?」と尋ねると『大丈夫、痛くないし、気持ちいいよ』と返事があった。

夢4: 飛び降り自殺をして、その死後の世界、それは真っ暗だった。

夢4 は、夢の中とはいえ、セラピストは、夢自我が死んでしまった事実にはひどく落ち込んだ。

#6: 「自分が自分でない感じ、友達から進路のこととか、就職のこととかで相談を受けても、前だと、私だけを置いていかんといて、と思っていたけど、その時は特に何も感じなかった」と失感情的な状態が見られた。

夢5: 毎日同じ人に殺される夢。

「なんで生きているんやろうか、苦しい思いをしながら生きている意味がない」と語る。セラピストは、かける言葉が見つからず、ただ2人して黙りこんでいた。

#7：早々に夢を報告する。

夢 7: 殺されそうになる。でも、その相手は私を中々撃たない、早く撃ってくれたら良いのに、中々撃たない、それがしんどかった。

セラピストは、D が夢の中の「しんどい」体験を情緒的に語った瞬間、夢 7 は、ふとこれまでにない、何か違う印象を受けた。

【第2期：#8～#33, X年7月～X+1年6月】「消えること」と「生きること」の狭間で

この頃の D は、自宅にいるために、夕食の支度、洗濯物などの家事全般を任されることが多く、また、同居しているうつぎみの祖母の面倒をよく見ている。

#14：「家にいるのがしんどい、私は主婦のようだ。この間、友人と遊んでいたが、どうも雨が降りそうだったので、途中で抜けて帰ってきて、洗濯物を取り込んだ。そんなことをしている自分が嫌だ」<どうしてするの？>「働いてもいないし、家に居るだけの私は、生きている価値はせめてそれぐらいはしないとけないと思う」と自分を卑下する言葉が返ってきた。

#18：「運動が苦手だった、人前で何かするのが嫌で先生に『逃げている』とかよく言われた」、「跳び箱、大縄で授業の最後まで残されていた・・・自分は何をしてもダメだな・・・と思う」と語る際、これまでに幾度となく身体にまつわる劣等感を体感しているのではないかと連想した。

#19：「母が『自殺する人は弱い人』と言っていた。『結局困って死ぬしかなかった』と言っていたが、自分は死にたいと思いつつも実行していない。夏から秋頃は、家の二階をボーっと見ていて、死んでしまおうかなと思うこともあった。その時は、とりあえず楽になりたい、と思っていた。楽というのは消えたいということ。今も楽になりたいと思うが、消えてしまいたいという楽ではない」と語り、セラピストは D があちらの世界とこちらの世界のどちらにも属す境界領域にいることを連想した。また、男子生徒からの告白に対して「その子のこと好きとか嫌いとかということではなく、躊躇しているのでもなく、何か付き合うということが現実の方に近づいていくことが怖い。現実の世界が怖いだけ、まだ、今しばらくは、こちらの世界でいたい」と語り、<こちらの世界？>「正常

でもなく異常でもない世界、いつになったら正常になるかは分からないけど、今はまだ早いような気がする」と静かに言葉を添えた。

#27：「いっそのこと、これだけ苦しい毎日が続くのだったら、死んでしまった方が楽だと思う。何も考えなくてすむ。だけど、私のことを気にかけてくれている両親や友人や Th のことを裏切ることになるけど」くうまく言えないけど、D には生きていて欲しいんだ、どんなことがあっても生きていて欲しいと思っている、そう・死んだらいけない>「分かんないけど大丈夫だと思う・私の心の中でわずかだけど生きたいと言う気持ちが残っているから・この一年間瀕死の状態でカウンセリングを受けはじめ、ようやく少しは生きたいと思う気持ちも出ている。自分の中で生きるという決意が持てた時にはじめて何か次のことを考えられるのだと思う」と語り、セラピストはただ祈るような気持ちがこころの中にあっただ。#30：穏やかな表情で「今、家族の者が田植で忙しくしている。この時期は、兄も手伝いに帰ってくる、私は何をやるわけでもないけど、おにぎり、お茶の用意をしている」と語り、田植えに関する D の語りにセラピストも心穏やかになった。

【第3期：#34～#52, X+1年7月～X+2年3月】「生きる」こととの折り合いに向けて

#35：「体調があまり良くない。この二週間寝付きが悪かった。寝た感じがしない。眠る前に何か考えごとをしている」<考えごと？>「進学した場合、毎日授業に出ている自分を想像したけど、到底できないな、と思う。どっかで自分のことを諦めているというか、その死ぬってことを考えている、でも本当に死にたいのかどうかは分からない」<ん？>「色んな人に支えられているというか、色んな人の顔が思い浮かぶ」と話し、セラピストは、高校卒業年度であることを頭の片隅に置いてはいたが、D の口から進学の二文字が出たことに意表をつかれた。#36：「自分の中でまだ固まっていないということ、言葉にしてしまうと現実的に色々と進んでしまうのが怖い。進路のことを考えていることは友人や家族の者には一言も話していない」と固まっていないことを言葉にすることの恐さ、恐れがずっとセラピストの中に入る。

#37：「栄養、調理の方面を考えている。自宅に居るようになり、家族の夕食を作

る機会が多くなり、夕食の献立とかを考えるのが好きというか、自分は調理が好きなんだと思うようになってきた」と栄養や調理といった具体的な言葉が語られ、その重みと喜びを感じた。しかし、次の面談は体調不良にてキャンセル。

#38：「前回のカウンセリングが終わってから一週間、熱が 39 度続いて、ようやく先週に熱が下がった。小学校以来、これだけ熱が続くことはない。熱で頭が痛く、死ぬかも知れない、と思うほどのしんどさ」とセラピストは、こころと身体とのせめぎ合いからの生環を果たしたイメージを連想した。そして、「病気になって、自分にはウイルスやそうした病気を治す力が自分にはないのかと思っていたけど、実際に治って自分にはまだ治す力があるんだ・・・と思った」と語り、D 同様にセラピストは D の自己治癒力に救われた気になった。

#39：「実は・・・進路は、栄養士・調理師の方を考えているんです・・・昔はお菓子作りが好きだったけど、今は料理を作るときに、これ何か足りないとか、と考えたりするのが好きなので、自分は調理が好きなんだと思うようになった。ふふふ・・・過食をしている人が栄養士ってのもなにか変ですけどね」とはにかんだ表情で語っていた。その後、両親にも相談し、希望する進学先の願書を取り寄せる。

#41：「不思議と自己推薦書をスーっと書けた。合否よりも、自己推薦書を自分で書けたことに満足している」とこれまでにない笑顔であった。

#42：「大学は合格した。みんなは喜んでくれたけど・・・次はみんなの期待というか好意を裏切らないように頑張りたいが」と喜びと不安が混じっていた。

#45：「高校を中退したことをずっと引きずっていたけど・・・今はだいぶその友人との差というか、受け入れられるようになってきている。自分もその代わりに、D 高校を三年で卒業すると決めて、家事をしたことで栄養士の仕事をしたいと思えたわけで、この三年間が無駄ではなかったように思っている。そう思えるようになってきた」<うん>「私、だいぶ明るくなったでしょう。変わったと思わない？」<何だろう・・・何かが変わった>「そうですね・・・私明るくなった」。

#48：「今も死にたい、消えたいという気持ちはあるけど、実際現実的に色々してきているし、死にたいと思っても高校のレポートを出したり、試験受けてたり、進学を決めたりとする自分がいて、どっち、という思いがある。自分でもわけが分

からないけど、でも、最近、自分は死ぬことよりも生きることのほうが苦しいんだと思う。自殺する人は今の生活が苦しいからこそ楽になるために死ぬんだと思う、生きることの方が苦しいと思う、だから人は生きるんだと思う」と一気に語り、Dの中で苦しみ見つけた世界であった。

#49：「昨日、A 高校の卒業式があった。高校に通うってことがなかったのであまり卒業という実感がない」、 「友人が妊娠していて、そのお腹に触れたんだ・何か神秘的というか、何か不思議だな。前にセラピストが<死んだらいけない>って言ってくれたけど、その言葉が心に残っている。魂っていうのかな」<魂か・本当にそう思って、そうしか言えなかったんだ>と伝え、セラピストは、これまでの面接を振り返りながら、ただただ「祈る」気持ちがあったことを自分の中で味わっていた。

#52：「日が近づくにつれて怖くなるが、行くしかないと思っている。この二年間、消えたい、死にたいと思いながらカウンセリングを受けてきた。なんとかして、今の自分から脱出したいというか、変わりたいと思っている」、 「二年間のここでのカウンセリング本当にありがとう。先生には何度も救われた。私を受け入れてくれてありがとう・・・私になりゆっくり頑張ってみようかなと思っているんだよ」と語り、Dとの最後の面接を終える。

第4節 事例の考察

(1) 主体性を生きる

第1期は、高校入学時の「呼び出した先生を責めていた」(#1)、「B 高校を辞めたこと、どこか未練が残っていて、過去も将来も真っ暗というか、絶望感でいっぱい。自分は中学校卒業時点で時間が止まっている」(#2)と入学式直後の出来事への怒りや見通しのもてなさを繰り返し語っていた。また、自発的に7つの夢を報告するものの、セラピストはDの夢の語りによどのように向き合えばいいものか、生死にまつわる夢が反復されるにつれ、先の見えない不安を抱えていた。川部・川戸(2009)は「夢分析において大事なことは、夢を伝える相手(分析家)が存在することである」と述べるようにDの夢の報告は、セラピストとの関係の中で生まれた夢であろう。セラピストは、Dの夢を解釈するのではなく、むしろ夢の語りそのものを大切にしたいと思い、Dの夢を聴かせてもら

っていた。当時、セラピストは、“夢を弁証法的な視点からの理解”（河合, 1998）は、D の夢を共有する手助けになった。すなわち、死に近づくところは同時に生きることに近づくことであり、対極とされているもの、死ぬことへの一方向への動きではなく、また生きることへの一方向に肩入れするのでもなく、この両極がもたらすゆらぎの状態にとどまりながら、その夢の内側自体に入りこむことにより、新しい動きが生じるとされる見方である。D の自発的な夢の語りは、#7 の夢 7 が最後となるが、夢 7 の夢自我は殺されそうになりながら「なかなか私を撃たない、しんどかった」とはじめて夢自我は、情緒的な苦しみを体験する。セラピストは、これまで痛みなく殺されていた夢自我が、殺されることなく、情緒的な苦しみを味わう夢に転換されたことを通じて、D の主体性が動きはじめていることを連想し、D の主体的体験の語りがさらに大切になると考えていた。

第 2 期の D は「自分は死にたいと思いつつも実行していない」（#19）、「いっそうのこと、これだけ苦しい毎日が続くのだったら、死んでしまった方が楽だと思う。何も考えなくてすむ」（#27）と「でも生きたい」（#27）と生死の語りが繰り返された。とりわけ、セラピストは、D がよもや現実の死を選ぶかもしれないという恐れを抱いていたことも相まって、思わず生きていてほしい、死んだらいけない>（#27）と言葉にし、「私の心の中でわずかだけど生きたいと言う気持ちが残っている」との対話があった。この期のセラピストは、ただただ祈るような気持ちを抱えていた。

第 3 期に入り、翌年の進路を巡っての対話とその中心であった。#41 の「不思議と自己推薦書をスーっと書けた」と語る表情は、これまでに見られない穏やかな表情であった。「ずっと引きずっていたけど、今はだいぶ友人との差というか、受け入れられるようになってきている」（#49）と高校を中退したことや B 高校の入学直後の出来事に対する新たな意味づけがなされる。

このように、D との面接過程は、生死にまつわる夢や生死に関わる問答を繰り返しながら、ある一定の自分の生きる道を見出す物語であった。森岡(2002)が“聴き手との関係性を軸にして、反復と実演を重ね・(略)・未来へと動かす”と述べるように、クライアントとセラピストとの繰り返し語りあう関係を通じて、クライアント固有の物語が生成される。また、思春期、青年期を生きる D の

物語の底流には、自分とは何者か、自分はどのように生きるのかといったアイデンティティの模索、つまり Erikson. E. H(1959)が述べるアイデンティティ獲得の問題と密に関係すると思われる。とりわけ、自分の存在する意味を見出そうとしていた D が、#41 の自己推薦書を自分で書けたことへ収斂されていく過程は、自分を見つめ直し、自分を受け入れていこうとする主体性の芽生えの一端であったと思われる。

(2) 語りの差異としての日常的出来事の語り

図 1 は D の反復される語りの変化とセラピストの関与のフローチャート、表 1 は、セラピストの関与とその語りの変化について時系列に抜粋したものである。

D との面接過程において、印象深い二つの出来事に遭遇する。その一つは、X +2 年の#37 の後に、一週間に及ぶ高熱が続き、はじめてのキャンセルであった。一般的に、風邪をひくことは、日常生活において、さして珍しい出来事ではないが、これまでの D との面接過程においては、極めて異質な出来事として際だった。セラピストは、なぜこの時期に風邪をひいたのか、前回 (#37) の面接や以前の面接経過を振り返っていた。翌週、どこか清々しい表情で来談した D は、「一週間、39 度の熱が続いて、ようやく先週に熱が下がった。小学校以来、これだけ熱が続くことはない。熱で頭が痛く、死ぬかも知れない、と思うほどのしんどさ。自分にはウイルスやそうした病気を治す力が自分にはないのかと思っていたけど、実際に治って自分にはまだ治す力があるんだと思った」(#38) と風邪体験を自己治癒力として意味づける語りが見られた。河合(1998) は心理臨床における風邪について、「クライアントが風邪をひいたら、それを心理学的なこととは関係ない出来事とみなすのではなくて、風邪をひくくらいに抵抗が弱ってきている、あるいは風邪をひけるくらいに心が開いてきたなどというイメージとして捉えるのが治療的に有効である場合が多い」とする視点は見逃せない。これまで、死ぬことと生きることの対極で揺れ、生きる意味を見出そうとしていただけに、この時期の風邪体験は通常風邪症状とは異なり、「自分が通常に知っている自分を越えた存在のつくりだすものに、自分が主体的にかかわるときに癒しが生じてくる」(河合, 2000) と考えられる。このように「身体症状は自己

表現の手段のひとつであり、言葉以上に多くを語ってくれるものである。そして、それはクライアント自身も気づいていない無意識的な自己表現であるかもしれない」（川部, 2009）。D の風邪発症後の変容には驚くものがある。とりわけ、進路に向けての具体的な行動があらわれ、先に記したように、大学願書内の自己推薦書の記述にこぎつけるのであった。

次に、面接の終結に向けての対話を行っていた頃に「義理の姉が妊娠していて、そのお腹に触れたんだ、何か神秘的というか、何か不思議だな」（#49）と偶然にも新たな命との出会いを体験する。この外的事象は、クライアントとセラピスト双方の予想を越えた偶発的な出来事であった。こうした偶発的な事象は、ややもすると神秘的で非科学的なこととして排除されやすい事象であるが、心理療法における偶然に対しての態度として重要なことは「偶然を偶然のままに棄ててしまったり、偶然に何かを読み取ろうとしたり、継時的に起こる事象をすぐに因果的に結合させようとしてしまうことではなく、全体として眺めていくこと、しばらく待つことである」（河合, 1995）と述べている。こうした河合の偶然に対する態度は、クライアントの周辺で起きている事象に対する布置する意味を読みつつも待つことが重要となる。河合(1967)は、「その時機において、ある個人が対決してゆくべきコンプレックスがある場合、ちょうどその対決を誘発するような外的事象が起こる」とし、一つのまとまりを持って布置することがあること述べる。これまで死ぬことと生きることの位相に揺れ、生きる意味を模索する過程を鑑みるとセラピストにとって非常に感慨深い外的事象であり、面接を終えていくにあたっての布置であったと考えられる。

(3) 「生きた時間」を生きる

D が自宅にこもることを見守り、そして、心理療法への橋渡しを行った母親の存在は大きく、D の心理的な器として働いていたと思われる。山中(1978)は「ひたすら彼らの『内的成熟』を待つ」と述べるように、D の『内閉』を保護するための時間が必要となる。一般的に、時間とは、間を刻んだり、区切ることによって想定されており、過去と現在と未来といった未来に向かうという方向性をもった「時制」がある。または、何月何日という日付や時計の時刻といった時間は、客観的な時間であり、直線的に進む特徴がある。野村(2015)は、

ナラティブアプローチの立場から時間論について言及しているが、先の例の時間の時制のほか、「語りを聴く、舞う」などを例に、対話的、相互作用的に作られる時間があることを述べ、総じて「生きた時間」としている。

野村の「生きた時間」は、対話的なやりとりを意味し、クライアントとセラピストとの「いまここ」での発する質問や言葉が、双方のリアリティの創造に関わり、「生きた時間」を促進していくとされる。事例に戻れば、#2に「B 高校を辞めたことを自分なりに納得していたけど、最近、どこか未練が残っていて、休みに考え事をしていると怖くなってきて、過去も将来も真っ暗というか、絶望感でいっぱい。自分は中学校卒業時点で時間が止まっている」とDの心理的な時間は止まっていた。たぶんに、Dの内的成熟には、「死にたい」「消えたい」と繰り返し語る時間を共にし、すなわち、セラピーにおける「生きた時間」を共に生きたことにより、D自身の主体を生きる契機となったと思われる。

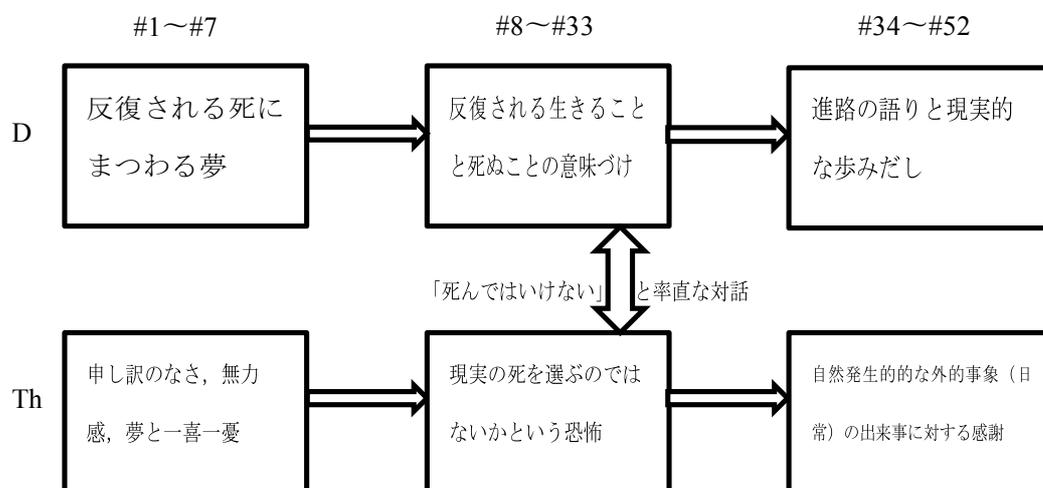


図1 事例Dの反復される語りの変化とセラピストの関与のフローチャート

表1 事例Dの反復される語りへのセラピストの関与とその語りの変化

面接回数	反復されるテーマ	セラピストの関与	語りの差異
① #1～#7 反復される「死にまつわる夢」	「自分の首を切ろうと思って、死のうとする」(夢1) 「飛び降り自殺をして、その死後の世界、それは真っ暗だった」(夢4) 「毎日同じ人に殺される夢」(夢5) 「殺されそうになる。でも、その相手は私を中々撃たない」(夢7)	毎回夢を語るDに対して、夢を扱える技量がないことの自覚と申し訳のなさ、無力感を抱え、夢と一喜一憂する。夢4では、夢自我が死んでしまった事実にはひどく落ち込み、夢5では、かける言葉が見つからず、ただ黙りこむ。	夢7の「中々私を撃たない」イメージが、これまでのすぐに殺される内容と違い、幾分情緒的な体験をしている。
② #8～#33 「生きることと死ぬこと」を巡って	#19:「自分は死にたいと思いつつも実行していない」 #27:「いっそのこと、これだけ苦しい毎日が続くのだったら、死んでしまった方が楽だと思う。何も考えなくてすむ」	現実の死を選ぶのではないか、という恐怖と祈りのような思いで毎回の面接を迎えている。#27はくうまく言えないけど、Dには生きていて欲しい、どんなことがあっても生きていて欲しいと思っている、そう・死んだらいけない>とThの率直な思いを伝えた後の田植えの語りは、「何かが生まれる」イメージを持った。	#27のThの思いつを伝えた際、「ようやく少しは生きたいと思う気持ちも出ている。自分の中で生きるという決意が持てた時にはじめて何か次のことを考えられるのだと思う」と語り、その後田植えを手伝ったことが語られる。
③ #34～#52 「生きるために」	#35「寝つきが悪い」と寝る前に進学のことを考えていることが語られる。その後、進学に向けた具体的な取組み(願書取り寄せ、願書作成、受験等)を行う中で「今も死にたい、消えたいという気持ちはあるけど、実際現実的に色々してきている、最近、死ぬことよりも生きることのほうが苦しいんだと思う。だから人は生きるんだと思う(#47)と生きる意味を見出す。	現実的な語りコミットする中で、1週間続く高熱からの生還した自然治癒(#38)、終結前の妊婦との出会い(#49)など、自然に生じる出来事に救われた思いでいる。	ほとんど「死にたい」「消えたい」の言葉が面接に持ち出されることはなく、進路という未来に向けた取組みの様子が語られる。

第5章 外傷的記憶に関する「反復される語り」

第1節 世代間伝達における反復

児童虐待に限らず虐待の相談件数は、年々増加しており、虐待の最中にいる子どもたちの支援の必要性は言うまでもないが、心ならずも虐待をする側に回ってしまった大人たちの姿があり、そうした大人たちに対する心理臨床的支援は、虐待の連鎖を断つためにも必要である。かしま(2012)は、スクールカウンセリングで出会った問題行動のある小学生の事例から「ある日、私が用意したおはじきを見て、A子は目を輝かせたのですが、母親の顔が一瞬、曇りました。私はA子を別の遊びに誘い、おはじきをそっと見えないところに片付けました。次の面接で母親に聞くと、母親には幼い頃、自身の母親に遊んでもらった記憶がなく、おもちゃを買ってもらったこともないこと、同級生が持っているおはじきが綺麗で、妬ましかったことなどが話されました」のように、子どもの問題の背景に、養育者である親の幼少期の傷つき体験が養育過程に刺激され、世代を越えて負の連鎖が生じる「世代間伝達」の事例は枚挙にいとまがない。

さて、本章の事例は、外傷的記憶を伴ったクライアントとの面接過程であるが、幼少期から続く母親から受けた呪いの言葉の恐怖を繰り返し語られる。そうしたなか面接終結時に「母から虐待を受け、母自身も実の母から虐待をうけて育ってきて、その世代間の伝達があるわけで、それを私の代でその虐待の伝達をなんとかしてでも食い止めよう、断ち切ろうと思ったんですね、娘や子ども達との今の関係を考えたら、虐待の連鎖はなんとか食い止めることができたかな」と語られる、その思いに至るまでの5年半の経過を素材に、外傷的記憶が物語的記憶と転換するに至ったプロット（筋立て）について考察する。

第2節 事例の概要

クライアント（以下Eと略記）：40代女性

【主訴】長男の様子がおかしい。食事をとらない。家族と口をきかない。このまま様子を見ていても良いのか。

【面接期間】5年（計115回）

【家族】E, 夫, 長男（大学生）, 長女（高校生）, 次男（中学生）の5人家族

【来談経緯】

X年4月中旬頃、セラピストの個人携帯電話に着信が入る。登録のない電話番号であったが電話に出る。Eは、突然お電話したことを詫びながらも「大学2年生になる息子が、B中学校のスクールカウンセラー（以下、SC）のときにセラピストのことを知っていて、『いい先生だった』と話していたことを思い出し、SC専用携帯番号に電話をしている」と話す。しかし、着信先がセラピスト個人の携帯電話であることを伝え、この番号をどのように知ったのかを尋ねるAと、「中学校の先生に教えてもらった」とのこと。Eは、SC専用の携帯へ連絡しているつもりであった。（セラピストはX-2年からB中学校のSCは担当していない）番号の破棄を願い、その後、何のためにお電話をされたのかを尋ねると、長男の引きこもりのこと、自分自身が虐待を受けた経験があること、うつ的な状態であることをひとしきり話し、カウンセリングを受けたいと話される。あらためてC大学の心理臨床センターへ相談申込みをいただくことを伝え、その後X年4月下旬にセラピストが面接担当者としてカウンセリングを行った。

【生育歴】

父親と母親、妹の4人家族。幼少期から母親に『のろま、何をしてもダメ』とことあるごとに罵られてきており、毎日、長期出張で不在がちの父の帰りを心待ちしている生活であった。E曰く、「母は妖怪のようで怖い」と逆らうことが許されない生活が強いられており、とりわけ、高校、大学、就職、退職といずれの進路の意思決定は母親が行い、社会人後の給料管理も母親によりなされていた。X-7年に母親から『犬猫じゃあるまいし、子どもを3人も産んで』と3人の出産を巡って責め立てられた際、なんとも言えないイライラが沸き上がり「子どもを産むことはお母さんにとってそんなに悪いことなのですね」とはじめて言い返したところ、『親に口ごたえするのか』と烈火のごとく怒り狂い、「ロクロックビ」のようだという。親とはこのエピソードを機に絶縁関係となり、その後Eはうつ症状を呈し、閉じこもりがちになる。X年、大学生になる長男の引きこもりをきっかけに有料カウンセリングに来談することになる。

【臨床像】 パンツスーツ、スカーフ（ピンク）、ドレスシャツと春らしく、清潔感のある装い。面接中のEは、椅子に浅く腰掛け、足がキュッと閉じ、姿勢が崩れることなく語る様子に、窮屈な感じを受ける。また面談途中に携帯の着信が

あり、その音量の高さ、アイドルグループのアップテンポな曲にEの雰囲気とのギャップを感じる。

【見立て】長男の引きこもりを契機に来談したうつ症状を呈する女性。面接のはじまり方がイレギュラーであり、セラピストは、直感的に出会うべくして出会ったのではないかと、という漠然とした思いを抱いていた。

初回面接において、長男の引きこもる契機のエピソードを語りつつも、かつて実母から受けていた虐待的経験に触れるように、主訴である長男の引きこもりの問題と同様に、Eの外傷的記憶も重要なテーマの一つになると考えていた。とはいえ、早急にそうした外傷的記憶に焦点づけるのではなく、まずはEが持ち出されるテーマにしっかりとついていくと共に、カウンセリングが安全な場と感じてもらえるような関係作りを行う。また、1週間に1回の面接構造を提案したものの、「毎週は体力的にしんどい」との思いを尊重し、2週間に1回とするが、出来れば週1回でお会いしたほうが良いと考える。

【対応】2週間に1回の臨床心理面接。但し、クライアントとセラピストの合意のもと、#13～#86：1週間に1回、#87～#103：2週間に1回、#104～#107：1ヶ月に1回、#108～#115：2ヶ月に1回と間隔は変る。

第3節 事例の経過

以下、Eは「」、セラピストは< >、それ以外の他者は『 』と示す。

【第1期：#1～#44（X年4月～X+1年6月）】反復される事実の語り

#1:引きこもる長男のことについて「社交的ではないけど、優しい子です、私を気遣ってくれる子なんです」。長男の趣味は「フィギア、カード、マニアむけのマンガ、まあすごい量です。身の廻りにため込んでいます」。X年2月からの引きこもるきっかけについて「弟が勝手に僕の部屋に入りやがって、マンガ、カード、お金が盗まれているように思う」とEに話し、弟に確認するも『入っていない』と。しかし2日後に弟の部屋からカード2枚とマンガ2冊が出てきたために、兄は怒り、『お金もどっかにあるだろう』と弟の部屋を荒らしているところに主人が帰宅、『弟の部屋を片付けろ』と事情も聞かずに怒鳴り、悔しい表情を浮かべながら部屋を片付ける。その後『部屋の中、まさぐられて、ズボンのポケットの中、財布の中をまさぐられて、どんな気持ちか分からないか!』と

叫び、それからずっと部屋から出てこなくなりました。「主人は怒りっぽいというか、短気で怒るんです。主人に対しては言いたいことが言えない」<どういうことですか？>「怖いのかな・・・私の母もなんですけど、怖いってのがあって、母は私にとっては妖怪のような人です。怖いというか、それが主人とだぶるというか、母にも主人にもものを言えない。父は存在としては不在のようなもので、母は怖い、妖怪のような人」<妖怪のような>「母自体が妖怪のような、「ロクロックビ」のようなもの・私は小さい時から母には、『お前はみにくい、恥ずかしい子、ダメな子』と言われ続けてきたので、自分には自信がないし、自分のしていることがどうなのか、ということが常に不安になる。・・・息子のことと相談しにきているのに、私自身の話になっている」と語る。3人目妊娠時に「おろせ、3人も子どもを産むなんて、恥じらいのない子だ、親戚に言えない、この子は本当にあかん」と言われたこと、40歳になるまで母親にマインドコントロールをされているようだったことに触れ、「私は自分の意見が言えない、どこか自立していない、捨てられるんじゃないかという不安がある」という。「この7年間に自分なりにいろんなことがあって、一時期の混乱からある程度客観的に捉えることができるようになってきている。自分としては、あともう少し、この自分の出口が分からないというか、あともう少しなのですが、お手伝いしてほしい」と来談動機を話される。

#2：メモを持参し、「長男は、今も状況は変わりません。家の中では食べ物を食べません。深夜に外出はします」。「父親の転勤が多く、地方転々としていました。短大を出て、栄養士の資格をとりました。母が決めたところですが、就職も親のコネで就職。だけど、父の地方への転勤により、『あなたも来なさい』と会社を辞めさせられて、その後の就職先は自分で決めました」。

#3：「相変わらず引きこもっています、私が作ったものは食べません」。長男は「運動が苦手、小さいときからミニカーで一人遊び、小学校高学年からパソコンを駆使し、中学生では自前のホームページを一人で作っていました、いわゆるオタクですね、今はコスプレしたキャラクターもののフィギュア収集が趣味」。

#4：「自分がされてきたことを自分のこどもにしてきた」<どういうこと？>「私の一番最初の記憶は「母親に叩かれ、『汚い子、恥ずかしい子、やらしい子』と言われている場面、母親は父がいるところといないところでは違っていて、父

が出張から帰ってくると普通、それが私と母の2人である密室では、叩かれたり、嫌なことを言われた。母には「あなたは何をしてもダメ」と言われていて自分に自信が持てない。長男の子育てにも同じようなことをしていた。長男の出来ることを褒めたり認めたりはしないで、出来ないところを指摘していた「たとえば?」>「お風呂に入るときに一人で洋服を脱いで『出来た』と言っても、「じゃあ一人で身体は洗えないでしょう」と出来ていないことを言っていた。これが親の役割というか、子どもの自立には必要だと思っていた」。

#6:「長男には出来ないことばかりを言い過ぎて・・・「あなたの為になるから」と言って英会話教室、体操教室へ無理やりに通わせていました。母親が子どものことを決めていくものかと思っていました。「全てにおいて長男に対して厳しく接していた。それじゃ人は成長しないですよね・・・」<どうということ?>「自分が否定されるということは、自分に自信が持てないということ、自分がされていたことを考えたら、なんでそれに気づかなかったのかな・・・」。

#7: (咳き込みがひどい) 冒頭に「セラピストにおしかけて相談に乗ってもらっていて申し訳ないのですが、身体がだるくここへ来るのが不安で、頭痛がひどくて集中できないので、今日を最後にしばらくお休みさせていただいてもかまいませんか」と語り、身体のだるさや頭痛などについてお聴きする。「主人は『仕事が忙しい』を理由に長男と一切話をしていない。小さい時からですけど」<小さいときから>「子どもに関わってほしい」とお願いすると、『聞き飽きた』って」<ひどいね>「勝手です」<それは勝手、大変>「そうなんです! そうなんです! 本当に大変なんです・・・母と一緒に暮らしていた時も大変だったんです・・・」と三人目の子どもを出産した時のエピソードが再び話される。「電話で『お前は勝手に3人も子どもを産んで犬や猫じゃあるまいし、もともと親に対して粗雑なのに、最近益々言葉が乱暴になっているから気をつけろ! 3人子どもを産めるほどだから無神経者』と言われて、その時に我慢することが出来ず、何か悔しくて腹が立ち、悲しくなってぐちゃぐちゃになって、これまで何も感じないようにしていた気持が、その時に感じて、これまでの悲しい気持、辛い気持が思い出されて、これまで蓋をしていた気持を電話の時に気づき、「お母さんにとっては、3人子どもを産むことは犯罪者のようなことなのね」と40歳になってはじめて親に言い返すと、母はヒステリー状態になり、私をの

のしり、ロクロクビの顔が出ているような感じ、それから両親と連絡をとって
いません、その晩から、夜眠れなくなり、体調が悪くなり、家事が出来ない状態に
なりました」と X-7 年前のエピソードを語り、その後次回の面談の約束をする。

#8：「夜中にお菓子とかを食べているようなんですけど、私は記憶にないんです。
かすかに記憶している場面もあります。翌朝、子ども達が『お母さん食べてい
たよ』というのですが・・・確かに朝起きたら気分が悪いんです、ポテトチップ
ス、カップ麺、おせんべい等ありえない量を食べているようです。「不思議なも
ので私は食べ過ぎているのに、長男は食べないということしています・・・」。

#9：「私は家族団らんを経験したことがない。基本母は私をけなして喜ぶので、
私もあえて学校での失敗談とかを話して、私がバカにされているところを喜ん
でいたので」。

#10：これまで母親や主人などに言いたいことがあっても我慢してきた E が
「最近になって、言わずにいられなくなってきた」と我慢してきた思いを
少しずつ言葉にしはじめる。しかし、「うまく言えないけど、さらけ出して、ウ
ワーっと言って「ひどい」とか言って、それで夫に『お前なんかいらぬ』と
捨てられるのではないか、という孤独というか、見捨てられるのが、世界の中で
一人になるという恐怖、ある感情をないものにする、顔色をうかがうと言うか、
相手がどうしたら喜ぶのか、それが大事なこととっていたから、でも・・・我慢
にも限界がある」<うんうん>「私にも自尊心がある・・・ということ・・・それ
を知ってほしい、私は物ではなく、人として尊厳してほしい、でも、そうした気持
ちは抑え込んでしまっている、慣れてしまっている、私はそうした感情がないも
のとして、でも、私は物ではない、人間なんだ、私は人間だ！！」(涙)「でも、私
は人間として扱われなくても当然だという気持ちもあります・・・」。

#12：10 分遅刻、セラピストはカウンセリングを忘れており、事務員から連絡。
面接間隔を1週間1回の提案をセラピストが行うと「ここでお話する以外、家
の以外の人とは話をしていません。しんどくて行けないと思いつつもこうし
て来れているので、せっかくの機会なのでやらしてもらいたい」<体調がすぐ
れないときなど遠慮なく連絡ください>。

#13：(母とのこと)『あなたを厳しくしつけないといけないのは、あなたは汚く、
その正念を直すために』と言われ続けている。「幼稚園とかはよくベランダや

トイレに閉じ込められていた、とにかく怖かった。今は昔のこととして話をすることが出来るが、当時は相当怖かった。閉じ込められていても、いつ扉が開くか分からないので、座り込んでいるとそれも怒られるので、また怒られやしないか怖かった」と当時の緊張感が伝わってくる。

#14:「ここに来るようになって今日が一番楽な感じ」と面接室内の箱庭のアイテムなどに目を配る。「キリストさんやマリアさん、あっ大仏さんもある、今まで気づかなかった」と話し「置いてもいいんですか」と自発的に箱庭の棚へ向かい、「一番置きたいもの、触りたいものはこの2体（男女の抱擁、赤ちゃんを抱える母）ですけど、これは今おけません」と一度手に持った後、棚に戻し、「私がいま置きたいものを置きます。今の私の気持を表現するものを置きます・・・これですねと（砂箱の中心に針金で出来た竜巻）を置き、上部真ん中にマリア像、マリアさんの隣に木を1本、その隣に少女を置き、左下に「動物の家族を作りたいな」と（豚の親子、親一匹、子3匹）を置く。「マリアさんは神様というか、何か見守ってもらっているというか、どんなことがあっても見ている、そんな存在。この木は木の中で一番さみしそうな木を選びました。少女は最初膝を抱えている女の子を置こうかと思いましたが、それはあまりにもかわいそうに思えたので、自分の足で立っている女の子を置きました。動物って、家族の情愛が強いですね・・・」と箱庭について語る。



箱庭（#14）

#15:「すごく楽な感じがあります、夏の頃はしんどかった」。

#16:（5分ほど遅れる電話連絡）次男の文化祭に参加した時、Eが先天性の病気を持つ子どもの校内のエレベーター設置の署名活動に協力した際、その親や祖

父母が『こども（孫）のためにありがとうございます』と深々お辞儀をされるのを見て、「私の親ではあり得ない。そういうことをしない、ただただびっくりした。母親ってこういうものなんだ。ショックを受けた・・・。愛し慈しむってことはこういうことなんだと思って、驚きとうらやましさとというか、なんか感動したというか」。

#19：（母とのこと）20歳のときのこと、「旅行先でお土産として買った陶器、手鏡などが、母が布団を干す際に割れたらしく、『片付けないお前が悪い。だらしないお前が悪い。布団を干してやったのよ、だから割れたの』と謝ることもなく、私を責められたことを思い出すし、母の言ったことに疑問を持つとか、反論するってこと、そんなことを考えても見なかった」。

#20：「長男が話しかけてくれました」とテンション高く話し始める。『塾まで送って欲しい』と塾のアルバイトへ向かう車中に『すごくしんどい。この1ヶ月何をしても楽しくない』話をしてくれました。「無理すると身体を壊すので」と案じると『分かっている、うるさい』とのこと。

#22：「小学低学年から5年間、日曜学校に通っていたんです。毎週楽しみで、でも嫌なこともあったんです」<嫌なこと？>「小学5年生のときに神父さんに呼ばれて懺悔室へ行くことがあって、最初は性的なお話だったんですけど、だんだんエスカレートしてき、神父さんのものを触らされたりしました。神父さんは、いわゆる小児性癖のある人だったんだと思います。このことは母には話していません・・・黙っていました」と神父さんからの性的いたづらをされていたことが涙ながら語られる。

#23：「長男が半年ぶりに自分の気持を話してくれた」と塾への送る車内で『自動車の免許とるのにお金を出してほしい』こと『親は僕に厳しいが下2人のきょうだいには甘い。親は僕を認めてくれていない。お父さんは大学に受かったときに喜びもしなかった』と話し「あなたが怒る気持も分かる。ごめんね。腹が立つよね、としか言えなかった」。

「新聞の投稿欄に子宝に恵まれた娘の母親が『4人目の子ども、かわいい』と書いていて、びっくり、子宝を喜ぶ母親がいるのか」と。Eは、3人子どもを産んだことについて『犬猫じゃあるまいし』と非難され続けてきたことがあり、こうした非難を変だと思っていなかったことが語られるが「変だと思わなかった

のも変だ」とも語る。またこれまでの自分を「母からの視点でものを見てきた、母親がすべて法律だと思っていた」という。

#25：友人から近所のプロテスタントの教会のクリスマス会のお誘いがあり、賛美歌を歌う途中に涙があふれんばかりに出てきたときに「涙をこらえようとはしましたが、こんなに涙を流したい自分がいるんだったら邪魔してはいけないと思ったんです」と自分でも驚くほどの涙が出たそうです。「何か私って本当に辛かったんだな、悲しかったんだな、これほど無防備にならないと、つらいと言えないんだな、と思った」が「自分がつらいんだということを認めることは、恐ろしかった過去を認めることになる」とも語り、その後の牧師さんが神さまは羊飼いを最初に呼ばれたとする聖書から「私は人間の士農工商、一番下、カースト制度の一番下なんですね・・・そういう私でも生きていてもいいんだ、という気持ちになった」と話される。

#26：「前回にお話をした賛美歌を聞いて泣き崩れた自分がいて、あの時に自分は泣いてはいけない、と思っていたんですけど、でも、涙が出ることに任していると、自分の内側から無意識ですけど、その内側から「私は本当につらかった」という思いが出てきたときに、私はこんな気持ちを持っていたんだ、私は本当につらいんだ、私はボロボロに傷ついているんだ、と思いました」。

（主人について）「主人は私がこれだけ傷ついていることは知らない」。「私がつわりでしんどくて家事のことが出来ない時に、家事をお願いした時でさえ、『なんで俺がそんなことをしないとイケないんだ』と言われたこと、「これだけ具合が悪いのに」と思いながらも、言うとは傷つくので我慢したことが語られる。

（長男について）「最近、長男はよく話をしてくれる」と表情柔らかく話される。
#27：「昨夜気づいたのですが、子どもの頃には、眠る前にお祈りをしていたな・・・と、なんでしていたのかな・・・毎回「ごめんなさい、ごめんなさい」って」と小学3年生から「こんな私をお許してください」と眠る前にお祈りすると、ホッとして眠れたことが話される。最近になって、「ごめんなさい」から「ありがとうございました」に変っていることに気づいた」とのこと。しかし、眠る前にX-7年前に母との縁を切り、うつ症状になりはじめた時分に「主人が浮気をしていた」ことが思い出され、寝ようとするとうるうると裏切られた思いが

出てくる様子。

#28：「最近、主人が『仕事で人間関係がうまく作れない』とポロっと言う」。
「夫は、家同様に仕事の相手先の話をかかないでウワーッと行って、二言目には、怒鳴っているようです」。

#29：近所の人からお茶を誘われて外出した際「人と話をしている時に知らない内に肩や身体が緊張しやすいというか身体に力が入る」<どんな感じ？>
「奥歯を噛みしめている。すぐに身体に力が入り、息を抜くんですけど、すぐに力が入る」と自分の身体と緊張との関係について語る。

#30：「昔のいろんな話が出来ても、幼かった頃の私は、何も感じていなかった。今もそのときの気持などはシャットアウトしているから話をする事が出来る。そのときの辛いことを見ないようにしてきている。やっぱり過去のことは私にとっては激痛すぎて・どんなに自分がショックを受けるか、怖くて話せない」。

#31：「私は人と話をしているときにこう肩が知らない内にあがって、息をつめていて、それにふと気づいて、いけない、いけないと肩を落としてリラックスしようとしている自分がいます。・・・元気だった頃、ガイドヘルパーの仕事していたときに自閉の子とかダウンちゃんとかと一緒に過ごしたことがあって、その時間が癒されるというか、自分のままでいられたんですね。ある重たい自閉症の女の人と出かけた時に、言葉もしゃべらないし、さてどのようにコミュニケーションをとればいいのか考えていて、ある絵画展示を見た後に、彼女が口の中で独り言のような感じで何かを言っていて、その言葉の中に音が出ていたんですね、その音「ルー」を真似てみようと思って、彼女のする口音に続いて、私も「ルー」って言うてみたんですね、そしたら彼女は私を見て、すごく表情が変わり、私にひっついてきたんです、しばらく一緒に音を鳴らしていました。・その時って、私自身の肩は緊張していなかったな・・・って思い出しました」。

#32：「これまで母親から『お前は優秀ではない、成績も良くない、人より秀でたものがない、それなのに食べることは食べる』と食事毎に言われてきた。砂を噛むような感じで食べていた。長男に対して母親にされてきたことを同じようにしてきていて、「優秀でないといけない、スポーツとか何かに秀でていないといけない」と自分の価値観を押し付けてきた、今はその人はそのままでいいんじゃないかなって」。

#33 : 「クリスマス会に行ってから、行けるときには何回か日曜礼拝に行っていて、牧師さんの奥さんは、皆さんから『お母さん』と呼ばれていて、私も「お母さん」って呼んでいるんです。「お母さん、どうやってこの料理を作るの？」と聞いたり、「これで良かったかな、お母さん？」と独り言のように言っています。自分の母親とはこういうことがなかったな・・・お母さんは、私のような他人にも自分の失敗談とかお話をされるんです、温かい気持ちになります」。

#34 : 「友達と会ってお話をしたがすごく緊張して疲れました。少しでも相手に悪い感情を与えたくないというか、相手が私と会って良かったと思ってくれるようにすごく神経をつかう」<それはしんどい>「逆に神経をつかわずに人と接するということがどういうことかが分からない。最近になってこんなんだから人と話をすると緊張し、言葉がつまるんだということが分かってきた」。

#35 : 「教会の震災ボランティアがあつてどうしても行きたかったので主人に「今日は教会に行ってくる」と言うのと機嫌悪く、良い顔はしませんでした」<したいことを言えた>「はい、「教会に行きたい」と言えた自分にびっくりだった」<行きたいんだもんね>「行きたいから、行きたいと言った」。

#36 : 「1 人でいても緊張し、息を止めていることもあり、頭痛もある、身体が硬くなり、それで自分で息を出して身体を緩めている」。

「最近ですが、夢を見るんです」と自発的に夢を語る。

夢 1 : 津波というか、事故に遭うというか、その交通事故とか直接的なはっきりした事故ではなく、全部暗くて、真っ暗の中で事故が起きるといふか、向こうからぶつかってくるといふか、無抵抗のままの人が襲われるといふか、津波そのものではないんですけど、自分が危険な目に遭う夢

「高校生ぐらいからずっと繰り返してみる夢がある」と

夢 2 (反復夢) : どこにも入れない夢。どこにも仲間に入れたい夢、高校の同級生、会社の同僚など顔見知りの人たちが出てくるのですが、みんな楽しそうにしているんですが、でも、私はそこには入れない。夢の中では、自分の性格や能力が低いからなど、自分自身に理由があるので、仕方がないなと思っている。辛い、さみしいなと感じていても、自分が原因なのだからしょうがないという絶望感

というか、不安感というか孤独感で目が覚めます。

夢 3 (反復夢) : 着物を着ている母親を追いかけている夢。母の背中を追いかけていき、手が届きそうと思うと、母は角を曲がる、私もそれについていくように、背中をそれでも追いかけて、苦しくて、「はは〜」と声をあげて、苦しくなって起きます。母は私が2-3歳の時に着ていた着物です、妹が産まれるまでは、着物を着ていたんです。

夢を報告後、沈黙が10分ほど続くその間、深い眠りに入る。

#37 : 「一番苦しかったことは人前でけなされることだった。母はよく親戚の前でも『人間のくず、汚いし、内面が腐っている』と私の前で言っていた」 <ひどい、むちゃくちゃだ> 「でも、その時は変ですが「あ〜そうなんだ」というぐらい。母親の考え、相手の考えに自分を託す、それが私が生きる全てだったと思う、それ以外自分が生き抜く方法はなかった。でも私も普通の人間で、心もあるんだ、それを分かってほしい」。(涙)

#39 : これまで内科で処方されているマイスリーを服用していたが、カウンセリングとともに精神科医からの処方が必要と考えていたところ、E「朝の体のだるさなどしんどくて、これは、カウンセリングによって整理することとは別にそのための薬を飲んだほうが良いと思うが、薬漬けになるのも怖い。どこに行けば良いかわからない」とのことで、セラピストが紹介状を書きクリニックを紹介することになる。

#40 : 主人が子ども達と情緒的交流を行わないことの話から「今思うと、当時父に会いたかったな、とっていました。小学生のときですけど、夕刻になると家に帰宅するのが嫌な思いになり、そのまま父の影があるのではないか、ひたすら父が帰ってくるであろう、方角に歩いていたんですね、あの影がお父さんと思って歩き続けると、だんだん遠くまで歩いてしまい、結果帰るのが遅くなり、母にひどく怒られ、叩かれていた。そんな生活だったので、父親が子どもとどのよう接するものなのか分からないまま大きくなっているんです」。

#41 : 「こう何度も思い出し、傷つくたびにそんな自分が嫌になる。どうしてこう何度も思い出してしまうのだろうか、まだちゃんと吐き出していないだろう

か」<何度も思い出す>「なぜ自分の娘を苦しめたのか、その理由を母の身体を揺さぶってでも言いたいけど、でも、仮に言っても『あんたが悪いからよ』と言われるだけです」。

(母の生育歴について)「母って人も私生児で生まれて、自分の父親が分からないまま、自分の母(Eの祖母)と暮らしていたけど、叔母さんのところに預けられて育った人、つらい境遇を持っていて、私が小さい時に母(祖母)へのうらみつらみを聞かされました」<預けられた?>「祖母は食べ物屋をしていたのですが、うまく行かず、叔母のところへ居候し、水商売をはじめたんです。祖母も気性の激しい人で、母も祖母からせっかんをされていたようです。見かねて叔母が引き取るようなことになったようです。私も4歳の時から祖母と暮らし始めましたが、よく近所の人とトラブルを起こし、機嫌が悪いと食事のおぼんをひっ繰り返して『そんなの食べたくない』と言われ、なぜか母から『お前が悪い』と怒られていました」。

#42:(祖母について)「祖母の名前が「○○」というんですが、母親からは、「○○は数字の3,祖母は3人目の女の子で、曾祖母は、跡取りの男の子が欲しかったようで、女の子だった祖母は『お前なんかいない子だ』と言われて育てられてきたようです。母は、私に『いない子だと言われて大きくなっているから、あんなきちがいになるんだ』と言っていたことを思い出しました」。

「私の名前は○○ですが、○は、未熟児で生まれた私が大きく育ちますように、と願ってつけられた名前のようなのです。昔、父から聞きました。母からは『父が異常にかわいがるので腹が立った』ということを知りました」。

#43:「父が朝出かけるときに見送る間、泣きじゃくり、姿が見えなくなると泣き止む私に対して『お前は父親、男性にこびてやらしい』と言われて、父の姿が見えなくなって泣き止むって普通ですよ」<もちろん>「当たり前ですよ、別れのときに泣くことは」<当たり前だよ>「父親との記憶は、本当に1対1で会話らしい会話をした記憶がないんです。この1年、セラピストと話した時間のほうが長いと思います。母が言うような可愛がられた記憶はないです。私が父に近づくと母の機嫌が悪くなるのが分かっていたから、私の方からは近づけなかったということがあるかもしれません。幼稚園のときに、唯一父の田舎へ行ったときにそのあぜ道を父ではないですが、祖父(父方)と手をつな

いで歩いた記憶があります, 一度だけですが」。

#44: 「病院へ行ってきました, 緊張しましたが・・・Dr も『薬があっていないのではないか, まずは, 睡眠が出来るように調整をしていきましょう』」。

「いつも母親は私と二人きりのときに言う。電話や父親がいない時とか, 父親がそばにいるときには, 責め立てていた言葉を急に黙っていた。特に母親は家人が寝て寝静まったときに, 私に対して責めることがほとんどだった」 <陰湿だ> 「そうですね・・・育てた人がみいくいことをしたという反面, そこまで憎まれていたのかということ認めたくない・・・でも, 陰湿ですね」 <ひどいよ> 「これまで私が悪い, こんな私は愛されなくて当たり前だと思っていた。本当に母が怖かった。よく死ななかつたと思う, 首を絞められたりはないけど, 心理的にというのでしょうか, 言葉で責められていました」。

(教会の講演を聞いて) とある年輩の神父さんの講演を聞いたらしく, その講演は「何か不思議だけど聞く必要が自分にある」と思い, 体力的にしんどいながら聴講する。講演では, 神父さんの実父による虐待のお話になり, 父親の死後毎晩のように父に追いかけられる悪夢をみたが, はじめて妻に過去に受けた暴力の話をして以来, 不思議と悪夢をみなくなつたらしく, 神父さんが『他界をしても, 昔に受けた暴力などの記憶, 心の傷は一死死ぬまでなくなるが, その傷を引き受けていくしかない』という言葉が心に残ったことを話される。

【第2期: #45～#69 (X+1年6月～X+2年1月)】 反復される事実の語りによる「もう1人の私」の語り

#45: (小さい女の子の存在) 結婚式前日に家財道具をすべて新居に移したエピソードから「私は二度とこの部屋に戻って来たくない, 帰りたくない」という思いがあったことを語り, この気持が「私の生の感情」という。「最近, 小さい女の子のイメージがいるんです。その女の子が『しんどかったね』と大きな私に頭をなでてくれるんです。小学生の低学年ぐらいの女の子。私を責めることもせず, 『あの時の私はしんどかったね』って。一人でお風呂に入っているときです・それまでは, 未熟児の赤ちゃんや生け贄にされる囚人などのイメージが出てきて, 自分の力ではどうにも出来ない, 絶望感, 無力感に浸っている状態だったんですけど, 今は女の子が頭をなでるイメージが自分の中から出来たも

のなんです」＜自分の中から生まれたもの・・・＞。

#46：(小さい女の子の存在)「昨日も慰めてくれました。何も言わないし、私のことをじっと受け入れてくれる存在。その子は私を大事にしてくれるので、私もその子のことを大切に大事にしたいです」。

#48：(小さい女の子の存在)「前にお話をした年輩の牧師さんの虐待のお話で、『幼少期からの暴力を受けた苦しみは今のこの年になっても、消えません』の言葉を聞いて、私自身、これまで苦しんできたのは、この子どもの時の傷なんだ、ということは今更ながら分かったんです。何かストーンと納得したんです・・・不思議なことがあるんですが、女の子イメージが登場してから、私にとっての時間が流れはじめて、たとえば、森の中の小川がサラサラと流れている様子です。そうしたらすごく自分の気持ですが、日常色々ありますが、自分を冷静に見えるというか、自分の気持が分かりやすくなっているというか、感情を通して分かるようになってきた。うまく言えませんが・・・」。

#49：「母に『いやらしい、父親にこびて』と言われ続け、昔に言われたことを思い出すが、自分が悪いという自分を肯定出来ない自分がいたが、今は、そういう思い、考えになると、自分で「止めよう」と思えるようになった。私は母からの呪いに負けないぞ、という思い」＜まさに呪いだ＞「なんで私は母から呪われたのか、ということを考えて、なんでなんでと追求しても分からないので、それよりも、私はこれからどうするのか、という未来について考えることのほうが大切なように思う」。

(小さい女の子の存在)「ここでしか言えませんが、あの小さい女の子の話ですが、その女の子がちょっと大きくなってきた。時間がスラスラ流れるようになり、その女の子が『あまり人には言わないでね、あまり言うといなくなるよ』というのです。それから『私大人にならなくちゃ』って一瞬いなくなって、しばらくしてからその女の子は成長して戻ってきたんです、言えば不思議の国のアリスのようで、小さい部屋にいたアリスがだんだん大きくなり、その部屋をバーンとはじき出し、その牢獄のような小さい部屋、暗い牢獄の部屋の中をはじき出し、大きく帰ってきたイメージです」。

#51：「20年ほど前ですが、3年ほどパッチワークを教えていたことがあるんです、それを2週間ほど前から、再開し始めました。とりあえず、何を作ろうかと

思っていたんですけど、教会へ行く時にいれる聖書のかばんを作ろうと思って、それが制作していると楽しくて・・・身体で覚えたものは中々忘れなくて、覚えているんですね、すいすい・・・確かに根気は昔より続きませんが」。

#54：「母から責められている習慣が抜けない。『のろま、要領が悪い、出来が悪い』いつまでこの声が続くのかな、母がおかしな人だというように思っているのに」。

（父とのこと）「小学 1,2 年生の頃だと思いますが、父親の実家へ行き、親戚がいる前で「お父さんのお嫁さんになる」と言ったら、母は『父親の気をひく、いやらしい子やわ』と言われたことを覚えています」<ひどい、お父さんへのそうした思いは自然な気持だと思う>「でも、そうした思いって大人になるまで気づかなかった、母親が言うように私自身がいやらしい子なんだと思っていました。父が私を可愛がっていたので、母が妹を可愛がったんだと思います」。

#55：「昔トイレに入っても、おそるおそるでした。母にトイレットペーパーの音を聞かされていて、外に母がいるのではないか『紙のつかい過ぎ』と怒鳴られやしないかと。物音を立てずにしていました。母から私はストレスのはけ口とされ、口ごたえもできないから、私自身の感覚がいびつになった、そういう環境のなかでそう鳴らざるを得ない、ということカウンセリングで話しながら分かってきた。小学校の時から狂気な母親に育てられていることを感じている私がいって、こんな母親に育てられていると私自身がおかしくなるということを漠然と感じていた」。

※次回の面接が頭痛等の体調不良にてはじめてのキャンセルとなる。

#56：「母から私はひどいことをされてきた。自分を大切にすること、それをつぶされたのが一番悔しいし、悲しい、自分を大切にすること、それを一切つぶされた、くず、ゴミのように扱われてきた、バカにされ、人と比べられて、自尊心をぐちゃぐちゃに踏みつぶされた。これだけひどいことをされたことを客観的には分かる。でも当時、私はどのように感じていたのか、ということ思い出そうとすると、突然自分の感覚がなくなるんです。うまく思い出せない。たぶん思い出して自分がおかしくなること、余分かもしれないがそれでセラピス

トに迷惑をかけるかもしれないし、私がおかしくなったらセラピストも大変だ
と思うし」＜そんなことは関係ない、一緒に考えたい＞「ありがとうございます」。

#58：「娘に『私はお母さんと違って嫌なことは本人に言う』という言葉に傷つ
いてしまって、なんでなんだろうか、でも娘の言う通り、主人に対しても怖くて
言えない」と娘とのやりとりに傷つく E は、「私は普通の家族というものが分
からないながら、他のお母さんから学び、一生懸命に子育てしてきたのに娘にそ
う言われたことはショックだった、私にとってはこれまでの私の子育てを否定
されたように感じたんだ・・今気づきました」。(涙)

#59：手づくりパッチワークで小物をたくさん作り、教会の神父さんの奥さん
(お母さん) やその 20 歳になる娘さんにあげると、大変喜ばれた話をされる。

#60：「過去のことは過去のことで、置いておこうかなと思って、忘れること
は出来ないけど、それをなくすということは過去がなかったということには出
来ないし、そういう親に育てられた人生、それは私の人生、そういう環境で育て
られた私、その影響は自分の中であって、自分はダメだという気持があるが、今
の現実、自分が日々付き合っている人のことなどを大切に生きるというか、でも、
それにしても私はひどいことをされてきたな・・と思います」。

#63：「これまでカウンセリングに一年半ほど来てお話をたくさん聞いてもらっ
ていますけど、最初は、本当に聞いてほしいことがたくさん沸き上がってくる
というか、聞いてもらわずにいられない、そんな感じだったんですね。それが今は
やっと落ちついてきて、逆に話せなくなってくるというか、何か言葉にしたくな
くて、言葉にすることに対してたくさん、という思いと聞いてほしいという両方
の気持があるんです。話していることを考えると、今は本当にひどい状況に私
はあったんだな、というように思います。しかし今こうして口にすると、もう一
度自分自身が傷つくんです、でもそれも自然なのかな、とも思います。前は話し
ているだけで、事実を話すだけでしたが、今は気持を感じるというか・・」＜そ
うね・・辛かったね＞「はい、辛かったな、と思います」。

その後、セラピストからバウム (以下、バウム①) を誘い、「絵ですか、小
さいときから『絵が下手』と母から言われてきていて、絵を人前で描くのは恥
ずかしいんです・木ですか・・木というと私のなかで「木はこうだ」というイ

イメージがあるのですが、それをうまく描くことはできませんが・・・鉛筆、懐かしい」と筆をとって静かに描き始める。「左の樹冠にあたるところから薄く囲み、その囲みに2-3回囲むように描く。最初に描いた樹冠を消しながら、心持ち一回り大きく描く。それから、左側の幹を下から上に枝につながるように、右の幹線を下から上に描き、下側の枝を左右に描いた後に、上に二股の枝をつける。その後、根の部分を描き足し、「これが描きたかった、木といったこういう大きな木のぬくもりを受けて、この洞の中に動物の家族が住んでいる、そんな木なんです、動物を描くほど絵はうまくありませんから、描けませんが、木と言えば、木の実がなる、というイメージではなく、木の中で命が育まれている、そんな温かいイメージがあるんです」と洞を囲み、その中にも小さな洞を描き、「ここに動物の家族がいるんです」と語る。



バウム① (#63)

#65 : 「こうして話をしていると、これまで「母は怖い」という思いしかなかったが、今は「母は嫌いだ」と言えるようになっている」。

#66 : 「ここへ来る途中に決めたことなんです、「私、母と会わないことを決めました」それって冷たい人間なのかな、と思いましたが、でも今回私はそれで良いと思えた」 <自分で決めたこと> 「そうです、昔から母に『親に育てられている恩がお前にはある、お世話になっているんだから』と言われ続けていたので、親との縁を切ることは、自分自身が薄情なのかもしれないと思ったが、それ

も「もういいや」<そうだね>「はい、肯定してもらえて・・・でも今セラピストは何を言いましたか？」と無意識にセラピストが<そうだね>と言っていたために、2人とも話のくだりを思い出せなくなり、何度か話の前後を繰り返し、2人で辿っていく感じがあった。

#67:「元気になってきたので、そろそろカウンセリングを卒業しようかと思っているのですが」<というと?>「カウンセリングを受けられることは嬉しいのですが、これ以上セラピストに甘えていいものかと」<甘えてはいけないのでしょうか?>「甘えちゃいけない・・・」<どうして?>『甘えるな』と母からすごく言われてきた・・・主人にもものを頼めないし・・・私甘えるのが苦手だな・・・カウンセリングではすごく甘えている・・・」<いいじゃないですか>「甘えてもいいんですね・・・」。

(小さい女の子の存在)「以前お話をしていた小さい女の子ですが、その女の子のこと「Eちゃん (Eの名前)」と呼ぶことができたんです。白い服を着た小さな女の子、フワフワの女の子ですけど、Eちゃんに「辛かったね」と言って抱きしめてあげました。たぶんこれまでさんざん親にいじめられてきて、それに抵抗できないままだった私自身ではないか、と思うんです、Eちゃんを見ていると」<Eちゃんを大事にしたいね>「はい」。

【第3期：#70～#108 (X+2年1月～X+4年1月)】 日常の語り

#70:「主人に対しては、怒りたいことは山ほどある、どれほど家族の者たちを傷つけているか、ということに気づいてほしい」。

#71:「主人は自分のことや親のことを悪く言われると、カーッとになって、怒鳴るんです。子どもが主人に話しかけるようなことはまずないです。以前に「子ども達と話をして」とお願いすると『家のなかでそんな気を遣うことができるか』と怒鳴られました」。

#72:「何か主人は、感情の希薄さ、コミュニケーションのなさ、業務的なやりとりなど、今思うと主人は私が真剣な深い話をしようとする、必ずといって顔を横に向けて視線を合わせないんです。最近アスペルガー症候群の本を読んでいた、まさに主人のことがそこに書いてあるんです、この20年間思っていたことは、そういうことか、という気持になりました」。(出産時のエピソード)「長

男が誕生したときに、生まれたことを喜ぶ前に、生まれた我が子を見て『責任が増えた、どうしよう』とだけ言ったんです、それを言ったきり病院を後にしました」。

#73：「主人に対する見方が分かってきて」と休日に飲食店のドライブスルーに寄った際、混雑してイライラしはじめている様子を見て「最初のプランと違うので少しパニックになっている」という理解をし、「大丈夫だから」と声をかけたことなどが語られる。

#74：「夢を見るんです、繰り返し同じような夢を」。

夢 4：仲間に入れたい夢。学生時代の自分になっていたり、職場で働いている自分になったり、その輪に入れたい私という夢。職場や友人がそこにいるのにそこに入れたい、それで私は自分のことをダメだから、入れなくて当然だと思っている夢なんです、私みたいな人は入れなくて当たり前というか、それは当然のことというか、しょうがないと夢の中で思っている。

(連想)「これまで自分はダメだな、と思っていたんですね、それでも最近は、そんな風に思っていることはダメだと思っているんです。主人と3人の子育てを20年間してきたんだな、と思うと、それはそれで大変だったなと思うようになってきました」。

#75：「主人はアスペルガー的だな、とつくづく感じました。昨日、次男の高校合格祝いで食事に出かけたのですが、主役の次男には一言も話をしないで、長男とだけ経済の話をしていました。あんまりなので「今日は〇〇のお祝いの会なのよ」と言うと、『そうだったな、ひとまずおめでとう』とだけ言いました」。

#76：「主人の特性が分かってきたというか、主人が怒らないようにするための言葉かけを工夫しようと思って、それでずいぶん生活がしやすくなったなと思います。その反面、こうした主人の特性って変らないというか、このままなんだと思うとさみしいですね。・・・今思うと、主人の欠落した部分っていうんでしょうか、それ自体を結婚当初からこれまで見分けることができなかったというか、私自身も何か欠落した家庭環境の中で育ってきたので、自分が悪いと思って

いたものですから」。

#79：これまでと違い、左中指にダイヤモンドの指輪、ブルーのジャンパースカートとカジュアルな服装で来室、「最近、おしゃれをしたいというか、お洋服とか化粧とかに興味が出てきた」と身なりの違いに驚く。

#80：「千と千尋の神隠しじゃないですが、もののけがひたすら食べてそれを吐き出すところがあるんですが、カウンセリングで話していることはあれと同じですね。これまで溜め込んできたものを吐き出す、吐き出して吐き出して吐き出し続けて、そのへどろをセラピストが聴き続けてくれて、それで母親のことも「一生もう会わない」と決められた。へどろの多さにセラピストはうんざりしたかもしれないですが（笑）、しかし傷自体はなくなるんだなと思って、傷はなくなるけど、その傷があることを抱えて生きていくというか、まあ誰でも何らかの傷を抱えて生きているんじゃないか、とその傷を抱えて生きていくことが自分でいるということだと思います」。

#84：「前から冷蔵庫が欲しくて、2万円ぐらいなんですけど、以前に冷蔵庫が欲しいというと、お金をあまり出したくない人なので『ダメだ』と言われたんですけど、今回は、欲しい冷蔵庫を徹底的に調べて、まず買おうと思っているお店がどこのお店よりも一番安く、それから主人に新聞紙でどれくらいの冷蔵庫の大きさであるかを実演し、その時に実際の冷蔵庫を見てもらって、5人家族分としては小さいことを確認してもらい、もう一台冷蔵庫が必要であることを論理的に説明したら『いいよ』って。主人に対する関わりというかコツが分かってきました」<すごい、工夫>。

#85：「母親から『お前はダメだ』と言われ続けていて、その結果私自身まともな人間ではないという思いをずっと抱えて生きてきた・・・聖書では、神様の前ではどんな罪人でも平等であること、はじめて私が教会に行ったときに自分でも訳が分からないほど涙が出てしまったのも、そのときに私は、ダメな人間だからこそ、教会に行く権利がある、って思ったんです。何か救われました・・・洗礼を受けようかと思っています」。

#86：「ヨガ教室に通い始めました」

※面接の間隔を2週間に1回への希望あり。

#87：「娘が高校の授業中に発汗、動悸が激しくなって、彼女曰く『パニック状態』

になったようで、またなったら不安と学校を休みがちになっています。国公立の受験勉強がプレッシャーになっているようです・・本当は『絵本作家になりたい』と言っていて、昔から絵や物語を描いたり作ったりするのが好きな子だったんです」。

#89：「ウォーキングをしています、調子は良いです」。

#90：「10月30日に洗礼を受けました、〇〇海岸で頭を海水に浸すという洗礼の儀式があり、天使のような衣装を着て行いました」と洗礼時の様子について語る。洗礼を受けたことで「どこかに所属している感じ、それがこれまでなく不安でありましたので・・安心感があります」。

#91：「娘が『自分がしたいことをしたい』と言い出し、絵本作家になりたいということで、これまで美術のデッサン教育を受けていなかったのですが、ただ絵が好きただけな子でしたが、美術部の顧問が『本気なら毎日教えてあげる』と言ってくれたことがきっかけで今朝から登校しています。〇〇美大を受験する予定です。顔がイキイキしているんです。これまでは学歴とかに縛られていたようですが、『自分のしたいこと』を決めるまで葛藤をしながら波がありました、自分のしたいことをすることは大切ですね」<本当にそうですね>。

#92：「今回娘も自分自身も体調を崩し、うつ状態になったことにより、娘なりに成長したというか大人になったように思いまして、それで私自身の生い立ちというか、私が育ってきた環境というか、それを話すタイミングかなと思いまして、娘に話をしてみたんです。それで娘はじっと私の話を聞いてくれて、そして最後に『そんな大変な家庭で育ってきているのに、お母さんは私たち子ども3人を非行とか、そんな悪い方向にならないように育てたお母さんはすごい！』って。嬉しかったですね」<そうですね>。

#96：（主人とのことについて）雨降りの後、「私が側溝の落ち葉を拾い濁かしていた落ち葉を主人が再び側溝に落としていた」ことについて、「決してこれまでの結婚生活で謝らなかった人が、この前私に謝ったんです」と驚きの様子で話す。「はじめて『ごめんね』って、私が変わると周囲も変わるのかなって思いました、不思議です」。

#98：（主人とのことについて）「主人が仕事でのイライラを持ち帰り、家にある時計を叩き付けて割ってしまったんですね、前だったら関わらないようにして

いたのですが、「この人はストレスをこういう形でしか発散できないんだ」と冷静に思えて、粉々になったプラスチック片を掃除機で掃除したんですね、そして結婚生活 2-3 度目の『ありがとう』を言われた。『ありがとうとごめん』は絶対に口にしない人だったのでびっくり」。

(母とのことについて)「近所の B さんとウォーキングをしているのですが、その B さんは普通の家庭で育った人で、B さんの母親への愛情というか、そうした愛情ということを考えて、胸をかきむしりたくなる気持ちが出てくるんです、そうした気持ち考えると自分でどうしたらいいか分からなくなりますが、最近はいまでの私は「うらやましい」という気持ちを閉じていたんだと思うんです。

「うらやましい」という気持ちが自然に感じたんです、そんな自分がいることに気づいたんです」。

#99 : (父方祖父との思い出)「人に頼まれたことって相手に奉仕するというか、相手も喜んでくれるので嬉しいのですが、これまで母からは『バカのつくおひとよし』と言われてきた」というエピソードから祖父の美談を思い出す。祖父は、戦時中、祖父以外の村の人たちが都会からの疎開中の医者一家との交流をしていないときに、村にコレラがはやり、村民に病人が出た際、祖父たちはその医者から早めに薬をもらって身内に被害がでなかった、という祖父の美談があるらしく、親戚の間では『バカなお人好し』と言われてきた。E は「これまで気に留めていなかったが、祖父を誇らしく思う。その祖父のお人好しのところも、私のお人好しもあっていいんだ、自分にはそんな祖父がいるんだ、それも良いところなんだという思いに気づかされます。素敵な祖父です」。

#102 : 「聖書の勉強会するとき、私自身体調があまり良なくて、しんどい様子を見ていたら、牧師の奥さん（お母さん）が、私をマッサージし始めてくれて、申し訳ない気持ちを伝えると、『私はあなたの誰なの？』と言うので「お母さん」と言うと、『そうでしょう』というやりとりをして、私自身泣けてきて、「お母さん」って言えたことで気持的に何か楽になりました」。

#103 : (母との関係について)「母親に支配されていた時代、昭和という時代、そのイメージは暗黒。昭和の歌謡曲が流れると昔の記憶が思い出されます。特に小学生は暗黒だった。自分の意志というものが全くなく、母親の言いなりになり、押さえつけられていた時代です、今思うと、中高のときも今でいううつ状態

ではなかったかと思いますが、意欲が湧かなくて、気づいたら学校を卒業していたという感覚、短大も親が決めた」と語り、その後短大時代の母からのひどい仕打ちを語る。

#104：「最初ここへ来たときに頂いたセンターのパンフレットが有るじゃないですか、そのパンフレットをかたみ離さず持っていました。でかける時のお守りじゃないですが、それとカウンセリング後の領収書もそれも捨てられずに持ち歩いていたんですけど、最近、パンフレットや領収書を持ち歩かなくても済むというか、今はなくてもいいかな、って思ったので」。

※産後ヘルパーのアルバイトをしはじめる。(月 1, 2 回, 一回 2 時間)

※次回から面接の間隔を 1 ヶ月に 1 回の変更

#105：「家族で外出に出かけたときに、長男が『彼女が出来た』って言い出して、次男も『俺も彼女が出来た』って」と告白し、「へー」って感じで興味を持った私ですが、主人は「ふーん」って様子。「長男がオタク趣味とかはありますけど、何か凝り固まった感じが解けている感じ、普通の若者のように変ってきた」と長男の印象について語る。

#106：(主人との関係について)「最近、主人に対するねぎらいの思いを言葉にしてみようと思って、たとえば「お仕事ご苦労様」「お父さんが仕事をしてくれているから生活が出来ていますよ」とか、そういう言葉かけをしています。そうしていると主人の機嫌も良いというか、私自身が楽に過ごすためには、どうしたらいいかを考えていきついたら、主人に対するねぎらいを言葉にすることでした」。

(ヨガの話題から)「1 年前から週 1 回ヨガを習っているんですけど、主に呼吸法を練習しています。最初は腹式呼吸が出来なかったんですけど、ここ半年ほど前から、自分の呼吸がうまくできるようになっています。(目を閉じて)横になって、手、腕の裏側を上にして、顔と目を緩ませて、肩の力を抜いて、鼻で息を吸って、お腹と胸に呼吸を溜めて口からゆっくり長く吐くんです、だんだんお腹の丹田あたりに力が入ってくるので、そしたら息が吐ききれた状態なので自然とその反動で息を吸い込むようになっています。そしたら副交感神経が優位になって手が温かくなります」と E のインストラクションに合わせて呼吸を

していると、Eさんがセラピスト、セラピストがクライアントのような感じになり、面接室内が不思議な空間となる。

#107：「主人も落ちついていますが、私が落ちついているからでしょうか・・・以前は主人の仕事でのイライラ話を聞いているとそれ自体が私にとって嫌な感じだったのですが、今は「大変やったね」「お客さんの愚痴を聞くのも大変だね」と相槌を打っています。その関わりを続けていると、自然に感謝の気持ちを言えるだけの心の余裕が出てきています」。

※次回から面接の間隔を2ヶ月に1回の変更

【第4期：#109～#115（X+4年3月～X+5年3月）】日常の語りを越えて

#108：「母からは愛されなかったけど、でも牧師さんやそのお母さん、そしてたくさんの人たちから見守ってもらっています。贅沢はできませんが、日常生活がちゃんと出来て、家族が無事に一日を過ごすことが出来て、そうした日常生活がちゃんと出来ていること、これは幸せなことだな、と思うんです。そういうことに気づくことが出来ています」と日々の生活と言う身近なことへの眼差しを向ける。

娘が成人式に『お母さんの着物をきたい』ということで、母がもたせてくれたEの成人式に仕立ててもらった着物を長女と一緒に探しはじめたところ、出てきた着物は、ボロボロの着物、「私の着物は妹にあげたんだ」ということに気づき、「あ～やっぱり母はこういう人だ」と悲しみと呆れた思いに浸っていると、『お母さんがおばあちゃんと縁を切る気持が分かる』と声をかけてくれる。

#109：13年間一緒に暮らしていた飼犬が死んだこと、その悲しみについて語る。

#111：「最近、趣味Aにはまっています」と趣味Aのことについてスマートフォン内のEが練習した友人の趣味Aを見せてくれる。「いろんなデザインやこまごまとしたことが好きなもので、今はレッスンを受けていますが、もっともっとうまくなりたいと思っています」と意気揚々と話す。

（主人とのことについて）「最近驚いたことに、主人が趣味Aの実験台になってくれたんです。子どもが『忙しい』というので断られるのを承知でお願いすると『やってもいいよ』って。気が変わらない内に施術しました。終わってから、「どうして手伝ってくれたの？」と聞くと『いきなりぶっつけ本番だと困るか

な・・・と思ったから』って、すごいでしょ！」<すごい>。

#112：黒づくしのお洋服, サロン風な感じ, (趣味 A について)「今週も自宅サロンに1週間に8人の予約があります, 一人1000円のお友達価格でしていますので, 友達が友達を呼んで増えているんです。一人に2-3時間かけるので, その間, 集中しているので結構疲れますね。今は自宅を開放してサロンとしているので, 基本主人のいない時間になっていますが, 夕食や部屋の片付けなどの家事をしていたら文句を言わない人なので, 問題なくやれています。趣味 B と違い, 趣味 A は勝負が速いんです。2時間ほどで勝負が着くと言うか, デザインや色味, デザインによって使う材料が異なり, うまくドンピシャにはまる時, 色を重ねていくその2時間の真剣勝負が楽しい, 2時間集中しているので疲れますが, それまたそこが楽しいところです」。

#113：「順調です。疲れやすいときには早めに寝るなど自分で調整しています。趣味 A のほうも定期的にお客さんが来ています」。

「昨日, たくさんの夢をみました, 金縛りにもあいました」

夢 5：寝ていると襖が私に向かってくるんです。本当の襖は無地なんですけど, 夢の中の襖は武士のような絵が描いてあって, 私に向かって槍をもった武士が近づくので, 「私ではなく, 外にいきなさい」と命令すると, 外に向かって襖の武士たちが向こうに走っていくと, 部屋の中のお花がピカピカと光りだしました。

連想：夢なんですけど, とてもリアリティがあって, 寝ている時にはまさに現実かのようなリアリティさ, 私は聖書を読んでいますでしょう, 聖書には, イエスさまが3年間の間にたくさんの奇跡をおこしてられる, そんなお話を読んでいますから, 別に夢のなかで起きている不思議なことに特に驚かないというか, イエスさまは多くの人たちの苦しみに奇跡を起こしますので・・・夢って何かの暗示があるのかも知れませんし・・・」。

#114：(母とのことについて)「自分のなかで考えた方が変ってきたというか, こえまで母親に『お前はだめ, いやらしい』と言われ続けて育ってきているので, それが刷り込みというか, 自分に対する人格的否定があったものですから,

「自分はダメな人間なんだ」という自分でそう思い、主人と結婚してからも、主人から同じようなことをされていたので、母親が言った通りで「私はダメなんだ」と思って生きてきた。そんな私ですが、カウンセリングに来たのですが・・・人から愛される権利のある人間ではないか、と思えたんです。こんな風な考え方をしたことがなかったので、自分のなかで何か急に世界が 180 度変わったような、入れ替わったような感じがあって、このままの私でいいんだ、生きていていいんだ、と思えたんです」。

バウム（以下、バウム②）を描いてもらう。「根元から描き始める。左の根元の描線を上から下へデッサンのように薄く描き、色を足していくようなタッチ。根元の次に上部へうつり、幹、枝、樹冠へのぼしていく」。描き終えて「私絵が下手なもので娘に見られた笑われますね。確かに以前は木と言え、真ん中に大きな洞があり、そこに小鳥たちが住んでいるイメージがありました。今は木と言え、洞穴を描く気持にならない。『この木何の木気になる気になる』の木のイメージというか、上部の辺りには、緑の葉がいっぱいあって、用紙におさまらないわ。この辺りは葉っぱだと思ってくださいね」と描画のイメージを語り、最後に「力強い木を描きたかったんです」と言葉を添える。



図2 バウム②(#114)

#115：(母とのことについて)「母から虐待を受け、母自身も実の母から虐待をうけて育ってきて、その世代間の伝達があるわけで、それを私の代でその虐待の伝達をなんとしてでも食い止めよう、断ち切ろうと思ったんです、娘や子ども

達との今の関係を考えたら、虐待の連鎖はなんとか食い止めることができたかなって自分では思っています。主人とは離婚することで少なからず子ども達に負のものを残してしまうと思いますので、それだけは避けたかった・・・前に話しましたが、ある時に唐突に「このままでいいや」って自己受容できた瞬間があったんです、「別にいい子じゃなくてもいいわ」と自然体の私でいいんだって、十分今の私には、友達もいるし、家族もいると思ったんです、自分を赦せるようになりました」。

最後に「今日が最後になりますね、5年間ありがとうございました。私にはやはり5年ほどの時間が必要だったなって思います、吐き出して吐き出して、それがなくて今の私はなかったと思います、5年前、死んでしまおうかと思ったんですけど、それでも何かの力で生かされて今があります、セラピストは私にとっては命の恩人です、人一人救ったと思ってください」<ありがとうございます、私もEさんからたくさんことを教えてもらいました>と「最後に握手してください」<はい>と握手し、面談を終える。

第4節 事例の考察

(1) 反復される夢を巡って

Eは#37に自発的に3つの夢を報告する。そのうち、夢2「どこにも入れない夢」、夢3「着物を着ている母親を追いかけている夢」は「高校生から見ている」と言うように、筆者と出会う以前からの夢であることから、おそらく反復夢の類であろう。反復夢とは、「何か心理的な課題が夢のなかでイメージとして展開しきらないために解決に至ることなく、ある地点でぐるぐるとまさしく反復して滞っていることを示す」（川寄, 2005）のように、E自身の外傷体験の反復であり、母親からなぜ愛されなかったのか、私の居場所はどこか、というEの根本的な心理的な課題を指し示している。河合(1967)は「戦争場面でのショックで、そのショックを与えた光景がそのまま夢に繰り返される・・・そのようなショックキングな経験が自我に完全に統合されていないので、それを再び夢で経験しつつ、自我への統合を試みようとしているものと考えられる」とし、「あまりにもひどいものなので誰にも話すことができず、忘れることもできないながらも・・・心理療法場面において、夢を語ることに意義がある」と述

べる。

一方、夢1は反復夢と違い、セラピストとの関係のなかで生まれた夢である。夢1は、「自分が危険な目に遭う夢」とし、津波や交通事故に無抵抗のまま襲われるといった不可解なものからEにぶつかってくる夢の内容であったが、#113の夢5では、「私に向かって槍をもった武士が近づくので、『私ではなく、外に行きなさい』と命令すると、襖の武士たちが向こうに走っていく」と報告する。#37の夢1の「自分が危険な目に遭う夢」の被害的な夢を見ていたEさんが#115の夢5では、「私ではなく、外に行きなさい」と主体的に指示し、危険を回避する夢自我の態度が印象的であり、同時に、「室内がピカピカ」とそうした夢自我の態度を祝福する様子がEの回復を夢が表現していると考えられる。

(2) バウム表現を巡って

バウムに関する筆者の立場は、バウムの表現をクライアントと共にしつつ、バウムそのものから示される何かをじっと待ちながら、バウムの理解、ひいてはクライアント理解につなげていくことになる。

さて、筆者は通常、早い段階でバウムを描くことを提案するクライアントが多いなか、Eには、#63に1枚目のバウムを行った。当初、面接構造が2週間に1回であることの違和感もあり、Eのバウムをしっかりと受け止められるか、また、Eの溢れんばかりの語りに飲み込まれていたのかもしれないが、施行する戸惑いとともによりタイミングを逸していた。面接が継続するなかで、#63に「今はやっと落ちついてきて、逆に話せなくなってくるというか、何か言葉にたたくなくて、言葉にすることに対してたくさん、という思いと聞いてほしいという両方の気持ちがあるんです」と繰り返し語り続けていたEが「話せなくなっている」という語りは、セラピストにとっては意外であり、Eの内面に変化があることを感じ、Eのバウムを共有したいという気持ちになった。

1枚目のバウムは、何度も描き消しながら樹冠から着手する。佐渡ら(2012)は、バウムの描き始めの場所について、幹が75%、樹冠が15%、その他は稀であることを述べるように、樹冠からの起筆は珍しい。樹冠を何度も描き直す描画プロセスから、これまでのEが外界からの境界をまず作ることでなんとか自分を保ってきていることが伺える。その後、左右の幹線を上から下へ大地へ

向かいながら、幹、根が描かれた後、「これが描きたかった」と幹中央に洞を大きく描く。この洞には、「動物の家族が住んでいる・・・木の中で命が生まれている」と生命が宿っている木であることを語る。洞のあるバウム画を目隠し分析的に解釈されるならば、トラウマに類じた理解となろう。もちろん、Eのこれまでの外傷的記憶に伴う語りを考慮すれば、トラウマを反映した理解となるが、同時に描画後の「動物の家族」とする語りに見られるように、幹の大きな洞は、Eの傷そのものであり、同時にEの出発の基盤であり、自己治癒する可能性を感じることができた。その後、面接終結前の#114に2枚目のバウムを行った。2枚目のバウムは、「根元から描き始める。根元の次に上部へうつり、幹、枝、樹冠へとのぼしていく」と1枚目のバウムと違い、根元付近から上部へ描かれるようになっており、描画後には「力強い木を描きたかった」とエネルギーが溢れるバウムとなった。また1枚目に見られた洞は消えており、洞に住んでいた動物の家族たちは、Eの心の中の住人になったと筆者は想像している。

(3) 日常性の語りが意味するもの

Eは、父親が長期出張のため不在がちな家庭環境の中、幼少期から母親から「みにくい。いやらしい」と罵られ続け、繰り返し心理的な虐待を受けてきている。このように慢性的、反復的トラウマ体験を受けた人においては、自己愛の傷つきは深く、「私が悪いから母が怒る」という認識を持ちやすく、また「愛される価値のない私」という否定的な自己イメージを内在化し、自己肯定する感覚が生まれにくく、第1期のEも「自分には自信がない」(#1, #13, #23, #37)と自己肯定感が十分に育っていないことを繰り返し語っている。

第2期では、「小さい女の子のイメージがいる」(#45)、「昨日も慰めてくれた・・・私を大事にしてくれる」(#46)、「女の子イメージが登場してから、私にとっての時間が流れはじめた」(#48)、「小さい女の子がだんだん大きくなり、牢獄のような小さい部屋の中からはじき出し、大きく帰ってきた」(#49)とこれまで「未熟児の赤ちゃんや生け贄の囚人」(#45)といった犠牲イメージが一転し、Eの中の傷ついた自己愛が少しずつ癒されていく。この頃より「母から責められている呪いの声が抜けない。母がおかしい人だと思ってみているのに」

(#54) と E は母の言葉を「呪い」と理解し、これまでの圧倒的な力により侵襲的であった母からの言葉を客観的に「考えられるもの」として外傷的出来事を心のなかに置こうとする語りが見られた。#60 では「こうして過去を話すと、もう一度自分自身が傷つくんです、でもそれも自然なのかな、とも思います。前は事実を話すだけ、今は気持を感じる」と外傷的体験を繰り返し語り直すなかで実感のある傷みを表現し、セラピストとのなかで情緒的なふれあいを感じるようになる。#67 は、E 自身が先の「小さい女の子」に「辛かったね」と抱きしめる語りがあった。まさに「小さい女の子」は自分自身であることを感じる瞬間であり、癒えることのなかったこれまでの深い悲しみを深く悲しみ、外傷的体験により喪失した世界があること、自己への哀悼が語られたものと理解できる。

第 3 期では、これまで繰り返し語っていた外傷的体験の語りや影を潜め、主人との関わり方をはじめ E の家族内の人間関係について語られることが多くなった。とりわけ、「主人に対しては、怒りたいことは山ほどある、どれほど家族の者たちを傷つけているか、ということに気づいてほしい」(#70) と怒りの感情を表現しながらも、子育てに参画しない主人といかに関係が築けるのか、冷蔵庫の買い替え(#84)をはじめその工夫を模索していた。神田橋(2009)は「虐待も無関心も過干渉もすべて本人の自主性が尊重されなかった体験としてまとめることができる」とし、「治療者が治療関係のなかでいかに本人の主体的な動き、アイデアとか試みとか、行動とか、を尊重してあげるとかということが大切」と述べるように、この期の E は、主人や長女の不登校時の関わりといった日常性の工夫は、E の主体性を育む萌芽であったと思われる。

第 4 期では、「いろんなデザインやこまごまとしたことが好き」(#111) と E の資質に基づいた趣味との出会いにより、自信らしさをさらに取り戻し、形づくっていく過程であった。#113 には、夢 5 「私に向かって槍をもった武士が近づくので、「私ではなく、外に行きなさい」と命令すると、襖の武士たちが向こうに走っていく」と報告し、#37 の夢 1 の「自分が危険な目に遭う夢」の被害的な夢から「私ではなく、外に行きなさい」と命令し、危険を回避する夢自我の活躍が印象的である。#114 では、「人から愛される権利のある人間ではないか、このままの私でいいんだ、生きていていいんだ、と思えた」と語り、自分を赦し、自然体で生きていく地平に着地した瞬間を共にする。最後の#115 では、

「母から虐待を受け、母自身も実の母から虐待を受けて育ってきて、その世代間の伝達がある、それを私の代でその虐待の伝達をなんとかしてでも食い止めよう、断ち切ろうと思った」と語気強く語る E の深い覚悟は未だ筆者の胸の中に生き続けている。青木ら（2006）は虐待の世代間伝達を断つことができた養育者の特徴として、持続して一定の情緒的支持を与えてくれる人物が少なくとも一人おり、自分の養育者との過去の陰性体験に多面的かつまとまった見方をし、率直にまとまりをもって語るができるか、の指摘を踏まえるならば、「お母さん」と呼ぶ教会の神父さんの奥さんとの出会いにはじまり、E の変化に伴い、家族内の理解者が増えたことなど、日常そのものが E を支えていたことに気づく。そして、回復過程においては、これまでの外傷的記憶の語りは薄まり、むしろ日常的な語りが増えた。一般的には、心理臨床の日常的な語りは、平板で表面的な語りと思われがちであるが、E の回復過程を鑑みると、いかに日常のなかにその人を支える資源があり、その人らしさを映し出し、密度の濃い体験であることを改めて気づかされる。

このように E との面接過程は、「なぜ母から愛されなかったのか」とする人間存在の根底に関わる問いを繰り返し語り直す過程であったが、その都度傷つき、苦しみ、悲しみを再体験することになった。しかし、そうした傷つきを私自身の物語の一部であること、傷つきを含めた自己への哀悼が語られるその場、関係こそが、自己治癒に向かつての軌跡となり、治療的転機につながると考えられる。

(4) 「反復される語り」のプロット（筋立て）の差異

江口(2014)は、「Janet は、「語り narration」の機能について考察した、初めての人と言っていい」とし、「記憶とは、信念やすべての心理現象と同じように行動なのであり、本質的にそれはストーリーを語るという行動なのである…記憶の本質的現象は語ることである。われわれが自分の一生のある時期を思い出したということは、それをちょうど他人にかたるように、自分自身にむかって語ることである。われわれは話をする。よい記憶とは要するに一種の文才である。それは語る才能である」（Janet, 1919）と述べるように、外傷的記憶を復誦し、他者に語るその営みが物語的記憶になる手がかりになる。

事例に戻ると、E は、「母は怖い」とするドミナントな物語に支配されていた。第 1 期(#1~#44)のセラピストは、E の反復される外傷的記憶に対して、<ひどい><おかしい>と内的に沸き起こる感情をストレートに伝えるが、「私ってひどいことをされてきたのかな」と怪訝な反応が返ってきた。その後母親から受けた虐待エピソードを繰り返す度に<ひどい><それは辛い>といった情緒的応答を繰り返し、E の虐待の体験の語りをなぞり、怖くなることは当然であることのメッセージを送り続けていた。そうした面接過程を通して、徐々にではあるが、「ひどいことをされてきた」という実感を持ち始めるとともに、「母を怖いから嫌い」「母とは縁を切ることにした」と母親との関係性を対象化することができるようになった。

一方では、#63 に「話していることを考えると、今は本当にひどい状況に私はあったんだな、というように思います。しかし今こうして口にすると、もう一度自分自身が傷つくんです、でもそれも自然なのかな、とも思います。前は話しているだけで、事実を話すだけでしたが、今は気持を感じるというか・・・」<そうね・・・辛かったね>「はい、辛かったな、と思います」とのやりとりから了解できるように、傷つきを幾度となく語り直すことは、再度傷つきを味わうことになる。神田橋(2012)は、「忘れていたことを思い出してみるのもいいよ。で、思い出すと、もちろん、不安が起こるわな。だけどこれは自分で思い出そうと思って、ちゃんと覚悟して、用意して思い出すから、ビクッとしてうろたえたりはしないの。「わあっ、やっぱり怖いな」と言いながら、覗いて見るようなものです。そうするとこの不安は、ここに生き生きした生活があれば、消去されていくんです」と示唆するように、外傷的記憶に伴うフラッシュバックのような唐突さではなく、そうした傷つきを能動的に語る治療関係に支えられ、傷が癒える萌芽となると考えられる。

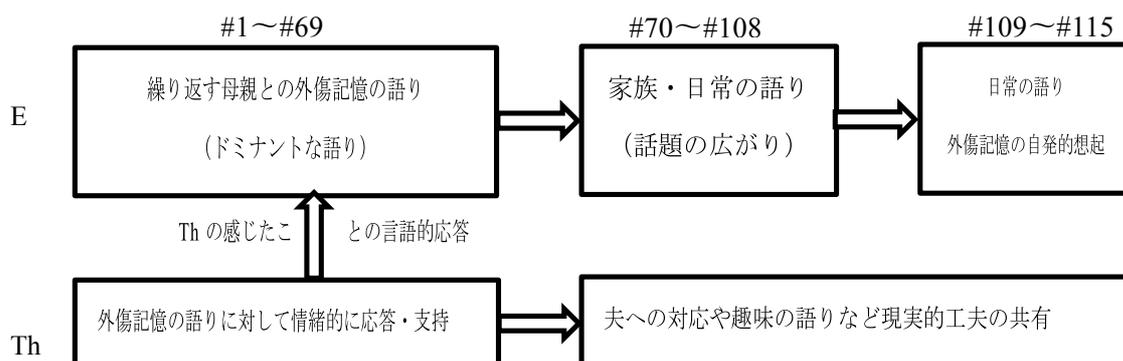


図 1 E の反復される語りの変化とセラピストの関与のフローチャート

表1 事例Eの反復される語りへのセラピストの関与とその語りの変化

面接回数	反復されるテーマ	セラピストの関与	語りの差異
① #1～#44 反復される母親との記憶①	#4:「母には『あなたは何をしてもダメ』と言われていて自分に自信が持てない。 #7:『3人子どもを産めるほどだから無神経者』と罵られたこと。 #37:「一番苦しかったことは人前でけなされることだった。母はよく親戚の前でも『人間のくず、汚いし、内面が腐っている』と私の前で言っていた」	度重なる母からの暴言に対して<ひどい>と情緒的に応答する。 #36に自発的に夢が語られる関係性となっていること、夢の「津波」や「母を追いかける」イメージから「母なるもの」との対話が面接テーマと連想する。	#36に「最近夢を見るんです」と「津波に襲われる夢」(夢1)、「どこにも入れない夢」(夢2、反復夢)、「着物を着ている母親を追いかけている夢」(夢3、反復夢)と自発的に語る。
② #45～#69 反復される母親との記憶②	#56:「母から私はひどいことをされてきた。自分を大切にすること、それをつぶされたのが一番悔しい」 #65:「こうして話をしていると、これまで「母は怖い」という思いしかなかったが、今は「母は嫌いだ」と言えるようになっていく」。	#67:元気がなったので面接を卒業することに触れ、理由を尋ねると、「Thにすぎく甘えている」と依存的への抑制が語られる。Thは<甘えてもいい>ことを強くはつきりと伝える。むしろ面接はこれからだと感じている。	これまでの母からの心理的虐待に対して自分が悪いと自動思考的になっていたが「ひどいことをされた」、「母は怖いから嫌い」という距離感を心理的に持つようになっていく。
③ #70～#108 家族・日常の語り			#80:「まあ誰でも何らかの傷を抱えて生きているのではないかとその傷を抱えて生きていくことが自分であるということだと思おう」 ・母とのエピソードは極端に減り、その代わりに家族や教会の牧師さんやその奥さんとの関係性について語られる。
④ #109～#115 日常を生きる			・ヨガやウォーキング、趣味Aに関する日常的话题が多くなる。 #108:「母からは愛されなかったけど、牧師さんやそのお母さん、たくさんの人たちから見守ってもらっている」 #113:「私ではなく、外にいきなさいと武士に命令する夢」(夢5)と侵入する相手に対して夢自我はきちんと対峙し、主体性を発揮している。 #115:「母から虐待を受け、母自身も実の母から虐待をうけて育て、その世代間の伝達を私の代でその虐待の伝達をなんとかしてでも食い止めよう、断ち切ろうと思った」

第6章 本研究の総合考察

第1節 臨床事例研究に対する自己省察的検討

本研究の第2部（第1章～第5章）の5つの事例研究では、筆者が実際に面接を担当し、逐語化された語りをもとに考察を行っている。本章では、この5つの事例研究について省察しながら、臨床場面におけるクライアントの「反復される語り」を共有することの臨床的意義を論じる。

斎藤(2013)は、「複数の事例研究を、メタレベルにおいて分析し、何らかの提言を導き出すことにも意味はある」と述べた上で、個々の事例研究の価値及び科学性を検討・評価するために必要な観点として、①臨床実践の操作的定義と心理治療の基本姿勢、②事例研究の目的、③研究の基盤をなす理論、④事例研究における研究の方法論及び研究技法、⑤事例研究における研究関心と生成された知識資産、⑥構造仮説の継承と漸進的な知識資産の発展の過程としての事例研究、の6つ視点を明示しており、自己省察的に事例研究を検討することの意義を述べている。以下に、斎藤が提示した6つの準拠枠を参考に考察する。

(1) 臨床実践のナラティブアプローチの定義と心理療法の基本姿勢

1) ナラティブアプローチの定義

はじめに、5事例における筆者のオリエンテーション及び基本姿勢について述べる。各事例は、筆者の臨床経験に違いがあるものの、クライアント理解において、ナラティブ論を援用している。ナラティブとは、第1部第3章で述べているとおり、「プロットを通じて出来事が配列され、体験の意味を伝える言語形式」（森岡, 2015）を基本に据え、その上で「クライアントによって語られた言葉と言葉で語られ得ない言葉を最大限、重視する基本姿勢を維持しつつ、セラピストは、クライアントの語りの意味を固定化しないように聴き、セラピストとの間で自らの経験に意味と秩序を与え、構成された物語的事実を尊重した対話によって行われる心理療法」をナラティブアプローチの臨床実践における操作的定義とした。また、ナラティブアプローチの臨床実践を行うにあたり、クライアントとの対話における、「クライアントへの具体的な問い」、「面接場面に立ち上がる、今ここでの意味の共有」、「クライアントの言いよどむ語り」、「クライアント独自の言い回しや反復される語り」、「矛盾した言い回し」などに着目し、クライアントの体験の語りを積極的になぞること、その特徴として

いる。

2) クライエントの語りをなぞる営み

下坂(1998)は、「なぞるということ」という面接の基本に関する一工夫を論じている。それによると、「患者と家族の訴えはなぞるような気持ちで聞く。たとえば習字の練習帳をなぞる。あの感覚を思い出してほしい。彼らの話しのなぞりきれないときには、待ったをかけて、これが苦手の人が多い。話しの腰を折っては悪いと思うからなのか。われわれの日常生活で他人の話の腰を折らないのは互いに誤解したままでまず事が済むからである。様々に説明してもらおうと、どうにかまたなぞれるようになる。こうしたなぞりを怠っていると何度会っても生解りのままで進むことになる」と述べる。つまり、分かったふりをしないで、分からないという感覚を維持することがクライアント理解につながると考えられる。

臨床場面において、クライアントの語りを「なぞる」「まねる」という面接者の態度は、オリエンテーションの相違はあっても私たちの対話の基本をなしている。森岡(2002)は、「発信者のことばがていねいになぞられ、確認することは、ロジャーズの方法では感情の明確化とか反射といわれる・(中略)・その対話実践が単純な応答技法に墮してしまつたとみられる経緯があつた」とし、その背景には、いわゆる「オウム返し」として広く理解され、相手の応答をそのまま反復して返すという「反射」といわれる練習を繰り返す行い、相手の言葉を単純に模倣するような機械的なやりとりとの誤解が流布した影響が大きい。しかし、Prouty(1994)は、「技法としての反射すること自体に意義がある」と示唆し、ロジャーズの技法としての反射を発展させ、プリセラピーを提唱している。Prouty は、統合失調症などの他者との接触に障害のあるクライアントに対して、「現実との接触(人・場所・出来事・物を具体的に意識していること)、情動との接触(情動・気分・感情を意識していること)、コミュニケーションとの接触(現実や情動について意識していること)を発展させるもの、として提唱する」と述べており、①状況反射(Situational Reflections:人、場所、物、出来事、を反射)、②表情反射(Facial Reflections:表情にそれとなく現れている情動、を反射)、③身体反射(Body Reflections:共感的に、同じ

動作や姿勢をしたりする，反射)，④逐語反射 (Word-for-Word Reflections: クライエントにとっては意味があるらしい，単語や音声や文章，を反射)，⑤反復反射 (Reiterative Reflections: それまでに効果のあった反射の反復) の 5 つの反射を提示している。岡村(2010) は、「プラウティがプリセラピーという概念化をしたことを，非常に高く評価している」と述べつつ、「ここにあるような実践を，私たちは，自分がやっていたような気がします」とプリセラピーの実践の肝である「相手の体験過程と同じ水準で会う，しかも，決して急がさない，決して先取りしない」との臨床実践を行っていることが述べられている。

さて，本事例においても，クライエントの反復される語りに対する関与のあり方として，Prouty の提唱するプリセラピーの「技法としての反射」の一部を実践している。例えば，事例 B，事例 C では，クライエントの動作や身体的な語りに対して，筆者は技法としての反射の③身体反射（共感的に，同じ動作や姿勢をしたりする，反射）を積極的に行っており，クライエントの身になるために，種々の機会にクライエントの動作や動きを「まねる」こと，「なぞる」ことを行っていた。特に，事例 B は，アスリート選手であったことも関係あり，かつてアスリートであった筆者の身体性はずいぶんと賦活されたように思われる。神田橋(1984) は，「患者の身になる技法」と称し，現実には，イメージで場所を共有することと身体を共有することが重要であることを述べている。まねは，決して姿勢に限られたことではなく，言葉のつかいかた，アクセント，語りかたのテンポ，呼吸のテンポなどすべての身体活動の領域で，「まねる」ことは共感性を高めるとしている。

こうしたセラピストの身体を介したクライエントの語りの聴取方法は，クライエントの体験過程を共有する中で，筆者の体験の肌理が細かくなり，身体を内側から感じ取るイメージ作業が円滑になった自覚がある。セラピスト自身の身体領域への感覚が鋭敏になることは，クライエントの語りや動作の語りへの共感が深まり，いくばくかクライエント理解を促進する作用があると考えられる。

(2) 事例研究の目的

本研究は、クライアントの語り直す (re-telling) 営みにおける「反復される語り」に対するセラピストの関与のあり方について、複数の単一事例から臨床仮説モデルの生成を目的としている。河合(2001)は、「臨床心理学の研究においては、事例研究が極めて重要である。そのことは臨床心理の実際に従事している者にとっては、自明に近いことである」とし、「優秀な事例報告が、そのような個々の事実をこえて普遍的な意味をもつのは、それが『物語』として提供されており、その受け手の内部にあらたな物語を呼び起こす動機を伝えてくれるからである」(河合, 1992) と述べるように、臨床実践を行う上において、事例研究そのものに対する臨床的意義は自明である。一方、臨床における事例研究そのものの立ち位置や限界を踏まえ、自己省察する姿勢は必要である。本研究は、斎藤(2013)による事例研究を相対化する試みの視点を考察の準拠枠として援用していることをすでに述べた。斎藤は、事例研究を質的改善研究 (quality improvement research) の一つとして位置づけ、「フィールドにおける実践をよりよいものに改善するために役立つ「知識」を産出すること」を目的とし、形式知と暗黙知 (実践知) に基づいた仮説生成を重視し、新たな知の創造に質する営みであることを示している。すなわち、エビデンスとしてのデータを収集し、仮説検証を目的とした効果研究ではないために、臨床実践における臨床家であり研究者である両方の立場を踏まえ、自身の立ち位置や臨床家としての基本姿勢を常に相対化しながら、省察的に自らの内面に関与しようとし続ける姿勢が重要となる。

(3) 研究の基盤をなす認識論

1) 心理療法家かつ研究者としての臨床的基盤

認識論とは、「私たちどうやってそれが何であるのかを知るのか」という質問に答えるような、基本的な認識のあり方であり、一般に「世界観」と呼ばれるものに近い」(斎藤, 2013)。つまるところ、5つの事例研究を推進するにあたっての筆者の心理療法家としてかつ研究者としての基盤となる世界観を明らかにすることである。

繰り返しになるが、臨床事例の底流に流れる筆者を支える臨床的理論は、広くは「ナラティブ論」である。

筆者が大学院を修了し、臨床をはじめて5年目ぐらいまでは、クライアントの言葉を理解しようという思いが強く、面接室で語られる言葉を聴き逃さないように必死にメモをし、面接全体に気がまわらず、無我夢中に行っていた時期があった。事例A、事例Dのクライアントとは、そうした時期に出会っている。その頃、森岡（2002）の「物語としての面接—ミメシスと自己の変容」と出会うことになった。内容を読み進めるなかで、語り手の主体を尊重し、「クライアントの体験をなぞる」という一つのキーワードが閃光のように筆者に響き、言語だけではなく、イントネーション、方言、雰囲気などの非言語的な表現をなぞること、感じ入ることがクライアント理解につながることに気づかされたが、当時は、「なぞる」ことの言葉の理解に留まっており、臨床実践に落とし込むところまでにはなっていない。今思うと、「分かったつもり」や「良いセラピストでありたい」などの臨床的態度があり、心理臨床家として頭打ちになっていたときであろう。その後、とある学会を通じて、ロジャーズ系のスーパーヴァイザーと出会うことになり、その後10年ほど個人スーパーヴィジョンを続けた。同時期に、縁あって5年ほどだが、神田橋條治によるグループスーパーヴィジョンを経験する場に恵まれた。神田橋のグループスーパーヴィジョンでは、スーパーヴァイザーとフロアーには事例資料の提供はなく、事例提供者の事例報告に対して即興的にスーパーヴィジョンが展開されていく。フロアーはじっと目の前のやり取りに集中することになり、自ずと全身の感覚が鋭敏になる。気がつけば3時間が過ぎていることが多く、いつもひどく疲れる。こうしたグループスーパーヴィジョンを通して、神田橋の臨床的工夫を探求し続ける「臨床の技（技術）」を間近で垣間見ることができたこと、筆者の臨床的基盤ならびに臨床的理論をさらに醸成してくれる機会となった。

ところで、事例B、事例C、事例Eでは、そうした頭打ちとなって以後の臨床事例であった。その頃から「クライアントの体験をなぞる」という一つの臨床技法を念頭におきながら、臨床実践を行うようになっており、とりわけ、非言語的な語りへの感性をいかに高めることができるのか、ということに関心を向けていた。筆者がことさら言語・非言語的な体験のなぞりに関心を持てたことの背景には、自身のアスリートとしてのスポーツ経験が大きく影響している。スポーツ競技という行為そのものが非言語的な要素が強く、身体感覚に信頼を

寄せる傾向が筆者にあった。たとえば、ボールと自分、相手との間合いや見えない相手を感じることで、空間と時間を先取りし、ポジションを移動すること、味方の動きを予測した方向へのパスなど、競技に求められる主要な行為が、言語以前に委ねられており、そこで生きてきた筆者自身があり、「体験をなぞる」という視点が自分の資質を生かした技術として自身の臨床能力の可能性を広げてくれる契機となったと考えている。

(4) 事例研究における研究の方法論及び研究技法

1) 逐語記録

本研究の 5 事例のいずれも単一事例であった。筆者は、基本的に面接中の記録は、簡単なメモ程度にとどめ、面接後に、可能な限り、余韻を持っているそのときに筆者の記憶や面接場面の雰囲気想起し、追体験するように想起再生し、逐語記録にしており、おおよそ、1セッション 3000 字～4000 字程度の文字数を 50 分ほどかけてアウトプットしている。

そして、本研究の事例研究を作成するにあたり、再度、面接記録内の逐語記録を再構成し、テキストデータとして用いている。

斎藤は、論文の記述形式として、4つのタイプに分類している。

- ①タイプ I は、「研究者の視点をあまり強調せずに（いわゆる神様視点から）ストーリー化していく形式。クライアントの生の語りを中心に記述する場合（タイプ Ia）と生の語りをあまり記述せず、いわゆる地の分を中心に記述する場合（タイプ Ib）に分けられる。
- ②タイプ II は、研究者（＝治療者）の一人称視点から時間経過に沿ったエピソードをつなぎ合わせながらストーリーを記述していく形式。
- ③タイプ III は、クライアントと治療者の双方の発話を、会話形式としてできるだけ忠実に再構成していく形成。
- ④タイプ IV は、そのどれにも当てはまらない形式。

上記の事例研究の分類においては、クライアントとセラピストとの双方の対話として再構成しており、5 事例ともにタイプ III に分類できる。

(5) 事例研究における研究関心と生成された知見

本項は、臨床場面における「反復される語り」にセラピストはどのように関与しているのか、ナラティブアプローチにおける「なぞる体験」を手がかりに各事例の語りの差異ならびに意味生成について考察する。

1)5 事例の「反復される語り」に対するセラピストのなぞりのあり方

事例 A は、自閉症の発達的特徴の一つである「こだわり」を巡って論じてきたが、反復される B 社のボールペン談義にセラピストはひどく疲れ、関心の低減が著しかった。ひどい時には、面接前に「今日もボールペンの話になる」と予期不安めいた感じになり、面接を終えると「やっぱりボールペンの話だった」とげんなりする感じであった。こうしたセラピストの徒労感は、第 1 部第 4 章の「反復される語り」の文献レビュー内の②型と類似する。セラピストは、転回点となる A の「ボールペンの話をすると嫌そうな顔をするから。ボールペンとは違う話になると顔が喜ぶから。Th 嫌なんでしょう」との対話まで、A の反復されるボールペン談義を同型反復的に聴いており、ボールペンの語りになぞるまでにはいかなかった。同型反復的な語りとして聴くセラピストの態度は、A のボールペンの事は既に知っているという既知の語りとして聴いており、分かったつもりでいることが問題であったと思われる。

事例 B は、「どうしても力が入る」と投球時の動作失調を繰り返し語る面接であった。B の動作の語りは、競技種目独自の身体的所作であるために＜具体的に送球することの難しさは？＞、＜投げる時の身体への感じは？＞と尋ねながら、動作を言葉でなぞろうとしていた。B は「背中まわり、上半身に力が入っている。下半身は大丈夫。嫌な感じが残るのは、上半身。何か重くなる、動きにくくなったり、頭で考えていると、実際の行動とのずれが出てくる」＜ずれ？＞「背中まわり、肩甲骨のまわりが重くなる。腰のあたりからかな、グーッという感じ、首や肩まわり」と B の身体的体験を聴くたびに、言葉による動作の追体験が難しく、セラピストはもどかしさを感じていた。そうした中、理想のフォームを語る際、「肘が出て小指が上に向いている状態」の投球フォームを共に何度もなぞることを通して、上半身の肩甲骨部分に「どうしても力が入る」という「どうしても」というその苦悩に対する共感が深まり、これまで当たり前に出ていたことが突然できなくなる苦しさが痛く伝わった。

神田橋（2000）によると、語りの固定パターンの背後には、その人が一生懸命にこだわることによる支払われた犠牲があることを示唆し、その上で、その人の犠牲に支払われた感情に注意を払うことが重要であること述べている。この「どうしても」という感情のひだは、言葉を介した対話だけでは上滑り、とりとめのない言葉として通りすぎていたかもしれない。しかし、セラピストは、「どうしても力が入る」という「身体の引っかかり」に関心を寄せ、Bの微細な動作を共にアクティブになぞることとなった。下坂は、「患者・家族の訴え、それぞれの言い分を聴いて、それらの要点を繰り返す、こういうことでしょうかと念を押す。この言語的確認は、極めて単純な面接技術だが威力がある」と述べるように、Bとの面接過程では、言語的確認に加えて、身体的経験の「動作的確認」を行ったと言える。こうした言語的・動作的確認は、Bの「どうしても力が入る」体験に対する共感的な呼応となり、これまでの「どうしても力が入る」とする動作の囚われから、「思いっきり投げて暴投でもいい」との呪縛の解放につながったと考えられる。

事例Cは、来談までに休職、復職を7回繰り返しており、まさに反復をテーマとしたクライアントであった。面接では、これまでの技術職からの営業職への配置転換への恨み、慣れ親しんだものへの固執する語りに終始し、身体全体から発する緊張感は強く、語りの窮屈さが顕著であった。セラピストは、Cの緊張感に同調するようにセラピスト自身の身体の筋肉群もこわばり、強い緊張感を味わっていた。同時に、セラピストの体感する「緊張感」のありようをCとの関係性の手がかりとして捉え、このCの緊張感や窮屈感に対して、セラピストは〈窮屈に感じる〉と身体感覚に基づいた応答を何度か行っており、積極的に身体を介したなぞりを行っている。#17では、〈（職場の会議で緊張することから）ふと思いました、ここではどうか？〉「緊張するということですか、ないですね、何ででしょうか、やはりここでは自分の話したいことを話しているの、話している相手によるのかもしれないですね。ハハ（笑）」と初めて笑いも生まれた。おそらく、こうした問いを発することができたのには、セラピストの体感する緊張感がいつしか波打つゆらぎとして味わっていたことと関係していたと思われる。これまでのクライアント-セラピストの2者関係における「緊張」の物語が終わり、Cの新たな物語への転回点となったと思わ

れる。

事例 D は、初回時から死にまつわる夢を繰り返し報告した。当時のセラピストは夢を扱える技量がないことの自覚と申し訳のなさ、無力感を抱え、夢と一喜一憂していた。特に、夢 4 では、夢自我が死んでしまった事実にはひどく落ち込み、夢 5 では、かける言葉が見つからず、ただ黙りこんでいた。その後も「消えたい」と語り続けるために、よもや現実の死を選ぶのではないか、という不安が拭えず、恐怖と祈りのような思いで毎回の面接を迎えていた。そうした中、#27 はくうまく言えないけど、D には生きていて欲しい、どんなことがあっても生きていて欲しいと思っている、そう・死んだらいけない>とセラピストの率直な思いを伝えている。こうしたクライアントの語りをなぞり同化しすぎたセラピストがいたことに気づくものの、臨床経験まもないセラピストだからこそなぞれたように思われる。

事例 E は、初回から主訴の引きこもりの長男のことに加え、母親からの暴言が繰り返された体験を語られるように、E の傷つきを受け止めることが重要であると考えていた。面接を重ねる中で、E は、2 度（#7、#67）カウンセリングの中止を話題にするが、セラピストは安易に乗らなかった。とりわけ、#67 に「元気になったので面接を卒業する」ことに触れ、理由を尋ねると、「Th にすごく甘えている」と依存への抑制が語られる。セラピストはく甘えてもいい>ことを強くはっきりと伝え、むしろ面接はこれからだと感じている。面接当初から、E との出会いが、セラピストの個人携帯に連絡が入るなど、通常の出会いの次元を超えた出会いであること、出会うべくして出会っている感覚があった。そのためセラピストは E との面接継続に対する強い覚悟を持っており、不思議なほど E の「反復される語り」をどっしりと受け止めることができた。

以上のように、事例 B、事例 C は、積極的にセラピストの身体感覚を手掛かりに「反復される語り」をなぞり、事例 D、事例 E は、クライアントの「反復される語り」に対して沸き起こるセラピストの感情を手掛かりに言語的応答を行っている。しかし、事例 A については、「反復される語り」に対する徒労感や無力感を伴った状態となり、感情が平板化していた、と理解している。

2) 5 事例の「反復される語り」とその差異について

本項では、クライアントの反復される語りに付き合うことにより、クライアントはどのような語りの差異を生むのか、語りの展開について考察する。

はじめに、事例 A は、セラピストが反復される語りに徒労感を感じ、クライアントに対する興味関心の低下が生じたことを既に述べた。とりわけ、転回点となる面接まで、セラピストは、反復されるボールペン談義を機械的な反復だと理解してしまい、繰り返す語りが意味あるものとして十分に通じてこなかった。そのため、クライアントの力に助けられるようにして、A 自身がセラピストの不甲斐ない態度にまっすぐに向き合い、「ボールペンの話をすると嫌そうな顔をするから。ボールペンとは違う話になると顔が喜ぶから。Th 僕のこと嫌なんでしょう」とはっきり明言するものの、とっさにくそんなことはない>と取り繕った筆者の不誠実さに嫌気がさし、ジワジワと自分を苦しめることになった。この面接を機に、ボールペン談義について自問自答する中で、徐々に素直にその語りを耳にすることができた。その後の面接に持ち込まれるテーマはボールペン談義に加え、地球温暖化や日常の暮らしなど話題は広がった。

事例 B は、「どうしても力が入る」と投球時のイップス症状に悩まされており、面接当初は、不自然な動作や身体的な固さ、投球することに対する恐怖が繰り返し語られていた。前節で考察した通り、セラピストはクライアントの動作をなぞり、真似ることを繰り返し、B の投球動作失調の語りを理解していた。そうした身体を介した営みを経て、#12 では、「ピッチャーとのコミュニケーションが取れるようになってきた」「周りを見ながらの指示ができた」と動作に固執しない周辺視野からの情報を語っている。また、「調子が悪いなと思っても、呼吸法とかして緊張をほぐしたり、少しからだを動かしたりして、そうすると緊張感がとれたりする」と主体的に自己身体に働きかけ、コントロールする様子があった。そして#13 では、「最近、思いっきり投げて暴投でもいいと思う」と繰り返していた失敗してはいけないという投球への恐怖とはうって変わってその潔さは圧巻であった。

事例 C は、面接当初からクライアントの身体全体から発する緊張感や語りの窮屈感にセラピスト自身もひどく感化されていた。セラピストは、そうした緊張感や語りの窮屈感を幾度となく言語する中で、いつしかその緊張感が解ける瞬間を経験した。時同じくして 2 者関係の変化とともに、雑用から検査業務へ

と外界の変化があった。その頃より、「休職を繰り返してきたのは何故だろうかと考えていたのですが」(#25)とこれまでの仕事と今の仕事との違いについて語り、また「優秀と見られたいという思いがある。失敗しないようにと思っていたし、人から言われぬように完璧であろうとしてきていた」(#27)とこれまでの自分の傾向を内省するようになる。その後、基礎体力が上がったこと、ジョギングを始めたことなど、日常生活や身体的なことが多く語られるようになった。

事例Dでは、初回時から死にまつわる夢を報告し、夢をどのように受け止めればいいのか、一喜一憂するセラピストがいた。しかし夢7の「中々私を撃たない」夢自我の体験が、これまでのすぐに殺される内容と違い、幾分情緒的な体験をしていることへの質的差異を感じていた。面接では、「消えたい」「死にたい」と繰り返し、よもや現実の死を選ぶのではないか、という不安や恐怖を毎回感じていた。そうした中、#27のセラピスト<死んではいけない、生きていてほしい>との思いつきを伝えた際、「ようやく少しは生きたいと思う気持ちも出ている。自分の中で生きるという決意が持てた時にはじめて何か次のことを考えられるのだと思う」と語り、その後田植えを手伝ったことが語る。その後は、「死にたい」「消えたい」の言葉が面接に持ち出されることはなく、進路という未来に向けた取組みの様子が語られる。

事例Eでは、母親から受けた心的傷つきとの対話が反復される語りのテーマであった。5年半の面接過程内のおよそ2年間は、上記のテーマをともにしてきた。#67に「こうして話をしていると、これまで「母は怖い」という思いしかなかったが、今は「母は嫌いだ」と言えるようになっていいる」と母親との心理的な距離が取れるようになってからは、母親からの「あんたはダメ」という呪いに似たささやきが影を潜め、「小さい女の子」イメージがEを救済するようになる。合わせて現実世界において、教会での洗礼、牧師さんのお母さんとの関係の深まりなど、母なるものとの対話が自然に行われていた。このように母親に関する「反復される語り」が紐解かれていくに伴い、自然発生的に日常に彩られた語りへと変化が見られ、ゆっくりと、Eの自己実現過程が語られた。

さて、5事例のクライアントの病態水準や発達的特徴は違うために、十羽一絡げに論じることはできないものの、各事例の回復過程における反復される

語りの差異に関して、類似する視点が得られている。

いずれの事例も反復されるテーマがあり、面接の初期には、そうした固執した語りを共有することから面接の関係作りがなされ、反復強迫的に固着した過去の出来事をセラピストに繰り返し語りなおす過程があった。そして事例 A は、「ボールペン談義から地球温暖化の語りへ」、事例 B は、「失投恐怖の語りから暴投してもいいとする語りへ」、事例 C は、「過去の配置転換の恨みの語りから現在の業務に対する語りへ」、事例 D は、「死にたい消えたい語りから未来に向けた進路の語りへ」、事例 E は、「母親から受けた傷つきの語りから虐待の世代間伝達を止めたいとする語りへ」、と各事例の固執された語りは、別の新たな語りへ引き継がれていき、クライアント独自の新たな意味づけを行いながら、自己受容するプロセスが生まれている。

このように、臨床場面において、繰り返し繰り返し語り直す営みを通して、自分の中に起きている出来事や起きた出来事の意味を自分なりに筋立てながら、出来事と出来事をつなぐの意味を見出していることが各事例から読み取ることができる。そして、いつしか反復されていたテーマやその語りは、反復されなくなっている。すなわち、ドミナント（支配的; dominant）な物語を繰り返し語り直すことによりクライアントのプロット（筋立て）の変化が見られる。

3) 「反復される語り」に対する分からなさという中庸さの維持

前項 2)において、セラピストがクライアントの反復に付き合うことにより、反復されていたテーマやその語りが反復されなくなるというクライアントのプロットの変化が見られることを述べた。

翻って考えると、語り直す (re-telling) 営みそのものがすでに反復的である。セッション毎に反復される語りそのものは、「結合」と「分離」を繰り返し、常に変化し、一回たりとも同じ語りなどはない。すなわち、同型的な反復ではなく、生氣的、リズムのある反復と言えるという事実がある。とはいえ、事例 A の「反復される語り」に疲弊したセラピストがいたように、「反復される語り」は、単調さゆえに、同一の反復として受け止めやすい。神田橋 (2000) 「いろんな話題のたびに同じ話題が出てくることがある。どうしてかなと思う。そこで「どういうことなんだろう」とか言って。この出てくる話の構造やフィ

ーリングを考えて、思い出の意味をこちらが探すわけです。まあしてみるけれども、なんだかピンとひらめかないことが多いの。そこで降参するわけね。降参するというのは、これは河合隼雄先生の「すぐれた治療者は、わからないという言葉で勝負する」という姿勢と同じなんだけど、「分からない」と言葉で言うと、多くのクライアントは責められたように感じて、「お前の言うことは、なんかまとまっておらん」と言われているように感じるの。だから「分からない」という言い方の中に、降参している雰囲気を入れて言うんです」とセラピストの「分からなさ」を内的に担保し、反復される語りを共有するセラピストの基本姿勢が重要なのだろう。この「分からなさ」を内的に維持することにより、クライアントの繰り返される語りと語りの微細な差異への関心が向くと考えられる。例えば、クライアントの語る表情や口調、語気、間合い、気配、雰囲気などを言語以前の非言語的なメッセージを察しながら、「反復される語り」に関与することにより、語りと語りの揺らぎや隙間が生じ、クライアントの語りの広がり、奥行きを生む磁場になると思われる。これまでのナラティブ論では、言語化、言葉にすることで感情や現実の世界を構成するとした西洋的な世界観が強いが、日本の文化に照らすと、我々は、言語以前の身体や気配といった「間」を察する文化であるために、必ずしも自分の体験を言語化しない。木村（1972）は「気がつく」「気にかかる」「気が向く」「気を配る」などの一連の言い回しに対して、「気は、自分自身の心の動きとして言われながら、実は自分の自由にならぬ、むしろ周囲の事情によって動かされる性質がある」と指摘し、こうした「気」とは、主観と客観との間、意識と対象との間にある一種の雰囲氣的なものであり、他者との間関係による表現である。事例Bの動作の語りの分からなさや事例Cの緊張感や窮屈感などの体験は、言葉で論理的、一義的な語りとして理解することは難しく、二人の「間」の呼応として感じ取られることにより、自己調整の場となる。すでに事例B、事例Cで論じたように、セラピストは、クライアントの「反復される語り」を聴きながらも、合わせてクライアント-セラピストの身体感覚や動作をなぞることを手掛かりに、クライアントの体験を理解しようと試み、その結果、己のこころとからだの対話が自然発生的に生じた。もし、「反復される語り」を他者によって、あるいは他者を經由して語られるものでなければ、「ひとは<自己>を求めて堂々め

ぐりに陥ってゆく。みずからの尾を呑み込みつづけるウロボロスの蛇のようなグロテスクなかたちでしか、じぶんにかかわれなくなる」(鷺田, 1999) と示唆するように、他者(セラピスト)と「反復される語り」を共有することにより改めて2者関係に「間」が生まれる。「反復される語り」をよりアクティブに関与するためには、セラピストの「分からなさ」という中庸さを担保し、すでに身体(身体症状や動き、雰囲気、表情等)は語っているとした言語以前の語りへの配慮が単調な反復の微に聴き入ることが臨床的技法の工夫となるであろう。

(6) 臨床仮説モデルの生成

1) 「反復される語り」におけるプロットと意味生成の臨床仮説モデル生成

楠本(2015)は、「一定の視点(語り手の視点)から語るべき出来事を取捨選択し、かつそれらを一定のプロット(plot;筋)に沿って配列していく『選択』と『配列』の作業を指す。これにより、物語には前後の方向性を持った時間の流れが生まれ、そこに意味が生じる。これこそがナラティブの本質と言える」と述べるように、対話におけるクライアントの出来事のプロット(筋立て)の変化に注目することは、語りの差異をより深く探求することにつながる。

前項では、各事例のクライアントの反復されるテーマが変化していくことを述べた。そもそもクライアントは、ドミナントな物語に縛られており、そのこと自体が反復されるテーマとなる。ドミナントな物語とは、原因と結果の因果的な物語に固着した意味づけがなされており、こうした因果的な意味づけがいかにして新たな意味生成へと変容するのだろうか。事例に戻れば、事例 B は、「投球すると失投する」、事例 C は「うつ病になったのは職場の配置転換げ原因」、事例 D は、「入学式に先生に詰問されなければ今はこうではなかった」、事例 E は「母親に虐待を受けたことで自分を大切にすること一切つぶされた」というドミナントな物語があった。図 1 は、事例 E の「反復される語り」に対するプロットと意味生成を時系列で示している。ステージ 1 は、「母が怖い」とする母親から受けた外傷的記憶を繰り返しセラピストに語る面接、すなわち「外傷的記憶の反復」の語りが続いた。

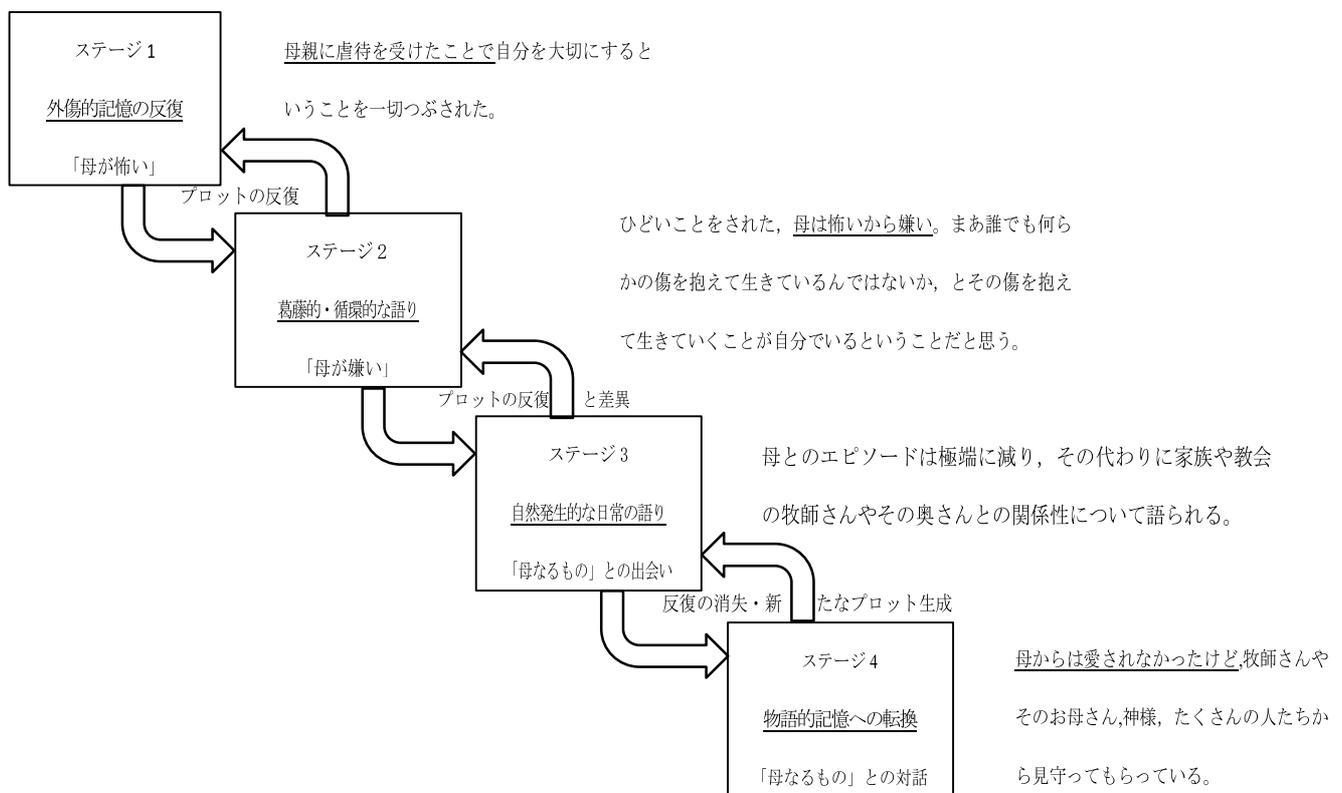


図1 事例Eの「反復される語り」に対するプロットと意味生成段階

ステージ2では、「母は怖い」から「母は嫌い」、「ひどいことをされてきた」などと外傷的記憶に対する客観的な語りが見られるようになり、「呪いのようだ」と自動思考的になっていたことに気づき始めた。とはいえ、そうした母親との距離を保ちながらも、「一番苦しかったのは人前でけなされることだった」と幾度も当時の外傷的なエピソードを想起し、「こうして何度も思い出し、傷つくたびに自分が嫌になる」と過去に揺れ戻される時間を経験している。このように、外傷的記憶に基づくプロットを繰り返しながらも、同時に新たなプロットを語ることにより、その意味を見出そうとする語りの差異が生じており、このステージは、葛藤を伴う循環的な語りを特徴としている。

ステージ3は、ステージ2同様に、外傷的記憶に基づくプロットを繰り返しながらも、外的に新しい対人関係が生まれ、関係性の自由が拡大し、新たな自発的な出来事への意味づけが自然と現れ、かつ反復されていたドミナントな物語の反復が消失し、新たなプロットの生成が特徴である。このステージは、事

例 C, 事例 D にも同様に生じており, 自然発生的に外的に生じる日常的な出来事への心配りが大切である。

ステージ 4 は, 「母が怖い」とする外傷的記憶に伴うドミナントな物語から「母からは愛されなかったけど, 牧師さんやそのお母さん, たくさんの人たちから見守ってもらっている」(#108), 「母から虐待を受け, 母自身も実の母から虐待をうけて育って, その世代間の伝達を私の代でその虐待の伝達をなんとかしてでも食い止めよう, 断ち切ろうと思った」(#115)と物語的記憶への転換している。江口(2014)は, 傷には, 「創=傷の二重性」があるとし, 「劈いた『創』にはそれ自体で自ずから癒えてゆく治癒力がある」と指摘する。できれば傷に触れずに歩んでいきたいところであるが, 心理療法においてクライアントの外傷的記憶を扱う場合には, これまでの喪失, 挫折, 傷つき等の情緒的な体験そのものをないものにするにはできない。江口の「傷=創の二重性」の視点を援用するならば, 挫折, 喪失, 傷つきそのものに内包されている「創」を促進する働きとして, 「反復される語り」の共有は重要であろう。加えて, 森ら(2012)は, 「トラウマ性の症状を軽減したり, 喪の労働によって同一化した対象像が心の内部に健康な形で位置づけられることは必要である」と述べるように, クライアントの「反復される語り」を共になぞる営みにより, 外傷記憶を適宜思い出すことが可能となり, ドミナントの物語に対する意味づけに変容が生じる。そして外傷的記憶に基づくドミナントな物語は, プロットの反復と差異を循環しながら, 物語的記憶への転換が可能となると考えられる。

本項は, 事例研究における研究関心と生成された知見について論じており, これまで述べてきている通り, 「反復される語り」の変容過程があることが明らかとなった。図 2 は, 5 事例を通しての「反復される語り」に対するプロットと意味生成段階の臨床仮説モデルを示している。

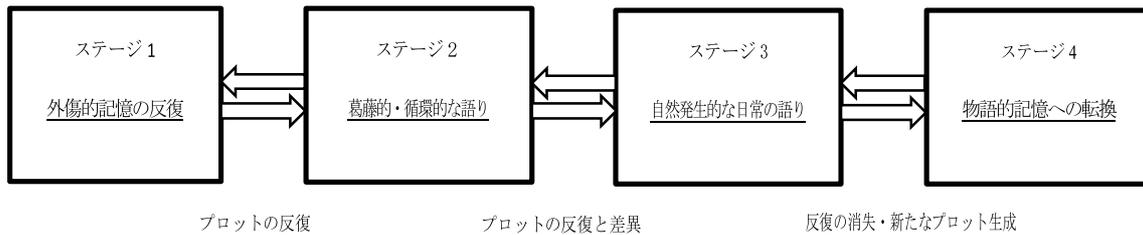


図2 「反復される語り」に対するプロットと意味生成段階の臨床仮説モデル

ステージ 1:

外傷的記憶に伴うドミナントな物語に縛られており、その物語自体が反復される段階

ステージ 2:

外傷的記憶に伴うドミナントな物語と客観的な語りとの葛藤・循環する段階

ステージ 3:

新たな自発的な出来事への意味づけが自然と現れ、かつ反復されていたドミナントな物語の反復が消失し、新たなプロットの意味生成の段階

ステージ 4:

外傷的記憶に伴うドミナントな物語から物語的記憶への転換の段階

の4段階が「反復される語り」に対するプロットと意味生成段階の臨床仮説モデルが想定される。

2) 「反復される語り」に対するセラピストの関与に関する臨床仮説モデル生成

これまで5事例のクライアントの反復される語りに対するセラピストの内的体験を手掛かりに考察をしてきた。以下に、「反復される語り」に対するセラピストの関与のあり方の臨床仮説モデルを示す。

① 「反復される語り」に対するセラピストの同型反復的ななぞり

事例 A は、「クライアントの「反復される語り」を同型反復的な語りと捉えることにより、セラピストは徒労感や無力感に苛まれ、クライアントの語りをなぞりきれない関与のあり方」であり、セラピストはクライアントの語りを既に知っているという既知の語りとして聴いており、分かったつもりでいること

がその特徴である。

②「反復される語り」に対するセラピストの身体的体験のなぞり

事例 B, 事例 C は, 「クライアントの「反復される語り」に対して, セラピストの身体的体験を手掛かりに, クライエントの語り及び動作の身体的模倣を試みながら, クライエントの心身の語りをなぞる関与のあり方」であり, セラピストはクライアントの心身の語りを未知の語りとして聴いており, 分からない心持ちを維持しつつ, 分かろうとする態度がその特徴である。

③「反復される語り」に対するセラピストの内的体験のなぞり

事例 D, 事例 E は, 「クライアントの「反復される語り」に対して, セラピストの内的体験（逆転移感情など）を手掛かりに幾度となく言語化を試みながら, クライエントの語りをなぞる関与のあり方」であり, セラピストはクライアントの語りを未知の語りとして聴いており, 分からない心持ちを維持しつつ, 分かろうとする態度がその特徴である。

さて, 本研究では, 心理療法における「反復される語り」に対するセラピストの関与のあり方に注目し, クライエントの語り直す (re-telling) 営みにどのようななぞり得ることができるのか, 複数の単一事例から臨床仮説モデルの生成を目的としていた。

本研究の目的に答える知見の一つとして, クライエントの「反復される語り」に対するセラピストの関与のあり方は, ①「反復される語り」に対するセラピストの同型反復的ななぞり, ②「反復される語り」に対するセラピストの身体的体験のなぞり, ③「反復される語り」に対するセラピストの内的体験のなぞり, の3型が臨床仮説として想定された。

第7章 結びにかえて

本研究では、臨床場面における「反復される語り」に焦点を当て、クライエントの繰り返される語りの意味をナラティブの視点から論じてきた。筆者は、一見、単調な世界のように映る「反復」現象が、関与する者の主体の在り方によって、その平板な世界に奥行きを与え、芳醇な語りが秘められていることをクライアント達から学ぶことになった。そして、セラピーの流派を問わず、セラピーの根幹には、クライアントを分かりたいとするセラピストの基本姿勢にちがわない。しかし、既にクライアントの「反復される語り」に対するセラピストの関与のあり方について述べたように、「反復される語り」に対して常に拓かれた態度を維持し続けことの難しさは、本研究の事例や文献レビューからも明らかである。とはいえ、心理臨床の専門家であるセラピストは、クライアントの「反復される語り」に拓れ、対話することの意義は変わらない。とりわけ、傷つきや生きにくさを抱えているクライアントは、幾度となくその傷つきに立ち戻り、身動きできない状況にあり、クライアントは、ドミナントな物語を生き、その回復には、あらたな「私の物語」を生成する必要がある。

さて、本研究の出発点において、ルーティン化された日常的な主体的、能動的な反復現象を研究対象にするのではなく、受動的な反復現象について論じてきた。とりわけ、臨床場面における「反復される語り」の現象、すなわち、繰り返さざるを得ない体験、出来事を反復的に語るという受動的な反復現象は、クライアントにとっては、「反復される」という受け身的かつ被害的、侵入的な体験となりやすいために、「私」という主体的関与が希薄化しやすい。

各事例で示したように、心理療法では、そうしたクライアントの「反復される語り」をセラピストが積極的に関与することにより、クライアントは主体的にその体験の意味づけを行いながら、傷つきを自らの過去として受け入れられていく回復過程が考察されたように、受動的な反復から能動的な反復への転換こそが臨床場面におけるクライアントの「私の物語」生成の磁場になると考えられる。言い換えれば、能動的な語りを紡ぐ関係性がクライアントを支える関係の基盤になると言える。

最後に、本研究では、臨床場面における「反復される語り」に焦点をあげてきたために、各事例の病態や発達的特徴を含めた考察をするには及ばなかった。

例えば、事例 C, 事例 D, 事例 E は、うつ症状を呈しており、うつ症状と「反復される語り」との関係については論じられていない。また、事例 A の自閉症のこだわりとしての「反復」現象とうつ症状における「反復」現象が、同じ地平で論じることの限界がある。

今後は、臨床現場での事例を積み重ねながら、本研究で得られた「反復される語り」の臨床仮説モデルの深化を目指したい。

引用文献一覧

- Anderson, H., & Goolishian, H. (1988). Human Systems as Linguistic Systems: Preliminary and Evolving Ideas about the Implications for Clinical Theory. *Family Process* 27(4), 371-393 (ハーレーン・アンダーソン, ハロルド・グリーンシャーン. 野村 直樹(監訳) (2014). 協働するナラティブ——グーリシャーンとアンダーソンによる論文「言語システムとしてのヒューマンシステム」—— 遠見書房)
- 東 千冬 (1994). 真理の法則を追求する中年女性との心理面接過程 心理臨床学研究, 12(3), 204-216.
- 青木 聡 (1997). 「身体症状の訴え」への目的論的アプローチ——過敏性腸症候群の青年期男子の一事例から—— 心理臨床学研究, 15(1), 1-12.
- 青木 豊・松本 英夫(2006). 愛着研究・理論に基礎付けられた乳幼児虐待に対するアプローチについて 児童青年精神医学とその近接領域, 47, 1-15.
- Crossely, M. L. (2000). *Introduction Narrative Psychology*. Philadelphia: Open University Press. (クロスリー, M. H. / 角山 富雄・田中 勝博 (訳) (2009). ナラティブ心理学セミナー 金剛出版)
- Donald, S. (1982). *Narrative truth and historical truth. Meaning and interpretation in psychoanalysis*. New York: W. W. Norton and Co.
- Ellenberger, H. F. (1980) 木村 敏・中井 久夫 (監訳) 無意識の発見 力動精神医学発達史 弘文堂
- 江口 重幸(1995). 宗教・身体・精神病理 医療人類学の視点から 臨床精神病理, 16(2), 25-136
- 江口 重幸(2007). ジャネと解離 精神科治療学, 22(4), 415-421.
- 江口 重幸(2014). 医療人類学からみた傷の治療的意味, 日本臨床心理身体運動学会第17回大会シンポジウム「創(きず)が劈(ひら)く世界の物語」
- Epston, D., & White, M. (1992). *Experience, contradiction, narrative, imagination*. Adelaide, Australia: Dulwich Centre Publications.
- Erikson, E. H. (1959). *Ego identity and the life cycle*. Psychological issues, No.1. New York: International Universities press (小此木 啓吾 (訳編) (1973). 自我同一性——アイデンティティとライフサイクル—— 誠信書房)
- Frank, A. H. (1995). *The Wounded Storyteller: Body, Illness, and Ethics*,

- Chicago:The University of Chicago Press(アーサー・フランク. 鈴木 智之 (訳)
(2002) 傷ついた物語の語り手—身体・病い・倫理 ゆるみ出版)
- Freud, S. (1920). Beyond the Pleasure Principle. Standard Edition, London: Hogarth Press (小此木 啓吾 (訳) (1970) フロイト著作集 6 人文書院)
- Greenhalgh, T., & Hurwitz, B. (1998). Narrative based medicine: dialogue and discourse in clinical practice. London: BMJ Books.
- 羽間 京子(2002). クライアントとの治療的距離を保つためのカウンセラーの内的体験の活用——自己愛に傷つきを保つクライアントとのカウンセリング過程から—— 心理臨床学研究, 20(1), 23-34.
- 橋本 やよい(1996). 母親の移行対象論——一体感からの分離—— 心理臨床学研究, 13(4), 365-376.
- 長谷川 裕美子(1995). 2年の経過で, バーバルコミュニケーションが可能になった情緒障害者の一事例 心理臨床学研究, 13(3), 309-320.
- 細野 純子(1987). 対人恐怖症の排尿をめぐる心的外傷体験とその象徴的意味についてこころの全体性回復における祝祭と道化——描画のはたす役割をめぐる—— 心理臨床学研究, 4(2), 46-57.
- Janet, P. (1923). La Médecine Psychologique. Paris:Ernest Flammarion (ジャネ.P. 松本 雅彦 (訳) (1981) 心理学的医学 みすず書房)
- Janet, P. (1929). L' évolution psychologique de la personnalité (ジャネ.P./関 計夫 (訳) (1955) 人格の心理的発達 慶応通信)
- 上地 雄一郎(1991). 思春期危機を契機に発症した抑うつに対する精神分析的な心理療法の一例 心理臨床学研究, 8(3), 29-41.
- かしま えりこ(2012). スクールカウンセラーが虐待に気づくとき 心理臨床の広場, 15(1), 26-27.
- 河合 隼雄(1967). ユング心理学入門 培風館
- 河合 隼雄(1984). 風景構成法について 中井久夫著作集別巻 1 岩崎学術出版社
- 河合 隼雄(1994). 河合隼雄著作集 3 心理療法 岩波書店
- 河合 隼雄(1995). ユングと共時性 河合隼雄著作集 12 物語と科学 岩波書店
- 河合 隼雄(1999). 心理検査と心理療法 精神療法, 25(1), 3-7.
- 河合 隼雄(2000). 心的外傷の癒しの彼岸 河合 隼雄・空井 健三・山中 康裕

- (編) 臨床心理学体系 17 巻 心的外傷の臨床 金子書房
- 河合 隼雄(2001). 事例研究の意義 臨床心理学, 1(1), 4-9.
- 河合 隼雄(2005). 物語の知・臨床の知——夢の物語—— 臨床心理学, 5(4), 547-552.
- 河合 隼雄(2008). 生きるとは, 自分の物語をつくること 新潮社
- 河合 俊雄(1998). 概念の心理療法——物語から弁証法へ—— 日本評論社
- 河合 俊雄(2003). 心理療法とポストモダンの意識 横山 博(編) 心理療法 新曜社
- 川部 哲也・川戸 圓(2009). 用語解説 中沢 新一・河合 俊雄(編) 思想家 河合隼雄
岩波書店
- 川部 哲也(2009). 身体症状への意味づけ——風邪体験のインタビュー調査を通して——
伊藤 良子・大山 泰宏・角野 善宏編 身体の病と心理臨床 創元社
- 川寄 克哲(2005). 夢の分析——生成する〈私〉の根源—— 講談社選書メチエ
- 神田橋 條治(1984). 追補精神科診断面接のコツ 岩崎学術出版社
- 神田橋 條治(1990). 精神療法面接のコツ 岩崎学術出版社
- 神田橋 條治(2009). 治療のこころ 第15巻 問いに答える4 花クリニック神田橋研究会
- 神田橋 條治(2012). 精神科講義 創元社
- Kleinman, A. (1988). The Illness Narratives. New York: Basic Books. (クラインマン, A.
江口 重幸・五木田 紳・上野 豪志(訳) (1996) 病いの語り 誠信書房)
- 木村 敏(1972). 人と人との間——精神病理学的日本論—— 弘文堂
- 吉良 安之(1997). カウンセリングにおける人間関係を通じての主体感覚の賦活 心理臨床
学研究, 15(2), 121-131.
- 木谷 秀勝(1994). 思春期に非行を起こしたA子の母親面接過程—— 偽りの「良い家族か
ら本当の「自立した家族」へ—— 心理臨床学研究, 12(1), 51-61.
- 窪田 文子(1991). ある強迫神経症に対する心理療法としての動作法 心理臨床学研
究, 9(2), 17-28.
- 窪田 由紀(1997). 友人たちとの疑似家族のなかで育ちなおしたA君への援助——学生相
談室によるサポート・ネットワークの構築—— 心理臨床学研究, 15(1), 77-88.
- 倉光 修(2009). 自閉症と診断される人々に対するカウンセリングについて 伊藤 良子他
(編) 発達障害と心理臨床 創元社
- 楠本 和歌子(2015). 心理テストとナラティブ①——TATを手がかりに—— 森岡正芳(編)
臨床ナラティブアプローチ ミネルヴァ書房

- 小俣 和義(1999). 母親と協力して支えた思春期女子の事例——同一治療者による母子並行面接を通して—— 心理臨床学研究, 16(6), 538-549.
- 広辞苑第6版(2008). 新村出編 岩波書店
- 後藤 由紀子(1998). 行動化を契機として成長を遂げた境界例 Y 子 心理臨床学研究, 16(3), 290-301.
- Mcleod, J. (1997). Narrative and Psychotherapy. London: Sage (マクレオッド, J. 下山 晴彦(監訳) (2007) 物語としての心理療法 誠信書房)
- 前川 美行(1997). 夢に現れる“醜なるもの”のもつ意味——アトピー性皮膚炎の女性の心理療法を通して—— 心理臨床学研究, 15(1), 24-35.
- 前川 美行(1998). ある身体疾患の女性との心理療法——身体からの反逆——心理臨床学研究, 16(2), 174-185.
- 前川 美行(2002). 夢イメージにとどまることの難しさ 心理臨床学研究, 20(2), 145-156.
- 松木 邦裕(2015). 精神分析の一語 精神療法, 41(2), 113-120.
- 三宅 永(1999). ヒステリーとてんかんの関連性の再考を促した——事例の箱庭療法—— 心理臨床学研究, 16(6), 592-603.
- 村久保 雅孝(2015). エンカウンター・グループ体験を物語る 森岡 正芳(編) 臨床ナラティブアプローチ ミネルヴァ書房
- 村上 春樹(2010). 走ることにについて語るときに僕の語ること 文藝春秋
- 村瀬 嘉代子(2009). 心理療法の過程——生きられた時間を求めて——臨床心理学増刊 1, 金剛出版, 70-73.
- 森 茂起・港 道隆編 (2012). 戦争の子どもを考える——体験の記録と理解の試み——甲南大学人間科学研究所叢書 心の危機と臨床の知 12 平凡社
- 森岡 正芳(2002). 物語としての面接 新曜社
- 森岡 正芳(2008). 今なぜナラティブ? 大きな物語・小さな物語 森岡正芳編 ナラティブと心理療法 金剛出版
- 森岡 正芳(2011). ナラティブ 日本心理臨床学会(編) 心理臨床学辞典 丸善出版
- 森岡 正芳(2015). 臨床ナラティブアプローチ ミネルヴァ書房
- 森田 喜治(1999). 自己臭を訴える女性の心理療法 心理臨床学研究, 17(1), 43-54.
- 中原 睦美(1995). 病める体に苦悩する人間への援助的接近について 心理臨床学研究, 12(4), 322-332.

- 中込 四郎(2004). アスリートの心理臨床——スポーツカウンセリング—— 道和書院
- 中島 登代子(1996). 競技者と風景構成法 山中 康裕(編) 風景構成法その後の発展 岩崎
学術出版社
- 成瀬 悟策(2009). からだとこころ 誠信書房
- 中山 美智子(1996). 世代間に見る投影性同一視と真の自己の達成——「思春期不登校 A
子」の母親治療面接—— 心理臨床学研究, 13(4), 377-389.
- 野々村 説子(1995)心理療法における逆転移の問題:特に精神分析療法を中心にして 心理
臨床学研究, 12(4), 345-355.
- 野村 晴夫(2014). 生活史面接後の「内なる語り」——中高年の付随的想起に着目した
調査—— 心理臨床学研究, 32(3), 336-346.
- 野村 直樹(2006). ナラティブと医療 江口 重幸・斉藤 清二・野村 直樹(編) 金剛出版
- 野村 直樹(2015). 時間を語る——精神病院のエスノグラフィーから—— 森岡正芳(編)
臨床ナラティブアプローチ ミネルヴァ書房
- 大石 英史(1997). 「抱え」によるアプローチが関係への依存を誘発した一事例——過食症
難治例への対応をめぐる—— 心理臨床学研究, 14(4), 436-447.
- 太田 裕一(1998). 対人恐怖を訴えた回避的な青年との心理療法——治療的介入を中心と
して—— 心理臨床学研究, 16(3), 231-242.
- 岡 秀樹(1992). ある境界例患者への支持的精神療法——健康な自我の育成—— 心理臨床
学研究, 9(3), 5-17.
- 岡村 達也・小林 孝雄・菅村 玄二(2010). カウンセリングのエチュード——反射・共
感・構成主義—— 遠見書房
- 岡野 憲一郎(1995). 外傷性精神障害 岩崎学術出版社
- Prouty, G. (2002). Pre-Therapy: Reaching contact-impaired clients. UK:PCCS Books.
- Prouty, G. (2002). Pre-Therapy: Reaching contact-impaired clients. UK:PCCS Books. (プ
ラウティ.G. 岡村 達也・日笠 摩子(訳)(2001)プリセラピー——パーソン中心/体験過
程療法から分裂病と発達障害への挑戦—— 日本評論社)
- 李 敏子(1995). イギリスの入院拒食症患者の心理療法 心理臨床学研究,
12(4), 333-344.
- 斎藤 清二(1993). こころとからだの和解の過程——胃症状への固着を示した大学生の事
例を通して—— 心理臨床学研究, 11(2), 97-109.

- 斎藤 清二・岸本 寛史(2001). ナラティブ・ベイスト・メディシン 臨床における物語りと対話 金剛出版
- 斎藤 清二(2013). 事例研究というパラダイム——臨床心理学と医学をむすぶ—— 岩崎学術出版社
- 酒木 保(1994). 自閉症児の心理療法——他者論的展開とその接近法—— 心理臨床学研究, 12(2), 109-120.
- 佐々木 由利子(1998). 絵を次々に持ってきた過食症の女子学生の事例 心理臨床学研究, 16(4), 365-376.
- 佐渡 忠洋・鈴木 壯・田中 生雅・山本 眞由美(2012). バウムの描画プロセスに関する研究——バウムはどこから描かれ、幹はどのように構成されるのか—— 臨床心理身体運動学研究, 15(1), 59-68.
- 白井 聖子(2002). 関係妄想を訴えた女性との心理療法 心理臨床学研究, 20(2), 157-168.
- 菅 佐和子(1993). 思春期女子の心理療法過程に生じた——「退行」の意味—— 心理臨床学研究, 11(1), 1-12.
- 杉山 登志郎(2007). 発達障害の子どもたち 講談社現代新書
- 鈴木 壯(2014). スポーツと心理臨床——アスリートのこころとからだ—— 創元社
- 高橋 靖恵(2003). 統合失調症を病む青年との心理療法過程——本人と家族に対する支えの層状モデル—— 心理臨床学研究, 21(4), 362-373.
- 滝川 一廣(2008). 発達に遅れをもつ子への遊戯療法を考える 遊戯療法学研究, 7(1), 23-34.
- 田中 康裕(1995). 心理療法過程における「内なる異界との交通」——極度の対人緊張を訴えて来談した青年期男子の一事例から—— 心理臨床学研究, 13(1), 85-96.
- 立川 晃司(1997). 矯正施設における箱庭利用の一事例——集団生活を拒んだ受刑者への箱庭療法—— 心理臨床学研究, 15(3), 270-279.
- 田多 香代子(1992). 神経症食思不振症者の治療例——父性性からの解放——心理臨床学研究, 10(2), 52-62.
- 恒吉 徹三(2003). 母親面接における面接者-来談者関係——「反復」としての視点—— 心理臨床学研究, 21(4), 398-409.
- 土居 健郎(1977). 方法としての面接 医学書院
- 鷺田 清一(1999). 「聴く」ことの本質——臨床哲学試論—— 阪急コミュニケーションズ

- 山 愛美(2000). ある女性のイニシエーション過程 心理臨床学研究, 17(6), 582-593.
- 山中 康裕(1978). 思春期内閉 Juvenile Seclusion ——治療実践よりみた内閉神経症の精神病理—— 中井 久夫・山中 康裕(編) 思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版社
- 山中 康裕(1987). 思春期の精神病理と治療 中井 久夫・山中 康裕(編) 岩崎学術出版社
- 山中 康裕(2004). スポーツと心理臨床 臨床心理学, 4(3), 303-307. 金剛出版
- やまだ ようこ(2000). 人生を物語ることの意味——ライフストーリーの心理学——. やまだ ようこ(編). 人生を物語る 生成のライフストーリー ミネルヴァ書房
- Young, A. (1995). The Harmony of Illusions. Massachusetts: Princeton University Press(ヤング.A. 中井 久夫・大月 康義・下地 明友・辰野 剛・内藤 あかね(訳)(1999) PTSD の医療人類学 みすず書房)

博士論文に関わる研究業績一覧

【著書・論文等】

- 坂中 尚哉 (2011). スクールカウンセリングにおける自閉症の生徒との心理療法的関わり 心理臨床学研究, 27(6), 727-732.
- 坂中 尚哉 (2011). 産業臨床における仕事の語りを巡って 関西国際大学大学院心理臨床センター紀要, 4, 31-37.
- 坂中 尚哉 (2012). 心理療法における反復される語りから生まれる物語 臨床心理身体運動学研究, 14(1), 49-58.
- 坂中 尚哉 (2012). 反復し更新されるいのちの諸相——心理療法およびスポーツを主題に—— 山中 康裕(監修) 揺れるたましいの深層 創元社
- 坂中 尚哉 (2015). 反復される外傷的記憶の行方 関西国際大学大学院心理臨床センター紀要, 8, 3-7.
- 坂中 尚哉 (2016). 反復される語りの特徴について 関西国際大学大学院心理臨床センター紀要, 9. (掲載予定)

【学会活動】

- 坂中 尚哉 (2010). 休職, 復職を繰り返す中年男性との面接過程——反復の中の異質さの物語—— 日本心理臨床学会第 29 回秋季大会 (東北大学) 事例発表

